

立科町文化財調査報告書第5集

雨 境 峠

—祭祀遺跡と古道—

1995年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会

立科町文化財調査報告書第5集

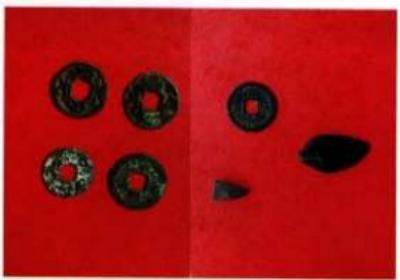
雨 境 峠

——祭祀遺跡と古道——



1995年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会



鳴石遺跡

左上：鳴石と集石遺構 左中上：集石遺構の調査（西側） 右上：調査前の鳴石遺跡の景観 右中上：調査前の鳴石
左中下：集石遺構の調査（東側） 左下：鳴石遺跡出土 右中下：鳴石東端部分 右下：円環状配石
遺物



勾玉原遺跡

左上：南東より見た勾玉原遺跡 左中上：勾玉原古東山道推定地点 左中下：円環状配石（東側） 左下：勾玉原遺跡出土遺物

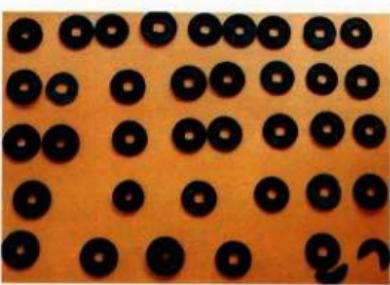
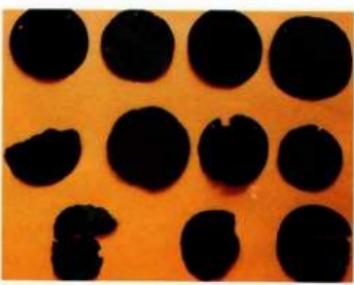
右上：調査前の勾玉原遺跡の景観 右中上：勾玉原遺跡から望む蓼科山 右中下：南西より見た勾玉原遺跡 右下：勾玉原遺跡採集遺物（山浦氏藏）



法印塚と与惣塚

左上：調査前の与惣塚（南東より） 左中上：与惣塚東面の現状 左中下：南西より見た与惣塚 左下：与惣塚出土遺物（右） 黄輪平II出土遺物（左）

右上：北東より見た法印塚 右中上：南東より見た法印塚 右中下：南東より見た与惣塚 右下：与惣塚調査風景



中与惣塚

左上：南東より見た中与惣塚 左中上：中与惣塚の主体部 左中下：中与惣塚内縁の出土状況 左下：中与惣塚出土遺物（御正体）

右上：調査前の中与惣塚 右中上：北西より見た中与惣塚 右中下：中与惣塚調査風景 右下：中与惣塚出土遺物（古銭）



鳴石原遺跡と古道

左上：鳴石原遺跡の景観 左中上：鳴石原遺跡出土遺物
左中下：鍵引II地区の古道 左下：赤沼平地区の古道

右上：猿小屋出土の巻手刀（東京国立博物館蔵）
右中下：赤沼平から望む蓼科山 右中上：勾玉原の古道
右中下：箕輪平III地区の古道 右下：信玄の上の棒道

序

古代から人々は、道や川を主要交通路として行動範囲を拡大しつつ文化を伝播し、情報を交換し、交易を盛んにして参りました。

当時、村から村へ、都から地方へと続く道は、いくつかの峠を越えての長く、険しいものであります。厳しい自然と闘い、食糧の確保、装束、方角の確認、安全祈願等々道中繰り広げられた数々の苦闘の物語は想像を絶する危険とロマンに満ちたものであり、どこをどのように往来したかは、歴史を解明するために興味深い研究課題であります。

近年、道路整備や、開発が急速に進行する中で、往時を偲ぶ貴重な史跡が失われつつあります。

立科町教育委員会では、文化財保護の観点と平成2年度から始めた町誌編纂事業の係わりから平成5年・6年と2年間にわたり、雨境峠の祭祀遺跡群の範囲確認調査を実施して参りました。これらの遺跡が過去において多くの研究者やマニアによって掘り返されたため、期待通りの遺物の発見は出来ませんでしたが、数多くの事実を確認することが出来ました。

特に鳴石遺跡においては、その周囲から想像しえなかった上円下方の基壇状の石積みが発見され、従来からの諸説通り、峠道の安全祈願をした祭祀遺跡であることが確認されました。

この報告書は、今回のこの調査結果を報告するものであります。多くの皆様にご覧いただき、ご意見をお寄せいただくとともに、文化財保護に深いご理解をいただくとともに今後の研究の一助になれば幸いです。終わりに、今回の調査を実施するに当たり、ご指導とご援助を頂きました、文化庁、県教育委員会文化課はじめ、調査団長の小林幹男先生、調査員の望月映先生・宮坂晃先生他、御協力をいただきました関係各位に対し心より感謝を申し上げご挨拶と致します。

立科町教育長 中島正恵

例　　言

1 本書は、立科町教育委員会が主体となって、遺跡の位置と範囲、および現状の確認を主たる目的として実施した長野県北佐久郡立科町大字芦田八ヶ野に所在する雨境峠祭祀遺跡群と古道の調査に関する調査報告書である。

この発掘調査は、平成5年度・平成6年度の2年度にわたり、両年度とも7月～9月の3ヶ月、延べ6ヶ月余の長期間にわたって実施した。

2 本調査の実施に際しては、長野県教育委員会文化課・立科町当局をはじめ、地元の立科町・望月町の多くの方々のご協力があった。特に、協力員の皆さんには、平成5年の記録的な冷夏・長雨、そして、平成6年の寡雨・猛暑の不順な天候の中で、終始誠意的に調査に協力いただいた。心から感謝申し上げ、労を犒みたい。

3 本調査には、国学院柳木短期大学・長野女子短期大学・新潟産業大学・白梅学園短期大学・相模女子大学の学生諸君が、調査補助員として調査に参加し、長期間にわたり、ときには休日も返上して協力してくれた。学問に対する真摯な態度と熱心な活動に、心から敬意を表し感謝申し上げる。

4 本報告書の執筆・編集は、立科町教育委員会と協議しながら、雨境峠祭祀遺跡群調査団の調査員が下記のとおり分担して行った。

I 事務局・小林幹男

II・2・III-1-(2)・2-(2)・3-(1)・(3) 小林幹男

4・5・6-(2)・7・IV-1-(8)・2-(1)・4・6・7

V-1~3・4-(2)・VI

II-1・III-1-(1)・2-(1)・3-(2) 宮坂 晃

III-5-(1)・6-(1)・V-4-(1)

IV-1-(1)~(7)・2-(2)・3・5 望月 映

5 報告書作製の作業の分担は、下記のとおりである。

〈平成5年度〉

遺構実測図の作製（現地） 望月 映・清水さつき・安川千香子
和田朱更・水原伊津子・熊井理恵

尖測図の整理・トレース 望月 映・清水さつき

遺物実測図の作製・トレース 望月 映

〈平成 6 年度〉

遺構実測図の作製（現地）	望月 咲・清水さつき・安川千香子 竹内由記子・竹内由美・中沢利英子 六川佳奈子・今井やよい・西野入ゆり
実測図の整理・トレース	望月 咲・清水さつき
遺物実測図の作製・トレース	望月 咲
地質図の作製・トレース	宮坂 晃
写真・図版の作製	小林幹男

6 本書に掲載した写真は、小林幹男が撮影したものを使用した。

兩境跡祭祀遺跡群の各遺跡は、古東山道に関係する時の祭祀遺跡、あるいは中世の古道に関係する石塚（ケルン）として、多くの先学が調査し、研究されて、貴重な報告・論文を発表されている。

今回の調査と報告書の執筆には、これら先学の研究の成果に負うところが大きい。本報告書では、各所にその一部を明示して引用させていただいた。

藤科に在住する藤沢万佐男氏・細谷の山浦清子氏・東京国立博物館・上田市立国分寺資料館・長門町古代ロマン体験館からは、貴重な資料の提供・実測・写真撮影などのご協力と便宜を与えていただいた。

藤科の与惣塚別荘に在住する土屋嘉男には、勾玉原遺跡の出土遺物・別荘地造成時の状況について多くのご教示を賜り、別荘地内のご案内をいただいた。

さらに、県内外の多くの方々が、鳴石遺跡・中与惣塚などの調査を熱心に見学され、有益なご示唆とご意見をいただいた。

本調査が予期以上の成果を収めて無事終了できたのは、これらの多くの方々、関係機関のご協力とご教示の賜物である。重ねて心から敬意と謝意を表する次第である。

平成 7 年 3 月

本文目次

序	
例　　言	
I　調査の経過	1
1　雨境峠祭祀遺跡群調査会	2
2　雨境峠祭祀遺跡群発掘調査団	3
3　調査の経過の概要	4
II　遺跡の立地と環境	12
1　自然環境	12
2　歴史的環境	19
(1)　夢科山麓と立科台地の遺跡	19
(2)　夢科山麓の祭祀遺跡と古道	21
III　夢科山麓の祭祀遺跡	25
1　鳴石遺跡	28
(1)　地形・地質的特徴	28
(2)　歴史的環境	28
2　鍵引石遺跡	32
(1)　地形・地質的特徴	32
(2)　歴史的環境	32
3　勾玉原遺跡	35
(1)　遺跡の位置と規模	35
(2)　地形・地質的特徴	37
(3)　歴史的環境	38
4　赤沼平遺跡	40
5　箕輪平遺跡	42
(1)　地形・地質的特徴	42
(2)　歴史的環境	42
6　池ノ平遺跡	44
(1)　地形・地質的特徴	44
(2)　歴史的環境	44
7　鳴石原遺跡	45
IV　遺構と出土遺物	48

I	鳴石遺跡	48
(1)	鳴石	50
(2)	鳴石および集石断面の調査	52
(3)	集石I遺構	55
(4)	巨石と集石II遺構	57
(5)	周辺地区の礫群	57
(6)	溝状遺構	58
(7)	出土遺物	59
(8)	鳴石の築造年代と構造に関する考察	61
2	勾玉原遺跡	63
(1)	発掘調査の状況	63
(2)	出土遺物	66
3	赤沼平遺跡と鍵引石道跡周辺の採集遺物	68
4	鳴石原遺跡の採集遺物	70
5	池ノ平遺跡の採集遺物	71
6	蕨手刀山上地	73
7	出土遺物についての考察	75
V	中世の石塚（ケルン）	80
1	歴史的環境	80
(1)	法印塚	81
(2)	中与惣塚	82
(3)	与惣塚	83
(4)	賽ノ河原	84
2	遺構と出土遺物	85
(1)	法印塚	85
(2)	中与惣塚	87
(3)	中与惣塚の性格と築造年代	92
(4)	与惣塚	98
3	中世の古道	102
4	信玄の俸道	105
(1)	弁天神附近の地質と地形	105
(2)	信玄の上の俸道の構造	105
VI	蓼科山麓の古道	109
1	東山道と古東山道	109

2	蓼科山麓の嶺道と草原の道	111
3	源方山の嶺道	114
4	蓼科山麓の古道の調査	117
(1)	鳴石地区の調査	119
(2)	勾玉原地区の調査	120
(3)	鍵引地区の調査	122
(4)	つづじヶ丘地区の調査	125
(5)	赤沼平地区の調査	125
(6)	箕輪平地区の調査	126
(7)	三本松地点の調査	128
(8)	古道調査のまとめ	129

図版目次

- 図版I 鳴石遺跡
 図版II 勾玉原遺跡
 図版III 法印塚と与惣塚
 図版IV 中与惣塚
 図版V 鳴石原遺跡と古道

図面目次

- 別図I 雨境峠祭祀遺跡群・鳴石遺跡実測図
 別図II 雨境峠祭祀遺跡群・法印塚遺跡実測図
 別図III 雨境峠祭祀遺跡群・中与惣塚遺跡実測図

図1	立科町大字芦田八ヶ野地区地形図	13
図2	立科町大字芦田八ヶ野地区地質図	15
図3	蓼科山麓の祭礼遺跡分布図	26
図4	地形断面図	29
図5	鳴石遺跡地形図（センター図）	31
図6	勾玉原遺跡（『県史』による）	36
図7	勾玉原遺跡と周辺遺跡の分布図	37
図8	赤沼平遺跡と鍵引石遺跡周辺の採集遺物実測図	41

図9 鳴石遺跡の遺構および地層断面図	49
図10 鳴石東側トレンチ断面実測図	54
図11 鳴石遺跡山上遺物実測図	60
図12 勾玉原遺跡位置図	63
図13 勾玉原遺跡平面図	64
図14 勾玉原遺跡の採集遺物実測図	67
図15 赤沼平遺跡採集遺物実測図	69
図16 鳴石原遺跡採集遺物実測図	70
図17 池ノ平遺跡採集遺物実測図	72
図18 猿手刀山土地分布図	74
図19 雨境峠・中世石塚（ケルン）等分布図	80
図20 法印塚断面図	86
図21 中与惣塚遺跡断面図	88
図22 中与惣塚山上遺物・御正体実測図	93
図23 中与惣塚出土遺物・蓮鎧実測図	94
図24 中与惣塚出土遺物・鉄釘実測図	95
図25 中与惣塚出土遺物・古銭実測図	96
図26 与惣塚遺跡実測図	99
図27 与惣塚出土遺物実測図	100
図28 法印塚脇・中世の古道路面の硬度図	103
図29 信玄の構造実測図	107
図30 箕輪平出土遺物実測図	116
図31 雨境峠祭祀遺跡群と古道調査地点	118
図32 鍵引I地点の古道推定地実測図	123
図33 鍵引II地点の路面の硬度図	124
図34 鍵引II地点実測図	124
図35 箕輪平II地点実測図	126
図36 箕輪平II地点の硬度図	126
図37 箕輪平III地点実測図	127
図38 三木松地点の地層断面図	128

表 目 次

表1 立科町に分布する地層序表	14
-----------------	----

表2	立科町の気象	18
表3	鳴石上石・下石最大径部分の接触面の寸法	52
表4	鳴石遺跡推定路面の硬度調査値	59
表5	蓼科山麓の祭祀遺跡・採集遺物一覧表	75
表6	剣形遺物の形式別一覧表	76
表7	有孔円板の形式別一覧表	76
表8	白玉の形式別一覧表	77
表9	石塚（ケルン）の推定複合構造	90
表10	中与懇塚出土古銭一覧表	92
表11	中与懇塚出土の御正体計測値一覧表	95
表12	中与懇塚出土の埴縫の形式と計測値一覧表	95
表13	中与懇塚北方20mの推定路面硬度	102
表14	南平麦草地籍・上の梯道の硬度	106
表15	鳴石III地点北方の古道の硬度	120
表16	D 3 グリッドを起点とする地点の硬度	121
表17	D 6 グリッドを起点とする地点の硬度	121
表18	鍵引II地点の路面の硬度	123
表19	箕輪平III地点推定路面の硬度	127
表20	三本松II地点の硬度	129

写 真 目 次

写真1	蓼科山北西麓の景観	16
写真2	蓼科第二牧場から望む蓼科山	17
写真3	大庭遺跡の復元住居	19
写真4	正明寺古墳山上遺物	20
写真5	鳴石遺跡の巨石（鳴石）	28
写真6	鍵引石	33
写真7	1,579.1mの三角点	35
写真8	勾玉原遺跡の景観	38
写真9	勾玉原遺跡の採集遺物	39
写真10	赤沼平遺跡の景観	40
写真11	箕輪平遺跡南西附近の本沢	42
写真12	箕輪平遺跡の景観	43

写真13	池ノ平遺跡採集遺物	44
写真14	鳴石原遺跡採集遺物	45
写真15	鳴石原遺跡にある雨塊峠頂上の標柱	46
写真16	調査前の鳴石遺跡	48
写真17	鳴石遺跡・集石遺構の調査	50
写真18	東側から見た鳴石	51
写真19	西側から見た鳴石	51
写真20	鳴石の東側トレンチ	52
写真21	鳴石の西側トレンチ	53
写真22	鳴石・東側トレンチ断面	55
写真23	鳴石と集石I遺構	56
写真24	鳴石遺跡のI(石と集石II)遺構	57
写真25	鳴石遺跡の円環状配石の調査	58
写真26	硬度計による調査	59
写真27	鳴石遺跡の実測風景	61
写真28	和田沢地籍の奥にある巨石	62
写真29	調査前の勾玉原遺跡	65
写真30	勾玉原遺跡の調査区	65
写真31	円環状の配石	66
写真32	勾玉原遺跡出土遺物	67
写真33	赤沼平遺跡から望む蓼科山	69
写真34	長門町古代ロマン体験館所蔵遺物	71
写真35	白樺湖畔から望む蓼科山	73
写真36	猿小屋出土の薙手刀	75
写真37	法印塚の全景	81
写真38	立科町指定文化財・中与惣塚の全景	82
写真39	南東から見た中与惣塚の現況	83
写真40	南東方向から見た法印塚	85
写真41	北西から見た中与惣塚	89
写真42	南西から見た中与惣塚	89
写真43	中与惣塚の全景	90
写真44	中与惣塚の主体部	91
写真45	北西裾部の遺物出土地点	91
写真46	中与惣塚出土の薙手刀	97

写真47	北西から見た与惣塚	100
写真48	南西から見た与惣塚	100
写真49	法印塚脇の古道跡	102
写真50	勾玉原Ⅲ地籍の古道	103
写真51	硬度計による調査風景	104
写真52	麦草附近の信玄の上の轍道	106
写真53	赤沼平附近の郡境の尾根	113
写真54	薬研ノ沢附近の古道	115
写真55	健引Ⅱ地点の推定古東山道	117
写真56	鳴石Ⅲ地点の古道	119
写真57	勾玉原Ⅰ地点の古道	121
写真58	勾玉原遺跡東トレント下層の礫	122
写真59	箕輪平Ⅱ地区南東の本沢の景観	127
写真60	三本松Ⅱ地点の地層調査風景	129

I 調査の経過

立科町は、蓼科山の北西麓に広がる東西7km、南北26kmの南北に長い町で、中央の雨境附近が瓢箪のように縫れている。雨境峠祭祀遺跡群は、雨境より南部の芦田八ヶ野地籍に点在し、附近には女神湖・白樺湖・蓼科牧場などのリゾート観光地“白樺高原”がある。

この遺跡群は、昭和4（1929）年に藤森栄一氏が諏訪史編纂会の事業として調査に訪れている。そして、昭和6（1931）年には八幡一郎氏、昭和8（1933）年には大場磐雄氏らが相次いで現地調査に訪れ、一志茂樹氏も幾度か現地を踏査している。

そのころから鳴石、および鍵引石は、峠の祭祀遺跡（磐石）として注目され、勾玉原遺跡は、豊富な遺物を出土する遺跡として周知されていた。また、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の傍らに点在する法印塚・中沢懸塚・与懸塚などの石塚（ケルン）、および賽ノ河原は、中世の道に關係する祭祀遺跡として知られている。

このように雨境峠の祭祀遺跡は、先学の調査・報告によって広く県内外に紹介され、研究者の間でも注目されて早急な学術調査の実施と保存の必要性が説かれてきた。

蓼科山の北西山麓は、昭和20年代ころまで、江戸時代に開発された用水堰とその普請、植林などの他の手も入ることなく、自然の姿をとどめていた。しかし、昭和30年代以後の経済の高度成長と観光開発の進展は、蓼科の人自然にも影響を与え、景観にも大きな変化があらわれてきた。

そして、雨境峠遺跡群の与懸塚・中沢懸塚・賽ノ河原は、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の工事のために採石が行われて、一部が破壊される事態が発生した。このため昭和41（1966）年に「新産都市等開発地域埋蔵文化財分布調査」の一環として緊急に調査が行われ、詳細な報告書が作成された。

また、雨境峠祭祀遺跡群が所在する芦田八ヶ野地籍では、昭和30年代後半から別荘地の造成・分譲がはじまり、勾玉原遺跡附近も「与懸塚」別荘地の名称で開発され、遺跡の現状も大きく変化し、貴重な文化財が失われつつあった。

立科町では、平成元年度に大庭遺跡の発掘調査を行い、平成2（1990）年4月から「立科町誌」の編纂事業も開始されて、歴史研究・学術的調査の気運も次第に醸成されてきた。そして、平成3年度には光徳寺にかかる龍川庵寺跡の発掘調査も行われた。雨境峠祭祀遺跡群の調査は、やや遅きに失した観はあるが、早急に遺跡の位置と範囲、現状を把握して保存を図る必要性が強く叫ばれるようになった。

雨境峠附近的調査は、平成3年11月8日（金）に県教育委員会の担当者との話し合いの中で話題になり、同年11月25日（月）に赤沼平で六川新道の並木の間を試掘して、遺構の保存状態と地層の状況を確認した。

さらに、12月2日（月）には雨境峠祭祀遺跡群と女神湖～白樺湖間の古道推定路を実際に踏査

して現状を把握し、引続いて12月26日（木）に古道関係の資料を収集するため六川長三郎氏に案内を依頼して女神湖～箕輪平間の古道推定路を踏査した。

立科町では、平成4年に鳴石遺跡の周辺で、林道の改修工事を計画し、古道との関係を把握するため、6月22日（月）に緊急調査を実施した。この調査は、鳴石遺跡の北側と南方約130mの地点の2箇所で、幅約1mのトレンチを東西に長く設定して調査し、幅3.6mなどの路面と推定される古道の遺構を検出し、遺構が地下30cm前後の地層に埋没していることが確認された。

雨境峠祭祀遺跡群の調査は、このような経過を経て、県教育委員会と協議し、協力を得ながら、平成4年度は町の単独事業として、祭祀遺跡に関係する古道推定路の調査を実施した。

そして、平成5年度には、調査会、および調査団を組織し、平成5・6年度の2年間にわたって文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金、長野県の文化財保護事業補助金を受け、鳴石・鍵引石・勾玉原遺跡、法印塚・中与懸塚・与懸塚の範囲確認調査、および祭祀遺跡に関係する古道の発掘調査を実施することになった。

この調査のために設置された雨境峠祭祀遺跡群調査会、および雨境峠祭祀遺跡群調査団の構成と組織は次のとおりである。

1 雨境峠祭祀遺跡群調査会

会長 市川正志 立科町教育委員長

副会長 中島正恵 立科町教育委員会教育長

保科信史 立科町文化財保護委員会会長

調査団長 小林幹男 立科町誌編纂委員長・長野女子短期大学教授

（日本考古学协会会员・日本人類学会会员）

理事 土屋わか 立科町教育委員長職務代理

矢崎大悟 立科町教育委員

奥村栄市 立科町教育委員

中村一朗 立科町文化財保護委員会副会長

田中 幹 立科町文化財保護委員

佐藤芳男 立科町文化財保護委員

瀧澤 猛 立科町文化財保護委員

小林 亮 立科町誌常任編纂委員

事務局長 堀 利一 立科町教育委員会教育次長（平成5年度）

中山義人 立科町教育委員会教育次長（平成6年度）

事務局員 向角幸男 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係長

笠井恒翁 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係主任

竹重和明 立科町教育委員会社会教育・同和教育第2係主事

2 雨境峠祭祀遺跡群発掘調査団

〈平成5年度〉

調査団長 小林幹男 立科町誌編纂委員長・長野女子短期大学教授

(日本考古学協会会員・日本人類学会会員)

調査員 望月 映 長野県塩尻高等学校教諭・前長野県埋文センター専門主事

調査作業主任 田中 幹 立科町文化財保護委員

調査補助員 清水さつき (国学院柳本短期大学学生)

和田朱更・安川千香子

永原伊津子・熊井理恵 (以上長野女子短期大学学生)

協力員 倉見 渡 (長野県考古学会会員)・吉村浩次・小池嘉一・川井 瞳

今井徳一郎・笹井義幸・竹重祐夫・伊藤 理・小池 弘・荻原 伸

川中千里・今井真知子・山浦松子・伊藤恵二・清水俊行

〈平成6年度〉

調査団長 小林幹男 立科町誌編纂委員長・長野女子短期大学教授

(日本考古学協会会員・日本人類学会会員)

調査員 望月 映 長野県塩尻高等学校教諭・前長野県埋文センター専門主事

宮坂 晃 長野県長野高等学校教諭

調査作業主任 田中 幹 立科町文化財保護委員

調査補助員 清水さつき (国学院柳本短期大学学生)

六川佳奈子 (新潟産業大学学生)

今井やよい (白梅学園短期大学学生)

西野入ゆり (柏原女子短期大学学生)

竹内由記子・竹内由美

中沢利英子・安川千香子 (以上長野女子短期大学学生)

協力員 倉見 渡 (長野県考古学会会員)・荻原 伸・今井徳一郎

竹重祐夫・伊藤 理・西野入立穂・小池 弘・須野原千尋

小池嘉一・川井 瞳・高橋南太・原川英之・荻原一彦

高橋 仁・小松 佳・武井 真・川畑 実

3 調査の経過の概要

〈平成5年度〉

雨堺跡祭配遺跡群の調査は、事前に文献調査を詳細に行い、調査地点・調査の範囲を決定するための現地踏査を実施して、平成5年6月21日（月）に鳴石遺跡・法印塚、および古道調査地点の鳴石II・勾玉原II地点、鍵引II・III・IV地点、赤沼平・箕輪平I地点の調査区を設定し、標識の杭打ちを行った。そして、7月11日（日）と25日（日）の2日間にわたって調査の諸準備、鳴石遺跡のグリッド設定作業を実施し、7月27日（火）から発掘作業に着手した。

法印塚の調査は、7月25日（日）に周辺部分の雑木と地表の熊笹などの芝土の除去に着手して、8月9日（火）にグリッドを設定し、8月12日（金）から鳴石遺跡の調査と平行して本格的な発掘調査に着手した。

法印塚の現地調査は、8月26日（木）まで行い、鳴石遺跡の現地調査は、9月3日（金）まで継続された。

また、古道関係の調査は、鳴石遺跡と法印塚の調査を睨みながら、8月23日（月）に勾玉原III地点から着手し、順次調査地点を移動して実施した。そして、実測図の整理・トレースなどの作業は、平成6年3月まで及んだ。

平成5年の夏は、雨の日が多く、発掘作業・実測作業などが計画より大幅に遅れ、長期間にわたる困難な調査になったが、調査員・調査補助員、協力員の方々の献身的なご協力と尽力によって無事調査を終了し、予期以上の成果を収めることができた。

調査日誌

6月21日（月）晴 鳴石遺跡・法印塚、および古道調査予定地の鳴石II・勾玉原II・III地点、鍵引II・III・IV地点、赤沼平・箕輪平I地点の調査範囲を決定し、調査区に標識の杭打ちを行う。

7月11日（日）曇後晴 鳴石遺跡で調査の安全祈願を行い、調査の準備作業とグリッドの設定作業を行う。

調査区のグリッドは、東西をA～F、南北を1～5として、 $4 \times 4\text{ m}$ のグリッド30を設定した。主体部の鳴石（巨石1）の周辺では、精査と実測の便宜を考え、 $4 \times 4\text{ m}$ のグリッドを4分の1の $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドに分割して調査を実施した。

鳴石遺跡の発掘調査は、主体部（鳴石）のA-1～C-1グリッドの北半分、およびA-C-2～3グリッドの全区とその周辺、巨石IIのD-3～4グリッドの西半分、E-3～4グリッドの全区とその周辺部を除き表土の芝土を削土することから始めた。

また、勾玉原II・III地点でもトレンチを設定して杭打ちを行い、トレンチの記号番号は、鳴石遺跡と同様に、東西をA～、南北を1～とした。以下全調査区の記号番号は、この基準によることにした。協力員5名

7月25日（日）曇 法印塚の主体部（石塚）を除き、周辺部の雜木・熊笹などの除去作業を行う。

鳴石遺跡の調査範囲は、遺跡の範囲が当初の予想を越えてさらに西方へ広がる可能性が認められたので、西方にG列のグリッドを増設した。

鍵引II・III・IV地点のトレンチを設定する。協力員4名

7月27日（火）晴 鳴石遺跡の調査は、A-1・2グリッド、西側縁辺部のF1・3・5グリッドから発掘調査に着手する。

群馬県藤岡市市誌編纂委員会の委員一行が見学に見える。協力員9名

7月28日（水）晴 南東隅のG-1・2グリッド付近に大きな礫の円環状の配石を認めたので、西方にH-1～5グリッドを増設し、北側にも調査区を拡大して6グリッド列、B～Fグリッドでは7グリッド列の調査区を増設する。

鳴石遺跡の歯辺部の調査を前日に引き継いで行い、遺跡西南隅のG1・2グリッドの円環状配石の精査を行う。天候に恵まれ、調査が順調に進行する。

E-6グリッドから石皿の破片を検出する。協力員11名

7月29日（木）晴 鳴石遺跡A-5・B-1・G-1グリッドの調査、巨石IIの周辺部の精査を行う。協力員12名

7月30日（金）曇後雨 鳴石遺跡A-3～5、C-5、D・F-5グリッドの発掘調査、および前日の作業を継続して行う。A-3グリット東端から古銭（寛永通宝）を検出する。D-4グリッド覆土中から須恵器を検出する。午後から雨が激しくなり、午後2時30分調査を中止する。協力員11名

8月2日（月）曇 鳴石遺跡の精査を継続し、B-6グリッドの調査、平行して精査の終了したグリッドの実測を開始する。調査補助員4名・協力員10名

8月3日（火）雨 雨天のため発掘調査を中止し、調査資料の整理を行う。

調査補助員3名。協力員1名

8月4日（水）曇・時雨 鳴石遺跡のD-2、E-1・2、F-2グリッドの発掘に着手し、前日の発掘作業・実測作業を継続する。

鳴石遺跡の主体部、鳴石（巨石I）の周囲に、鳴石を中心にして東西南北方向に幅80cmのトレンチを設定し、C-3に設定した西側のトレンチから発掘に着手する。

調査補助員4名・協力員12名

8月5日（木）晴後曇一時雨 C-3トレンチの調査を継続し、B-2に設定した南トレンチの調査に着手する。平行して周辺部の発掘作業を行う。

鳴石（巨石I）の周囲に礫の集石が発見され、礫上の覆土と礫間の土砂を慎重に除去し、清

操作業を進める。調査補助員4名・協力員12名

8月6日（金）雨 博天のため、発掘作業を中止し、図面の整理作業を行う。

調査補助員3名・協力員1名

8月7日（土）曇後晴 鳴石遺跡の実測作業を中心にして、主体部トレンチB-5グリッドに設定された北側トレンチの調査に着手、礫の間から古銭（寛永通宝）・須恵器片を検出する。平行して周辺部の精査、H-1・2グリッドの円環状配石の精査を継続する。

調査補助員2名・協力員1名

8月8日（日）曇時々小雨 鳴石遺跡の実測作業を中心にして、主体部トレンチと周辺部の精査を行う。鳴石（巨石I）の周囲の集石遺構は、およそ南北11m、東西9m以上の方形と推定される。調査補助員4名・協力員1名

8月9日（月）曇 鳴石遺跡の主体部トレンチの発掘・清掃作業を継続し、平行して周辺部のG・H-3・4グリッドの調査、A-5・6グリッドの精査、実測作業を行う。

鳴石遺跡の調査が整理段階に入ったので、法印塚に2×2mのグリッドを東西方向にA～I、南北方向に1～8グリッドの計72グリッドを設定し、実測時には4分の1の1×1mのグリッドに分割して実施した。調査補助員5名・協力員12名

8月10日（火）曇 鳴石遺跡の主体部集石遺構の発掘・清掃作業を継続し、平行して周辺部の精査と実測作業を行う。鳴石遺跡の主体部・鳴石（巨石I）の周囲の既設トレンチの中間に、南東・南西・北東・北西方向に幅80cmのトレンチを増設し、発掘作業を行う。

調査補助員5名・協力員15名

8月11日（水）曇時々雨 鳴石遺跡の周辺部の精査と実測作業を継続し、本日で発掘作業はほぼ終了する。主体部トレンチの発掘・清掃作業と精査がほぼ終了したので、2×2mのグリッドによる全面発掘調査に移行する。調査補助員5名・協力員11名

8月12日（木）晴 鳴石遺跡の実測作業、主体部集石遺構の発掘・清掃作業を継続し、鳴石（巨石I）の周囲に、およそ210cm幅の一段高い円環状の集石があることを確認する。法印塚の発掘作業に着手する。大候に恵まれ作業は順調に進行する。調査補助員5名・協力員9名

8月13日（金）晴 鳴石遺跡の主体部集石遺構の精査と実測作業を行い、発掘作業がほぼ終了する。法印塚の発掘・清掃調査を継続し、鳴石IIトレンチの発掘調査に着手する。

調査補助員5名・協力員8名

8月17日（火）曇時々雨 鳴石遺跡の実測作業、法印塚・鳴石II地点の発掘調査を継続し、鳴石II地点のトレンチを西、および南側に拡張して精査する。

鳴石遺跡の実測作業をほぼ終了する。

鳴石遺跡には、連日多数の見学者・観光客が見学に訪れ、質問する人も多く、関心の高さがうかがわれる。調査補助員5名・協力員7名

8月18日（水）曇 法印塚の実測作業に着手する。県教育委員会の小池指導主事・桐原健氏が来

訪する。調査補助員 5名

8月19日（木） 曇後晴 法印塚の発掘作業と実測作業を継続する。調査補助員 5名・協力員 1名

8月20日（金） 曇 法印塚の発掘作業と実測作業を継続し、ほぼ調査を終了する。

調査補助員 5名・協力員 1名

8月23日（月） 晴 古道関係の調査に着手する。勾玉原II・III地点の発掘作業と実測を行う。調

査補助員 1名・協力員 1名

8月24日（火） 晴 勾玉原II・III地点の発掘作業と実測、および鍵引II・III・IV地点の発掘作業と実測を行う。調査補助員 1名・協力員 6名

8月25日（水） 晴 鍵引II・III・IV地点の実測、および赤沼平と箕輪平I地点の発掘作業と実測を行う。勾玉原II地点のトレンチA-4～6から多数の黒曜石粒が検出される。

調査補助員 1名・協力員 5名

8月26日（木） 曇 鍵引II地点・赤沼平地点の実測作業と法印塚の実測図の確認・調整作業を行う。調査補助員 1名・協力員 6名

8月27日（金） 雨 現場に到着したが、台風11号の影響による荒れ模様のため調査を中止して引き上げ、図面のトレース作業を行う。調査補助員 1名・協力員 1名

8月28日（土） 晴 鍵引II地点・赤沼平・箕輪平I地点の精査と実測作業、および勾玉原II地点の黒曜石出土地区の補充調査、および地層断面図の作製作業を行う。調査区内の落葉松の根元に土を入れ、落葉松林の保護を図る。調査補助員 1名・協力員 4名

8月30日（月）・31日（火） 9月1日（水） 図面の整理、およびトレース作業を行う。

調査補助員 1名

9月2日（木）・3日（金） 鳴石遺跡のレベル測量と南側壁面の断面図作製作業を行う。

調査補助員 1名・協力員 1名

9月6日（月） 図面の整理、およびトレース作業を行う。調査補助員 1名

9月12日（日） 曙 雨境峠祭祀遺跡群平成5年度発掘調査現地説明会を行い、県内外から多数の見学者が参加する。

10月12日（火） 晴 各調査区の埋め戻しを行い、現地調査の総てを終了する。

〈平成6年度〉

調査の着手に先立ち、文献調査と再三にわたり現地踏査を行って調査計画を策定する。調査の諸準備は、平成6年6月12日（月）と7月18日（月）の2日間にわたり、調査区の選定と調査範囲の決定のための準備調査を実施し、標識の杭打ちを行った。本年度の祭祀遺跡群の発掘調査は、勾玉原遺跡、および中与惣塚・与惣塚の3箇所を計画したが、まず7月25日（月）に中与惣塚の調査から着手した。

中与惣塚では、当初石塚（ケルン）の南東隅を起点（A-1）にして1×1mのグリッドを設定

したが、調査の進行に伴って南側に7グリッド、北側に2グリッド、西側に4グリッドの調査区を拡張して遺構を追究した。このため実測図では、記録上の便宜のために、南北の起点を南側に7m移動し、当初の起点A-1をA-7と読み替えて(以下順次繰り下げる)、一連番号に修正して作成した。

従って、中与惣塚のグリッドは、南北にA-1～A-27グリッド、東西にA-1～P-1グリッドの計421グリッドとし(P-17～P-27の11グリッド部分は拡張していない)、日誌中のグリッドの記号・番号も同様に修正してある。

勾玉原遺跡の調査は、協力員の人員の配分と中与惣塚の調査の状況を踏まながら、7月26日(火)に草刈りをして、翌27日(水)グリッドを設定し、28日(木)から発掘調査に着手した。

勾玉原遺跡のグリッドは、南東隅を起点A-1にして 2×2 mのグリッドを東西にA～G、南北1～10の計70グリッドを設定したが、調査の進行に伴い東側に1グリッド列を増設し、さらに、西南隅でも円環状配石を追究するため、調査区を拡張し、H-1・2グリッドを増設した。

実測図では、この拡張区を統一的に記述するため、A-1をB-1に読み替えて記録し(以下順次繰り下げる)、調査日誌も同様に修正してある。

与惣塚の調査は、中与惣塚の調査の進行状況を睨みながら8月5日(金)に着手し、石塚(ケルン)の南東隅を起点A-1として、 1×1 mのグリッドを東西にA～J、南北に1～16の計160グリッドを設定して実施した。

鳴石遺跡の集石遺構の精査は、中央やや南寄りに幅80cmのトレンチを東西に設定し、8月8日(月)に調査を開始し、8月12日(金)には現地調査を終了した。鳴石遺跡南西隅の円環状配石の精査も、この調査と平行して実施した。

古道推定地点の調査は、勾玉原遺跡・中与惣塚・与惣塚の発掘調査、および実測がほぼ終了した8月18日(木)に着手し、つつじヶ丘・夢科麦草(信玄の上の林道)・箕輪平II・箕輪平III・三本松の各地点を順次精査して8月22日(月)には現地調査を終了した。

その後、実測図の整理・トレースなどの室内作業を行い、補充調査と資料整理は平成7年3月まで継続的に行われた。

2年間にわたる兩境嶺祭祀遺跡群と古道の調査は、無事終了して報告書作成の段階を迎えた。本調査に献身的にご協力された多くの皆さんに、心から敬意を表し、深甚なる謝意を表する次第である。

調査日誌

6月12日(日) 曇後雨 古道関係の調査地点つつじヶ丘・夢科麦草(信玄の上の林道)・箕輪平II・箕輪平III・三本松地籍を実地調査して調査区を選定し、調査範囲を決定して標識の杭打ちを行う。

7月18日（月）晴 勾玉原遺跡・中与惣塚・与惣塚の調査区を決定し、調査区に標識の杭打ちを行う。

7月25日（月）晴 小与惣塚の南東隅を起点（A-1）にして、石塚（ケルン）造構の全体をカバ--するように、 1×1 mのグリッドを南北に1~18列、東西にA~L列の計216グリッドを設定し、頂上部分から裾部に向って疊間の土砂と落葉松などの枯葉を除去する清掃と精査を行い、平行して石塚（ケルン）の範囲を明確にするため、裾部の発掘調査を南側部分から開始した。

石塚（ケルン）表面の散土は、前年調査した法印塚ではかなりの厚さで認められたが、中与惣塚の場合は、ほとんど覆土がなく、雑草の下に石塚（ケルン）の礎面が露出していた。石塚（ケルン）中央の主体部分は、さらに、内部構造が完全に露出し、掘り返した痕跡が歴然としていた。これはいずれかの機会に発掘されたか、盗掘されたものであろう。協力員4名

7月26日（火）晴 中与惣塚の発掘調査を継続し、勾玉原遺跡調査区の草刈りを行う。

協力員3名

7月27日（水）晴 中与惣塚の調査を継続する。勾玉原遺跡のグリッドを設定する。調査区の東南隅を起点A-1にして、 2×2 mのグリッドを東西にA~G、南北に1~10の計70グリッド設定する。調査補助員2名・協力員5名

7月28日（木）晴 中与惣塚の調査を継続する。勾玉原遺跡の地形測量を実施し、B-1・9、C-3・5、G-1・3・6グリッドから発掘調査に着手する。

調査補助員5名・協力員11名

7月29日（金）晴 中与惣塚・勾玉原遺跡の調査を継続し、中与惣塚・与惣塚の地形測量を行う。

7月30日（土）晴 中与惣塚の西・北裾部の精査を行い、I・J-26グリッドを中心に、裾部の疊の間から開元通寶・寛宋通寶・熙寧元寶・咸平元寶などが相次いで検出される。

勾玉原遺跡のB-6・8、D-6、E-1、F-3グリッドの調査を行う。

調査補助員5名・協力員9名

7月31日（日）晴 中与惣塚の調査と実測を行い、本日までにA・B-8~15、C・D・E-8~13、F・G・H-8~14、I-8・9・11~14グリッドと西北裾部の精査をほぼ終了する。

8月1日（月）晴 勾玉原遺跡の発掘調査、および中与惣塚の精査を継続し、中与惣塚の実測を行う。調査補助員4名・協力員7名

8月2日（火）晴 勾玉原遺跡の発掘調査を継続し、G-8グリッドから須恵器片を検出する。中与惣塚の精査・実測を継続する。調査補助員2名・協力員8名

8月3日（水）晴 勾玉原遺跡の発掘調査を継続し、C-6グリッドから須恵器片を検出する。中与惣塚の精査・実測を継続する。連日好天に恵まれ、調査が順調に進行する。

8月4日（木）晴 勾玉原遺跡と中与惣塚の精査、および実測を継続する。中与惣塚の集石が西側に広く検出されたので、調査区を西南方へ拡張し、M・N・O-1~27グリッド、P-1

～16グリッドを設定して精査する。調査補助員4名・協力員8名

8月5日（金）晴 中与惣塚の調査区の拡張に伴い、町指定文化財保護のために設置されていた鉄橋を撤去し、測定と実測を継続する。勾玉原遺跡の調査を継続する。

本日より与惣塚の発掘調査に着手する。調査は頂上より裾部に向って実施したが、石塚は主要地方道廻訪・白樺湖・小諸線の工事の際の採石により東側半分が削られ、北側・西南裾部も採石によってかなり破壊されている。調査補助員7名・協力員11名。

8月6日（土）晴 勾玉原遺跡・中与惣塚の調査と実測を継続し、中与惣塚の精査は、本日ほぼ終了する。与惣塚の調査は、石塚（ケルン）斜面の調査と裾部の確認調査を平行して実施し、北側裾部の輪郭をほぼ確認する。調査補助員6名・協力員1名

8月7日（日）晴 中与惣塚の実測作業を継続し、本日ほぼ終了する。

中与惣塚のD～J-7とN-20～24にトレントを設定して地層断面の調査と石塚の構造調査を行う。調査補助員6名

8月8日（月）晴 鳴石遺跡の集石造構の構造調査に着手し、A-2グリッドのやや東寄りから鳴石（巨石1）に向けて、幅約80cmのトレントを心線部分で390cm、西側部分でC-2グリッドの東南寄りから鳴石（巨石1）に向けて、心線部分で190cmのトレントを設定して精査する。

勾玉原遺跡の調査・実測を継続する。与惣塚の発掘作業を継続し、南側裾部分の輪郭もほぼ確認し、南北の径を約13.3mと推定する。石塚の頂上附近から中世の土器を検出する。

調査補助員6名・協力員12名

8月9日（火）晴 勾玉原遺跡の調査と実測を継続する。与惣塚の発掘作業を継続し、本日から実測作業に着手する。

鳴石遺跡集石造構のトレント掘りを継続し、西南隅の円環状配石の調査にも着手し、内部にサブトレントを設定して精査する。日本大学の亀井正道氏が調査の見学に来訪する。

与惣塚別荘の土屋嘉男氏が調査を見学し、勾玉原遺跡の別荘造成時の状況と遺物の出土状況についてお話をいただき、現地の案内をお願いした。調査補助員7名・協力員14名

8月10日（水）曇 鳴石遺跡集石造構の構造調査は、トレント掘りをほぼ終了し、実測と地層断面図の作製に着手する。地層の断面は、東側トレント南壁に2～4層の硬く締った地層があり、その上層に大きな石や円礫が積まれていた。

勾玉原遺跡の調査は、調査区を東側に拡張し、A～C列グリッド附近を中心に、古道路面の追跡調査を実施する。古道はほぼ南北に走っていると推定されるので、表面の調査と併せて、調査区の南北端に東西のトレントを設定し、地層断面からも追究し、併せて大起製貢人式土壤硬度計を用いての硬度調査も行う。

勾玉原遺跡南西隅の円環状配石の内部にトレントを設定して精査する。

与惣塚の調査は、石塚（ケルン）の精査と実測を継続する。調査補助員6名・協力員15名

- 8月11日（木）晴 勾玉原遺跡では、古道推定路の精査を中心に実施する。鳴石遺跡の調査は、実測がほぼ終了し、埋め戻しに入る。
中与惣塚のレベル測量と実測図の調整作業を実施し、調査を終了する。与惣塚では、石塚（ケルン）の実測とレベル測量を実施する。調査補助員7名・協力員15名
- 8月12日（金）晴 勾玉原遺跡の古道推定路を精査し、実測に入る。与惣塚の精査と実測をほぼ終了する。調査補助員8名・協力員8名
- 8月13日（土）晴 勾玉原遺跡の実測を継続する。
与惣塚のレベル測量を終了する。調査補助員7名
- 8月17日（水）晴 勾玉原遺跡の実測を継続する。調査補助員2名
- 8月18日（木）曇一時雨 勾玉原遺跡の実測を継続する。
古道関係の調査に着手し、つつじヶ丘・箕輪平II・夢科麦草・三本松の発掘調査と大起製貫入式土壤硬度計を用いての硬度調査を実施する。調査補助員3名・協力員8名
- 8月19日（金）曇 勾玉原遺跡の実測を継続し、ほぼ終了する。
箕輪平II・III・夢科麦草・三本松の古道推定路の発掘調査を実施する。
調査補助員3名・協力員8名
- 8月20日（土）晴 箕輪平II・III・夢科麦草・三本松の古道推定路の発掘と実測を行う。箕輪平IIから8世紀ごろと推定される土師器を検出する。調査補助員3名・協力員5名
- 8月22日（月）曇 箕輪平III・三本松の古道推定路の発掘と実測を行い、現地調査をほぼ終了する。調査補助員2名・協力員4名
- 8月23・24・26・29・30・31日 実測図の整理とトレースを行う。調査補助員2名・協力員1名
- 9月10日（土） 平成6年度兩境峠祭祀遺跡群の現地説明会を行う。

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境

立科町は、八ヶ岳連峰の北山麓に広がる南北に長い町であり、面積が66.82km²の緑豊かな高原の町である。そして、立科町は、北佐久郡の西端に位置して、小県郡と茅野市に境を接している。

立科町の南北の長さは、およそ26km、南端が蓼科山の南西麓にあるスズラン峠（北緯36°05'附近）で茅野市と接し、北端は藤沢の六ヶ沢地蔵（北緯36°19'附近）で北佐久郡北御牧村と接している。また、東西の幅はおよそ7km、東端が塩沢の社口地蔵（東経138°21'）で北佐久郡望月町と接し、西端が蓼科山の西麓にある大門峠（東経138°14'）で小県郡長門町と接している。

立科町は南北に長く、町の中央附近に位置する雨境の東西の幅が最も狭く、僅かに63mで、東側が望月町、西側が長門町と境を接している。これより南方は、蓼科山麓の高原地帯、北方が山麓から田園地帯へと広がる山麓の台地で、雨境が文字どおり立科町の自然と風土、産業経済の様子を分けていている。

南の高原地帯は、立科町とこの地方一帯を潤す豊かな「蓼科の水」の水源地帯であり、雨境峠祭祀遺跡群と総称される鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石など、古東山道に関係すると考えられている遺跡群がある。そして、雨境峠の附近にある法印塚・中与惣塚・与惣塚などの3つの石塚（ケルン）と賽ノ河原遺跡は、鎌倉時代後半から室町時代初期ころに築かれた中世の祭祀遺跡である。

また、北側の台地は、水田とリンゴなどの果樹園や畠地の広がる田園地帯で、最近は各種の流通産業や製造業などの商工業も発達している。

立科町の人口は8,663人、世帯数が2,568世帯（平成7年1月1日現在）で、南に蓼科山を望み、北に浅間連峰を望む山紫水明の町である。

さらに、蓼科山南西麓の白樺湖畔には、池ノ平遺跡・御座岩遺跡があり、鳴石遺跡などと同じ古東山道に関係する遺跡と考えられ、両遺跡群の中間地点の平地にある箕輪平遺跡も同類の遺跡と考えてよいであろう。

立科町は、地質学的にはフォッサマグナ（大地溝帯）と呼ばれる地質区に属している。ここは新生代・第三紀中頃（約2,000万年前）に大陸没が発生し、海となつたところへ多量の凝灰岩を挟む厚い地層が堆積した部分である。その後、フォッサマグナ区は、第三紀の終り頃までには大部分が陸化したが、この頃になって八ヶ岳山下～小諸にかけて、ほぼ南北方向の陥没が再び発生し、広大な湖が生じた。これを小諸陥没盆地と呼ぶ。

第四紀の初め頃（約180万年前）に霧ヶ峰や八ヶ岳の火山活動が始り、これに伴って放出された膨大な噴出物は、この湖を埋立て、さらに巨大な火山体を形成していったと考えられる。

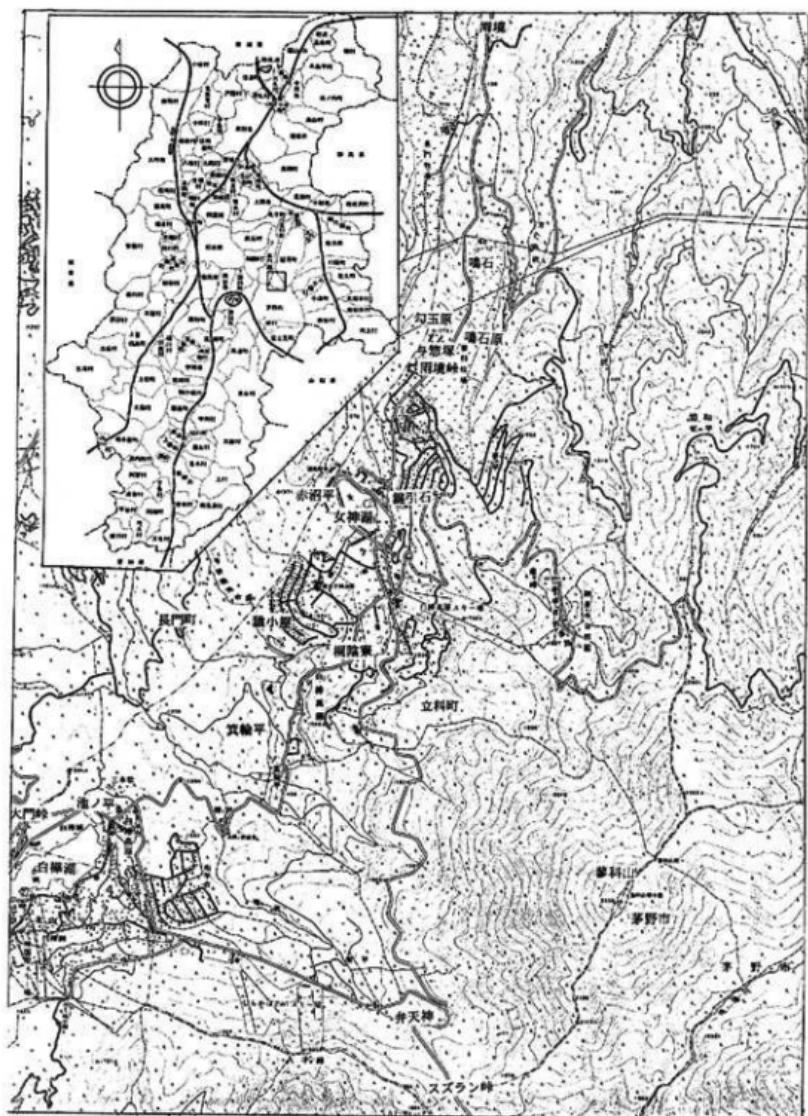


図1 立科町大字芦田八ヶ野地区地形図

立科町は、八ヶ岳直下～小諸にかけて形成された湖に堆積した地層（小諸層群と呼ぶ）と、この上に重なる八ヶ岳噴出物とからなる地質状況である。立科町では、芦田坂上以北に小諸層群が、以南には八ヶ岳噴出物が分布している。

今回調査対象となった立科町南部の白樺高原は、八ヶ岳噴出物（主に新期八ヶ岳噴出物）が広く分布し、この上に薄い土石流堆積物・ローム・表土などが乗っている。以下層序表に従い、白樺高原に分布する地層の概略を述べる。なお、層序区分・地層名は、主に河内（1974）を踏襲した。

八ヶ岳連峰は、主峰の赤岳（2,899m）を中心に据え、南端の編笠岳（2,523.7m）から北端の蓼科山（2,530.3m）まで、南北20kmにわたって峰々が屹立する複成火山である。そして、その活動期は、一回の休止期を挟んで二度あったこと、中心火口が順次南北方向に移動したこと（「河内1974」）など、複雑な過程を経て形成された。

八ヶ岳の噴出物も、活動時期の違いによって二つに区分される。これらのうち、古い時代のものを古期八ヶ岳噴出物、新しいものを新期八ヶ岳噴出物と呼ぶ。白樺高原に分布するものは、主に新期八ヶ岳噴出物である。

当域に分布する新期八ヶ岳噴出物は、下位より雨境凝灰角礫岩層・竜ヶ峰溶岩・前蓼科溶岩・南平凝灰角礫岩層・蓼科溶岩などに区分される。

雨境凝灰角礫岩層は、灰白色～青灰色角閃石安山岩、および無斑晶安山岩の角礫を含む灰白色の凝灰角礫岩層から成り、同質の礫岩を挟む。この地層は、雨境より北方に分布し、構造はほぼ水平である。この地層の噴出源は明らかでないが、おそらく蓼科山附近と考えられる。

竜ヶ峰溶岩は、前蓼科山（立科町から見て蓼科山の左側に位置する前衛峰）直下より流出し、10km近く流下した溶岩流で、溶岩流および凝灰角礫岩より成る。この溶岩流は、間に挟まれる凝灰角

礫岩より判断して6～7枚の溶岩流から成り、岩種は黒色緻密な複輝石安山岩、および灰白色角閃石安山岩などで、板状節理を呈する部分が多い。鳴石・与惣原・鍵引石などの祭祀遺跡は、この溶岩流上に位置している。

前蓼科溶岩は、前蓼科山を構成する溶岩、および凝灰角礫岩で、岩質は灰白色角閃石デーサイト～角閃石安山岩である。

南平凝灰角礫岩層は、蓼科山附近から噴出した火碎流堆積物である。赤褐色の火山灰土中に黒色～灰白色の多孔質角閃石安山岩、および角閃石デーサイトの角礫、および溶岩ブロックを多量に含む。今回発掘調

時代		地層名
新生代	新期八ヶ岳噴出物	蓼科溶岩
		南平凝灰角礫岩層
		前蓼科溶岩
		竜ヶ峰溶岩
		雨境凝灰角礫岩層
	古期八ヶ岳噴出物	春日凝灰角礫岩層
		瓜生坂層
		八子ヶ峰火山岩類層
		上ノ平泥流堆積物層
		布岩引製瓦層及び 仏岩凝灰角礫岩層
	第三紀	大杭層

表1 立科町に分布する地層層序表

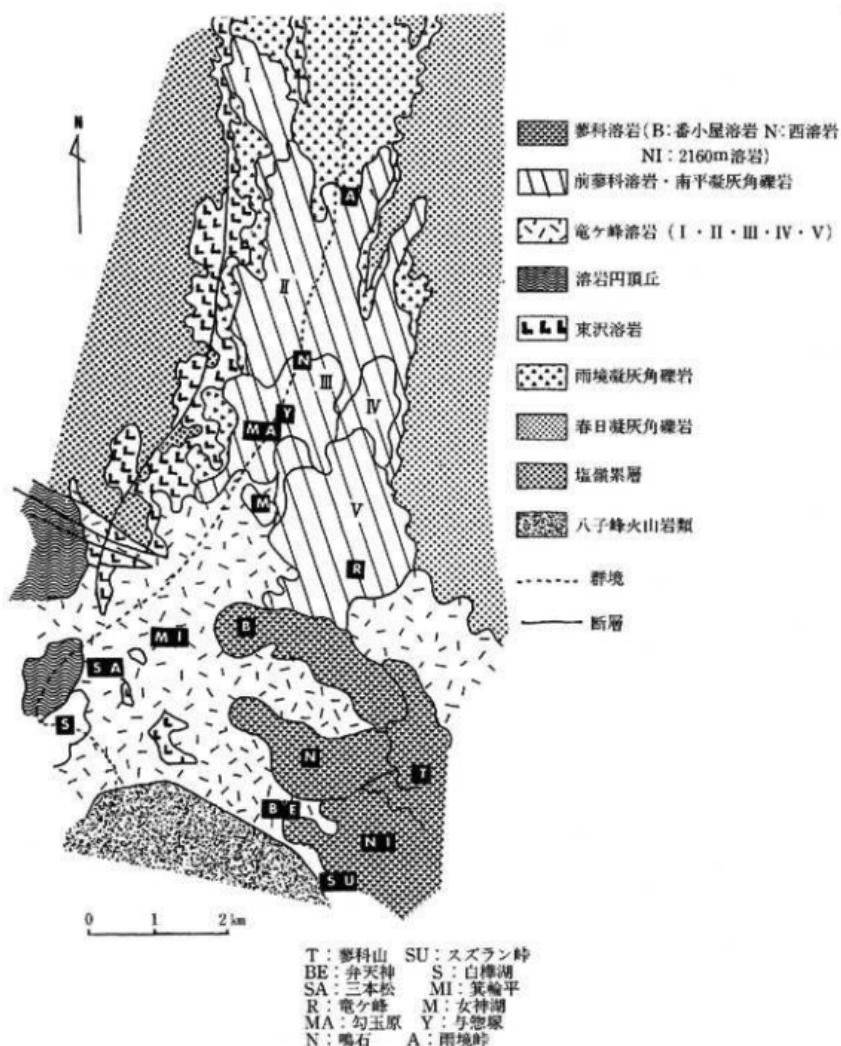


図2 立町大字芦田八ヶ野地区地質図



写真1 萩科山北西麓の景観

査を行った箕輪平・三本松・弁天神などの地点は、この地層上に存在している。

蓼科溶岩は、蓼科山山頂、および山頂附近の火口から周囲に流下した溶岩流で、岩種や流下地形から判断して、さらにいくつかの溶岩流に細分される。これらのうち、山頂より北西方向に流下し、主要地方道近くまで達しているものを番小屋溶岩と呼び、黒色緻密な角閃石複輝石

安山岩の溶岩である。

山頂より真西方向に流下し、箕輪平上部に達しているものを西溶岩と呼び、黒灰色細粒の角閃石複輝石安山岩の溶岩である。

山頂の南、2,161mのピークより南東方向に流下し、スズラン岬に達しているものを2,161m溶岩と呼び、青灰色複輝石角閃石安山岩より成る。これらの溶岩流の末端からは、溶岩岩塊中に滲みこんだ清水が泉として湧き出し、先達の築いた堰を流れ下って、藪の広大な田畠、立科の台地を潤している。

これらの岩体・地層の他、八子ヶ峰（1,832m）附近には、古期八ヶ岳噴出物に該当する八子ヶ峰火山岩類がある。また、本沢、および本沢の支流・樽ヶ沢の河床には、同様に点々と古期八ヶ岳噴出物に相当するとと思われる溶岩類がみられ、白樺湖北方のゼブラ山附近には、溶岩円頂丘が小分布している。

八子ヶ峰火山岩類は、灰白色の複輝石安山岩、および同質の凝灰角礫岩、火山角礫岩から成る。本沢、および支流に分布する溶岩類は、主に黒色複輝石安山岩の溶岩から成り、板状節理が発達している。ゼebra山の溶岩円頂丘は、灰白色角閃石デーサイトから成り、流理構造が著しい。

以上の岩体・地層の重なり方から当城の地史を編むと、新世代第四紀初めに活動を始めた八ヶ岳火山は、莫大な塙基性溶岩やスコリアを放出しつつ、巨大な成層火山を形成した。この時期の噴出物を古期八ヶ岳噴出物と呼び、大河原峠（2,000m）の高さまで露出しているが、今回の調査域では、ごく小規模にしか分布していない。

今から40~50万年ほど前になって、中性~酸性の火成岩の活動が活発になり、度重なる火碎流や溶岩流を放出しつつ、蓼科山を含む現在の北八ヶ岳主嶺が完成した。

この時期の噴出物を新期八ヶ岳噴出物と呼ぶ。今回の調査域には、広く分布しているが、古期八ヶ岳噴出物を薄く覆っているに過ぎない。

白樺高原は、これまで述べてきた基盤岩の上に、土石流堆積物・褐色ローム層、最上位に黒ボク土が乗っている。土石流堆積物は、褐色火山灰土、およびローム状土中に径が数cm～数mの溶岩の角～亜円礫を多量に含む。

黒ボク土は、高冷地においては炭質物の分解が容易に進まないため形成された土壌だといわれている。これらの表土の全層厚は、たかだか数10cm～1m程度である。

立科町は、八ヶ岳連峰の北山麓に位置しているため、立科町の地形・地質のみならず、気象・水利なども八ヶ岳の生長と深いかかわりがある。

八ヶ岳の項でも述べたように、南北20kmにわたって約20の峰々が屹立する複成火山である。日本の数多い他の複成火山と比較しても、八ヶ岳の山容は一般に荒々しく男性的であるが、これは形成史が複雑であることに起因している。

一方、八ヶ岳最北端の蓼科山は、例外的に肩の丸い美しい円錐形を呈し、他の峰々と対称的である。この山は、火山形態ではトロイデに分類され、粘性の大きいマグマの噴出で形成された。また、この山は、八ヶ岳全体の活動史でも、末期になって活動が終焉したため浸食が進まず、火山地形がよく保持されている。蓼科山は、その位置・形状・高さなど、どれをとっても古来より信仰の対象となるべき資質を兼ね備えていたといえる。

八ヶ岳のもう一つの特徴は、極めて雄大な裾野を持つことがあげられる。特に、蓼科山附近から北方に向う裾野は20kmにも及び、その高まりはさらに八重原台地へと続く。この北に広がる裾野は、八丁地川・芦田川・細小次路川・大門川などの小河川によって、いくつかの残丘状地形、又は尾根に隔たれている。これらのうち竜ヶ峰附近から始り、蓼科牧場～雨境峠～芦田坂山～笠取峠へと南北方向に連なる稜線は、海拔が他に比べて最も高く、この稜線沿いに北佐久郡と小県郡の郡境が通過している。

立科町は、この郡境に沿った東側に位置し、南半分は八ヶ岳火山の噴出物が堆積してきた火山高原であり、また、北半分は八ヶ岳からの裾野、および八重原台地上に広がる高原の町である。

ここで視野を広げて八ヶ岳、および立科町の地理的条件を考えみる。長野県は、中央部を走る八ヶ岳・美ヶ原・霧ヶ峰山塊、東筑摩山塊などによって大きく2区分されている。

諏訪地方など南信濃と上田小県・佐久地方などの東信濃間の往来には、これら山塊の鞍部にある白樺高原、または和田峠を越える必要があり、いずれも名だたる難所である。



写真2 蓼科第二牧場から望む蓼科山

両者のうち和田峠越えは、壯年期地形の沢沿いの道で、一方白樺高原越えは、見晴らしのよいならかな尼根づいたいの道である。従って、後者が古来より軍事的にも重要なルートであったことは想像に難くない。そして、峠と頂上で仰ぎ見る蓼科山の姿に、旅人は畏敬の念を覚えたことであろう。

今回の調査では、白樺高原のいくつかの地点で古東山道推定路の発掘調査が行われ、その存在がほぼ確かめられた。長野県南端の神坂峠から科野に入った古東山道は、伊那谷・枝空峠・白樺高原の南境峠を越えて佐久平を通り、入山峠から関東平野へ出たと考えられている。そして、このルートは、通行不能な山塊・大河川を巧みに迂回しつつ、大局的にはほぼ直線状に設定されている。

この事実は、今後より細かいルートを検証するときに示唆を与えてくれる。今回の調査域でも、古東山道の推定路は、地形を生かしつつ直線的であった。また、この推定古東山道と郡境が、ほとんど平行（一部分では一致する）に引かれていることなどは、相互の歴史的背景・相関性をうかがわせる。

表2は、昭和57（1982）年から平成5（1992）年にわたる10年間の立科町の月別平均気温と月別平均降水量、および車山と八ヶ岳（東岳）の月別降水量を示している。

立科町の年間平均気温は9.7°Cで、近隣の市町村と比較すると、諏訪市が10.5°C、上田市が11.7°Cで、これらの地域より気温が低いのは高度差を反映しているものと考えられる。

立科町の年間平均降水量は979.6mmで、近隣の市町村と比較すると、南の諏訪市は1,327mm、東方の佐久市は915.9mm、北方の上田市が859.3mmとなっており、南側の地域ほど多い傾向にある。そもそも東信地方は、長野県内でも特に降水量の少ない地帯で、立科町も寡雨で冷涼な高原的風土である。

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
立 科 町	平均気温	-1.0	0.9	3.2	9.1	11.8	16.9	21.7	22.4	17.3	11.6	6.3	1.5
	平均降水量	mm	39	14	126	102	85	116	90	47	32	180	47
車山平均降水量	mm	23	232	87	103	136	194	240	167	176	283	88	99
八ヶ岳(東岳) 平均降水量	mm						149	147	83	69	183		

表2 立科町の気象

立科町の南部・白樺高原には、常設の観測地点がないので、周囲のデータにより類推すると、まず気温は、高原が1,500m内外であることを考慮すると、立科町北部の台地より5~6°C程度低いものと推定される。

降水量は、白樺高原の車山、および八ヶ岳の東岳のデータから類推すると、車山の年間平均降水量は1,855mmで、気象台作製のメッシュ気候値（地表を基盤目状に区切り、データのない空域は、周囲値より類推するもの）によれば、北八ヶ岳の年間平均降水量は1,700mm程度となっている。この値

は、他の山岳地帯（例えば北アルプスは2,500mを超える）に比べてもかなり少ない。

立科町の気象は、以上のように内陸性気候の特徴を示し、寒暖の差が大きく、乾燥ぎみの傾向をもっているが、気温は涼しく高原的である。

2 歴史的環境

(1) 萩科山麓と立科台地の遺跡

立科町では、先土器時代の槍先形尖頭器・石刀・彫器・スクレイバーなどが、萩科山麓の池ノ平・赤沼平・棄ノ河原で発見され、池ノ平遺跡では縄文早期の楕円・格子目押型文土器をはじめ、縄文各期の土器片・石器類などが採集されている。

そして、萩科山麓を下った北方の立科台地では、縄文時代前期の遺跡が、芦田川流域の芦田古町や茂田井地区に多くの分布している。また、番屋川の流域でも、町区の台地や山部の山麓台地に、縄文前期から中期の遺跡が知られている。

芦田古町の大庭遺跡では、平成元(1989)年に発掘調査が行われ、縄文前期中葉の円形住居址2棟をはじめ、中期初頭の住居址1棟、後期から終末期の円形、または楕円形の住居址13棟が発見された。そして、中期中葉の土器には、円形突起文と三角形の陰刻文、列点刺突文などの独特なモチーフの文様がつけられている。

また、昭和48(1973)年には、芦田古町の下屋敷遺跡で発掘調査が行われ、短冊型の集石遺構や、砂岩でつくられた異国的な風貌の顔面（仮に岩偶と呼ぶ）をはじめ、土偶・石棒などの祭祀用の遺物と石錐や多数の土器片が検出された。

立科の弥生文化は、芦田川流域の芦田古町・野方・塩沢、番屋川流域の山部・蟹原などで後期の遺跡が発見され、萩科山麓の池ノ平遺跡でも、弥生後期の土器片が採集されている。中居の又旅遺跡は、平成6年に建設工事にともなう発掘調査が行われて、縄文時代と古代の土師期の住居址と複合して、弥生時代後期の住居址が発見されている。しかし、立科町全城の調査はまだ十分でなく、弥生時代の遺跡の全貌は明らかではない。しかし、立科台地の弥生文化は、千曲川流域の箱清水式土器文化の影響を受けて発達したものと考えられる。



写真3 大庭遺跡の復元住居

立科の弥生遺跡は、芦田川と番屋川沿いの微高地や山麓台地に集中し、比較的小規模のものが多く、そのほとんどが圓文遺跡と複合し、さらに、古墳時代から歴史時代の古代遺跡と複合している。このことは、灌漑用水の乏しい立科の台地では、集落の立地、水田稲作の場が、河川や泉の周辺に限られていたことを示している。

信濃の最古の古墳は、現在のところ松本平に築かれた全長66mの弘法山古墳である。この古墳は、4世紀中ごろに築かれた前方後方墳で、後部中央の埋葬施設の上から東海西部系の土器が出土している。⁵

4世紀後半になると、善光寺平を望む更埴市森の大穴山に、大和の影響を受けた全長100mの森將軍冢古墳が築かれている。そして、この古墳とは同じころ川柳將軍冢古墳が、千曲川対岸の長野市篠ノ井石川に築かれ、ともに初期科野の首長・王墓と考えられている。このことは科野の王が、世襲的でなかった可能性を示唆している。そして、このころ科野は、すでに大和朝廷の勢力下にあったことがうかがわれる。

大化前代における大和朝廷の支配は、国造や県主を通じて行われた。科野国造は、『先代旧事本紀』の『国造本紀』によると、崇神天皇の時代に、「神八井耳命の孫建五百命を科野国造に定め賜う」と記されている。そして、『古事記』の注記に、神八井耳命は、意富（多）臣・科野国造の祖とあり、科野の国造多氏は、他田氏・金刺氏の祖といわれている。

更埴市の屋代遺跡群では、平成6年に多くの木簡が発見されているが、解説の結果その中の1枚の表面に「乙丑年十二月十日酒人」、裏面に「他田舎人古麻呂」の文字が記されていた。この木簡の「乙丑年」は、大化の改新直後の665年と推定されて、7世紀後半の科野の情勢と地方行政組織をうかがうことができる貴重な資料として注目されている。

古墳時代の立科の遺跡は、後期弥生文化の発達のうえに、一層地域的な広がりを示し、その支



写真4 正明寺古墳出土遺物

配地を見降ろす微高地に古墳が築かれて
いる。

立科の古墳は、茂田井のヒノ雨塚古墳、町区の正明寺古墳、野方の松ノ木古墳、釜石古墳・大城古墳、塩沢の火の雨塚古墳・日向古墳、山部の中村1号墳など、8基の古墳の存在が知られている。

これらの古墳は、鈔金具などの馬具、大刀・刀子・鉄鎌などの武具、金環・管玉・勾玉・白玉などの装身具を出土し、馬と関係の深い武人的性格がうかがわれる。そして、これらの古墳は、いずれも6～7世紀に築造された後期の古墳と推定され、周辺のムラの支配者、首長たちの墳墓と考えられる。

しかし、古墳時代の遺跡は、立科町の各地に広く分布し、さらに多くの古墳が芦田古町や町区・茂田井・塩沢・山部・蟹原地区などに存在したものと推考される。

また、從米古墳とされてきた高根大塚は、確認調査の結果、石室などの内部構造がなく、頂上からかなり時代のくだる鉄器が発見されている。高根大塚は、これらの事実を総合すると古墳ではない。高根大塚の近くの塩沢では、大塚と類似する形態の墳墓が近世以降も築かれており、これらの墳墓との関係が今後の研究課題である。^{7,8}

また、塩沢土合の火の雨塚古墳は、古刀・馬具を出土したとあるが、古刀・馬具を発見したのは塩沢の日向地籍であり、現在この地籍に古墳の痕跡はないが、かつてここにも古墳があったものと考えられ、いずれも基礎資料を修正する必要がある。^{9,10}

(2) 萬科山麓の祭祀遺跡と古道

萬科山麓の雨境峠付近には、ほぼ同時期に築かれたと考えられる鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石の5遺跡、大門峠付近に池ノ平・御庫岩の2遺跡の祭祀遺跡があり、いずれも古東山道に關係する遺跡と考えられている。

この古東山道の用語は、大宝2(702)年に開かれた令制による東山道(以下東山道と記す)以前の古道という意味で用いられている。

また、雨境峠には、鎌倉時代後期から室町時代初期ころに築かれた法印塚・中与惣塚・与惣塚などの石塚(ケルン)と窓ノ河原と呼ばれる遺跡があり、いずれも道に關係する遺跡である。萬科山麓には、さらに甲斐から八ヶ岳山麓を通ってすずらん峠を越え、塩沢堰本堰の源泉・弁天神の出水付近を通り、雨境峠を越えて佐久・小県方面に通ずる「信玄の上の極道」がある。

古東山道は、大和の王権が古墳時代の中ごろ、東国計略の道として開き、人和を出て美濃から神坂峠を越え、科野に入つて伊那谷から源訪・茅野を通つて萬科山麓の雨境峠に上り、望月に下つて瓜生坂から佐久平を抜け、入山峠を越えて毛野に通じていたと考えられている。^{3,4,5,6,7,8}

この古道は、白樺湖畔の御庫岩・池の平を通り、三本松から箕輪平、蕨手刀山上地の猿小屋、赤沼平・勾玉原から鳴石に通ずる嶺道と、箕輪平付近で嶺道と分れて、蕨手刀出土地の桐陰寮上付近・女神湖東岸・鍵引石を通り、鳴石原から鳴石に通ずる道が考えられる。

この二つの道筋は、鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石、大門峠付近の池ノ平と御庫岩岩陰遺跡などの祭祀遺跡を結び、さらに、土師器などを出土した箕輪平、蕨手刀出土地の猿小屋・桐陰寮上・女神湖東岸を加えた地点を地図上で結び、20地点を選んで平成4年から3年間にわた

って発掘調査を実施した結果から推考したものである。

蓼科山麓の祭祀遺跡では、古代の人びとが蓼科の神に奉斎した剣形や有孔円板、勾玉・管玉・臼玉などの滑石製模造品や土器類などが出土している。

また、鳴石遺跡は、蓼科の神を招くために「石を据えて磐石」とし、周囲に拳大から人頭大の円礎や亞円礎を方形に積み、「石の周間では円形に高く築石して神聖な磐境を築いている。鍵引石の巨石も、同様に神を招く磐石であったものと考えられる。

大和政権は、大化の改新を経て、唐の制度にならって律令制を整え、諸制度を整備して全国を五畿七道に区分し、各国に中央から派遣した国司を置いて統治し、令制官道といわれる東海道・東山道などの七道を開いた。

科野(信濃)国は、東山道の上国として東国経営に重要な位置を占め、国府が上田に置かれ、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小縣・佐久の10郡が設けられた。「和名類聚抄」によると、信濃10郡には67郷があり、佐久郡には、美理・大村・大井・鈴戸(高山寺本ではない)・刑部・青治(高山寺本・刊本青沼)・茂理・小治(高山寺本・刊本小沼)の8郷があった。

茂理郷は、茂多理が転じたもので、立科町の茂田井地区一帯といわれ、望月の御牧と深い関係をもつて発達したムラと考えられている。

東山道は、「続日本紀」第二・大宝2(702)年12月壬寅(10日)の条に、

「始めて美濃国岐蘇の山道を開く」

とあり、信濃に東山道が開かれたのは大宝2年と考えられている。

この東山道は、「延喜式」卷二八の「諸国駅伝馬」の条に、信濃国の駅家と駅馬、伊那・諏訪・筑摩・小県・佐久の5郡に置かれた伝馬の数が記されており、駅家の名称と道筋、駅馬・伝馬の数などを知ることができる。

東山道は、伊那谷から松本平に出て、保福寺峠を越えて浦野・日理を経て、信濃国府が置かれた上田をとおり、清水・長倉へ経て碓氷坂(入山峠)を越え、上野国に通じていた。

蓼科山麓の古道は、東山道が新たに開かれた後も、佐久から諏訪地方に通ずる最短路として利用され、望月牧の御馬寄の位置から考えると、望月の駒を都に送る道などにも利用されていたものと推考される。

八丁地川下流は、望月牧と関係の深い地域で、望月町協和の下高呂・大塚には多くの古墳がある。この古墳群は、望月町望月・布施・春日・浅科村蓬田などの古墳群と共に、望月牧の開拓と関係深い人物の墳墓と考えられている。

望月牧は、はじめ「スガマの牧」と呼ばれ、望月の駒で名高く、朝鮮半島から導入された馬を渡来系の人たちが飼育・増殖したと伝えられる。望月牧は、信濃16牧の一つで、信濃の貢馬80頭うち望月牧が20頭と定められ、「政事要略」延喜5(905)年の条には「望月牧の貢馬の数、もと30疋を20疋に改める」とある。

信濃16牧の御馬数は、「三代実録」の貞觀18(876)年の条に2,274疋とあり、この時期の望月牧

の馬数は、貢馬数から推考すると、少なくとも600~700疋と考えられる。従って、望月牧の範囲は、御牧ヶ原台地を中心にして、望月町・浅科村・北御牧村・立科町に及ぶ広い範囲と考えられている。

望月牧の周辺の佐久市下塙原、望月町牧布施には駒形神社、立科町の藤沢・戸倉と日向には駒方神社があり、小諸市鶴久保の十二社も、祭神は佐久市下塙原の駒形神社、立科の駒方神社と同じ字氣母智命である。この駒形(方)神社は、浅科村八幡社の高良社と共に、牧の守護神といわれている。

御牧の管理者は、はじめ牧主当と呼ばれたが、延暦16(797)年ころに専任官の牧監(監牧)が配置された。信濃16牧には、天長元(824)年から天安2(858)年の一時期を除いて、望月牧を担当する牧監とそれ以外の15牧を担当する2人の牧監が配置されていた。

望月牧の牧監についての記録はないが、『樹記』寛弘6(1009)年8月16日の信濃諸牧の貢馬の記事に、滋野善言朝臣の名がある。貢馬・駒牽は、牧監の職務であるから、このとき滋野善言は、信濃諸牧の牧監であったと考えられる。滋野氏は、紀(直)氏と同系氏族の橘原氏流の一族で、貞觀10(868)年に滋野恒蔵が信濃介、貞觀12(870)年に滋野善根が信濃守として信濃国司となり、その後一族が信濃に上着し、望月・祢津・海野に分れて、地方の有力な武士團となったものと考えられる。立科町山部の津金寺、茂田井の無量寺、小諸市布引の観音寺は、いずれも望月牧と関係の深い望月氏にかかわる名刹として知られている。¹⁵⁾

『吾妻鏡』文治2(1186)年3月12日の条に、後白河法皇が源頼朝に対して、年貢の督促を依頼した知行国内の年貢未進の荘園は61、左馬寮領の信濃諸牧は14、そして菱野など牧名のない14の地名が記されている。この28の牧には、『延喜式』の信濃16牧のうち埴原牧など3牧の名が消え、新たに15牧が記されている。¹⁶⁾

佐久郡の牧には、長倉・塩野・菱野・望月の4牧があり、61の荘園の中には、院御領佐久伴野庄・八条院御領大井庄などの名がある。

注

- 1 『長野県史』考古資料編 P198~199 長野県史刊行会 昭和56年
- 2 注1に同じ
- 3 大庭遺跡発掘調査団『大庭遺跡』 立科町教育委員会 平成2年
- 4 小林幹男「下屋敷遺跡」『長野県史』考古資料編P639~641 長野県史刊行会 昭和56年
- 5 斎藤忠「弘法山古墳」 松本市教育委員会 昭和53年
- 6 森将军塚古墳発掘調査団『史跡 森将军塚古墳』更埴市教育委員会 1992年
- 7 信濃史料刊行会『信濃考古總覽』上巻 P506 信濃史料刊行会 昭和31年
- 8 『長野県史』考古資料編 P202 長野県史刊行会 昭和56年
- 9 信濃史料刊行会『信濃考古總覽』上巻 P505 信濃史料刊行会 昭和31年

- 10 注8に同じ
- 11 池邊彌『和名類聚抄鄭名考證 増訂版』 吉川弘文館 昭和47年
- 12 国史大系編修会『新訂増補 國史大系 延喜式後篇』 P713 吉川弘文館 昭和47年
- 13 信濃史料刊行会『信濃史料』第2巻P323 信濃史料刊行会 昭和27年
- 14 国史大系編修会『新訂増補 國史大系 日本三代實錄』前編 吉川弘文館 昭和46年
- 15 信濃史料刊行会『信濃史料』第2巻P516 信濃史料刊行会 昭和27年
- 16 太田亮『新編姓氏家系辭書』 P662 秋田書店 昭和49年
- 17 信濃史料刊行会『信濃史料』第2巻 P268-270 信濃史料刊行会 昭和27年
- 18 国史大系編修会『新訂増補 國史大系 吾妻鏡』第1巻 吉川弘文館 昭和51年

III 蓼科山麓の祭祀遺跡

蓼科山麓の祭祀遺跡群は、八ヶ野から池ノ平地帯の南北およそ6,100m、東西およそ250~600mの帯状の範囲に点在し、蓼科山の北西山麓には、字鳴石・勾玉原・鳴石原・鍵引・女神湖・与惣坂地帯に分布し、西南山麓には白樺湖畔の池ノ平地帯に分布している。この祭祀遺跡群の中で鳴石・鍵引石の両遺跡は、蓼科の神を盤石（座）に招き降ろして奉斎した祭祀遺跡と考えられる。

また、佐久・小県両郡境にある勾玉原遺跡は、豊富な祭祀遺物を出土した遺跡として知られ、赤沼平と池ノ平・鳴石原の遺跡は、溜池工事や牧野の造成工事などによってかなり昔の姿を変えているが、いずれも重要な祭祀遺跡である。

これらの祭祀遺跡のうち、鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石・池ノ平・御座岩岩陰遺跡^{1,2,3,4}は、古東山道に關係する遺跡と考えられている。従って、古東山道は、これらの祭祀遺跡を点とすれば、その点と点を結んだ線として捉えられる。そして、それらの遺跡を結んだ線の附近に道筋があったことは論理的に容易に推考できる。

このことを証明するように、7~8世紀ごろのものと推定される蕨手刀が、佐久・小県両郡境に点在する鳴石・勾玉原・赤沼平などの遺跡の延長線上にある猿小屋・鳴石・鳴石原・鍵引石などの遺跡の延長線上にある女神湖東岸・筑波大学附属高校桐陰寮上の3箇所で発見されている。この蕨手刀は、東国に見られる形式で、この道筋を通った東国の人間か官吏のものと考えられる。また、赤沼平遺跡に近い女神湖の西岸から董鑄が発見されている。

大和王權の東国計略は、更地市の森将軍塚古墳の調査資料や埼玉県行田市の稻荷山古墳出土の鉄劍銘文などから、5世紀ごろには関東付近まで及んでいたと考えられる。

大和の王權の東国制覇の道は、大和から東海道・北陸道（越の道）、あるいは古東山道によったものと考えられる。従って、大和王權の東国計略と経営の道、古東山道が開かれたのは、古墳時代中期の5世紀ごろと考えられている。

大和を発した古東山道は、美濃から神坂を越えて科野に入り、犬竜川に沿って伊那谷を通り、諏訪から蓼科山麓の兩境峠を越えて佐久に下り、瓜生坂（銀月町）・佐久平を経て碓氷坂から毛野に出て、第1の東とも呼ばれる関東・東北の国々に通じていたものと考えられる。

大和朝廷は、大化の改新（645）を経て中國の州制に倣い、律令国家の建設に着手し、全国を五畿七道に区分して、諸国に国府を設置した。科野國は東山道の上國として国府が上田につくられ、東山道が新たに開かれた。

この道筋は、延長5（927）年に撰進された『延喜式』によって知ることができる。この延喜の官道は、伊那谷で古東山道の道筋から離れ、苦知島峠を越えて松本平に入り、保福寺峠を越えて上田盆地の科野國府付近を通り、清水駅（小諸市）を経て碓氷坂（入山峠）で再び古東山道の道筋に合していたと考えられる。

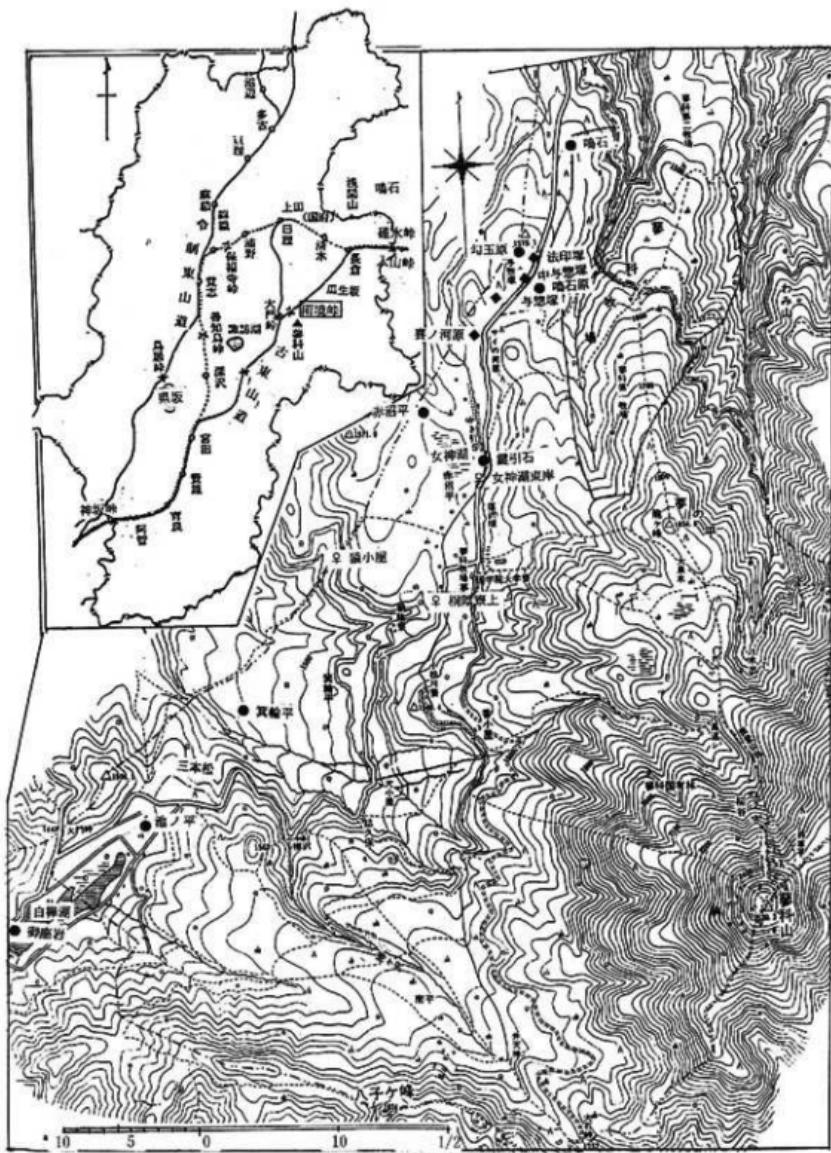


図3 豊科山麓の祭祀遺跡分布図

夢科山麓の古東山道は、佐久郡と諏訪郡を結ぶ最短路であり、東山道の開通後も新たな役割を与えられていたものと考えられる。『令集解』卷22「考課令・殊功異行」の条に、「古記に云う」として、

「諏訪郡主帳須芳山の嶺道を作り、授正八位之類也」

とある。古東山道の嶺道は、東山道が開かれた大宝2(702)年ころに開かれ、佐久郡と諏訪郡を結ぶ重要な交通路として利用され、また、望月の駒の集馬地と考えられる御馬寄の地理的位置、信濃諸牧とは別に配置されていた望月牧の牧監の役割などを考えると、望月の駒を都へ運ぶ貢馬の道としても使われていたものと推考される。

また、夢科山西南麓の白樺湖畔の御座岩には、鳴石遺跡・鍵引石遺跡と関係の深い県史跡の祭祀遺跡・御座岩岩陰遺跡がある。この御座岩岩陰遺跡は、現在茅野市地籍となっているが、南北に並立する溶岩塊群からなり、白樺湖南西岸の標高1,420m付近にあって、その周囲から縄文・弥生時代の土器とともに、土師器や須恵器片などが出土し、劍形や有孔円板などの石製模造品の祭祀遺物も発見されている。

夢科山頂の社は、芦田古町の里宮夢科神社の奥社として、宇宙創造根元の神・高御産靈神が祀られている。そして、左大臣藤原時平らが勅命によって撰修した『日本三代実録』卷三四の元慶2(878)年9月16日の条に、

「十六日戊申。信濃國正六位上夢科神(中略)、並從五位下」

と記され、夢科山に鎮座する夢科神の昇進を伝えている。夢科山は、夢科神が鎮座する神の山でもあったことがわかる。

アララギ派の歌人伊藤左千夫は、明治42(1909)年の夏にこの地を訪れ、

信濃には八十の群山ありといへど

女の神山の夢科われは

と詠んでいる。

大和の王権は、4世紀ごろからしだいに勢力を拡大して、4世紀後半か5世紀ごろまでには、国々を統一したと考えられる。

中国の史書『宋書』『夷蛮伝』倭國の条は、昇明2(478)年の倭王武の「上表文」を次のように載せている。

「封國は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禪、躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉し、寧處に迨らず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すこと六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓き畿を遐にする。」

この上表文の「東は毛人を征すこと五十五国」は、その国数に誇張があるにしても、東国の制覇がかなり進んでいたことをうかがわせる史料である。

そして、埼玉県行田市の福荷山古墳出土の鉄劍の金象嵌銘文115文字、および熊本県江田船山古墳出土の大刀の銀象嵌銘文75文字は、獲多多支曲大王(雄略天皇)の辛亥(471)年に、すでに大

和の王権の支配が、関東から九州まで及んでいたことを示唆している。

1 鳴石遺跡

(1) 地形・地質的特徴

鳴石遺跡は、立科町大字芦田八ヶ野字鳴石地籍に位置し、竜ヶ峰溶岩IIIの末端部に近く、南側は緩斜面の平坦面、北側はやや急斜面になっている。

鳴石をとおる東西に切った地形断面図（図4・B-B'）によれば、1,400mより高い部分は、新期溶岩流で覆われ、なだらかな地形である一方、それ以下は古期噴出物の凝灰角礫岩などが露出しており、起伏の大きい急峻な地形となっている。

鳴石遺跡の西側を走る県道沿いでは、竜ヶ峰溶岩流が路肩に見られ、地表直下まで基盤岩が分布して、この上に薄い泥流（又は土石流）堆積物が乗っている。この地層には、褐色火山灰質泥中に大小の溶岩破片、又は岩塊を含んでいる。そして、その上にさらに薄く黒色土が乗っている。

遺跡の主体部をつくる鳴石の巨石は、円滑度の高い石が、流理構造に沿って割れたもので、割れ口も摩耗して角がとれている。上下に重なる二つの石は、外形や溶岩組織の違いからみて別の石であり、巨石を運んで人為的に重ねたものである。また、表面が丸いのは、人為的に磨かれたものではなく、土石流中に取り込まれた岩塊が、流下中に円滑されたものと考えられる。

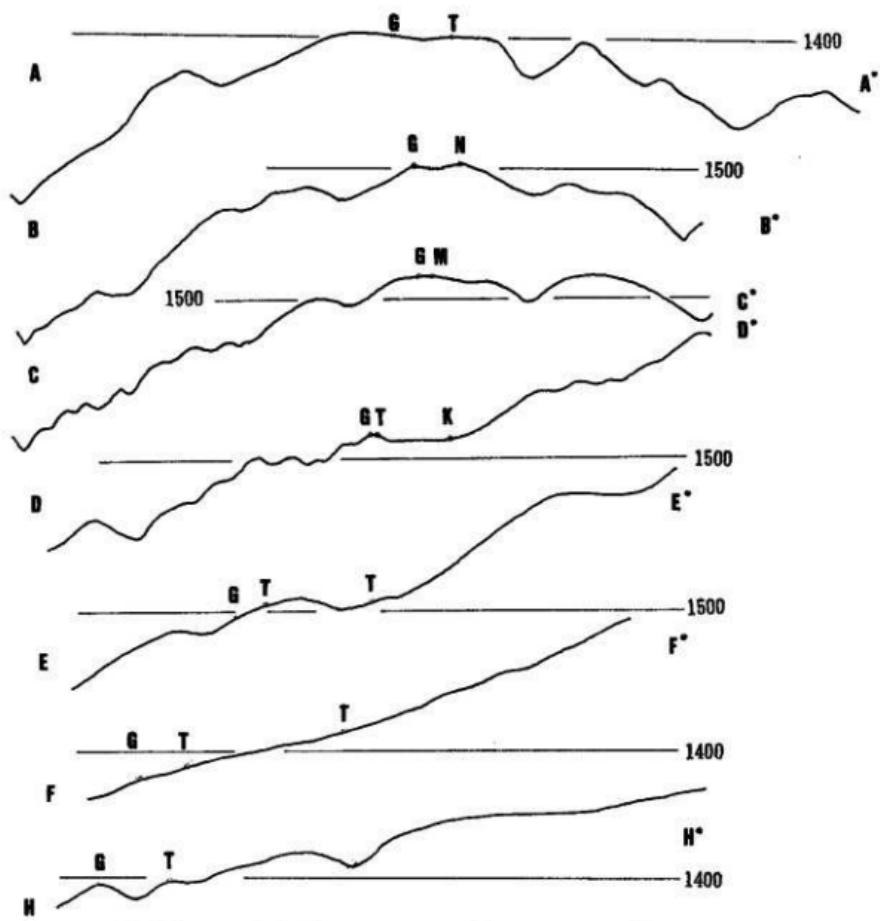
この巨石（鳴石）、および周囲に集石されている礫、または表土下に埋っている岩は、みな岩種は同一の竜ヶ峰溶岩流起源の長石の斑晶が目立つ青灰色角閃石複輝石安山岩である。なお、径の小さいものは、角ばっているものが多い。



写真5 鳴石遺跡の巨石（鳴石）

(2) 歴史的環境

鳴石遺跡は、鳴石と呼ばれる鏡餅状に重なった2個の巨石と周囲に築かれた方形の集石造構が主体である。古代の人びとは、鳴石を夢神が鎮座する磐石（座）として祭り、その上に神を招き降ろして幣を手向け、旅の安全



G: 郡境
 T: 古東山道
 N: 鳴石
 M: 勾玉原
 K: 鎖引石

0 1 km

図4 地形断面図 郡境に直交してNW-S E方向で切ってある。
 (縦: 横比=2.5:1)

を折り、方形に築かれた周囲の集石遺構は、神を祀る神聖な場所として区画し、磐境として築いたものと考えられる。

また、鳴石の北西10mほどにある大石も、鳴石と同様に磐石的性格をもつものと考えられ、この大石の周囲にもやや規模の小さい集石遺構が築かれている。

この鳴石遺跡は、蓼科山のN-14°-W、直線距離にしておよそ5.8kmの位置にあり、蓼科山の泥流によって形成された標高およそ1,521mの広大な西斜面の落葉松林の中にある。

昭和初年ころの遺跡の景観は、当時の写真などによると、まだ落葉松の林がなく、一面に草原が広がり、さらに広大な眺望が楽しめた。そして、鳴石の東側には、細い山道が広大な草原を牧場の柵に沿って南北に通り、春先に坂普請のために巣山へ登る人たちや蓼科山へ登る人、諏訪方面へ往来する人たちの唯一の山道になっていた。

この山道を往来する旅人たちは、蓼科山を望む鳴石の脇の草地で休息し、ここが絶好の休息の場になっていた。平成5(1993)年の調査の折に、キセルの雁首や茶碗の破片を発見しているが、恐らくその名残の遺物であろう。

現在の遺跡の景観は、東側に蓼科第二牧場の草原が広がり、南東の落葉松の木の間越しに、西に長く柵を引いた蓼科山の円錐形の美しい姿が望まれる。さらに、牧場の柵の際に立つと、東方に佐久高原から遙か上信国境の山々までが眺望できる絶好の場所である。

遺跡の範囲は、およそ東西28m×南北24m、総面積はおよそ650m²と推定される(図5)。

鳴石の由来については、歴史的に記された史料はない。小諸藩士の稻垣市右衛門が、宝曆4(1754)年5月に蓼科山を検分して記した「立科山覚附」という記録に、¹⁹

「甘酒之上坂を上り余程の原なり。鏡石と云うあり。差渡三四尺もこれ有るべく、誠に鏡餅のごとく丸く二つ重なり候間、六七分もすきこれ有るなり。これは立科権現の御秘蘗石の由」²⁰と記している。

また、金子證寅は、「信陽佐久立科高井飯塚山嶺麓 蘆田八幡略誌」に、

「麓に鏡石と言う奇岩あり。鳴石ともいう。大きさ六七尺なる大石なり。石肌鏡の面の如し是権現の御宝石と言伝えたり。昔時、石工米り此石を割らんと欲して、玄能を以て二つ三つ之を(打)つ。

時に山鳴り谷答えて山中震動す。忽ち火の雨を降らせ、石工之が為に死すと。故に入打つことなし。試みに小石を以て之を(打)つ時、其の声金磬の鳴るが如し、是又奇石なり。」²¹と記している。

鳴石遺跡は、大正期ころから多くの学者や研究者が、この地を訪れて調査し、多くの著書や報告書に古代祭祀遺跡として紹介されている。²²

藤森栄一氏は、昭和4(1929)年の夏に、諏訪史編纂会の人たちと雨境峠を訪れ、著書『古道』に、²³

鳴石の「すぐ脇に、防火線の掘削があったので、簡単に石製模造品が拾えた。なるほど弁当箱

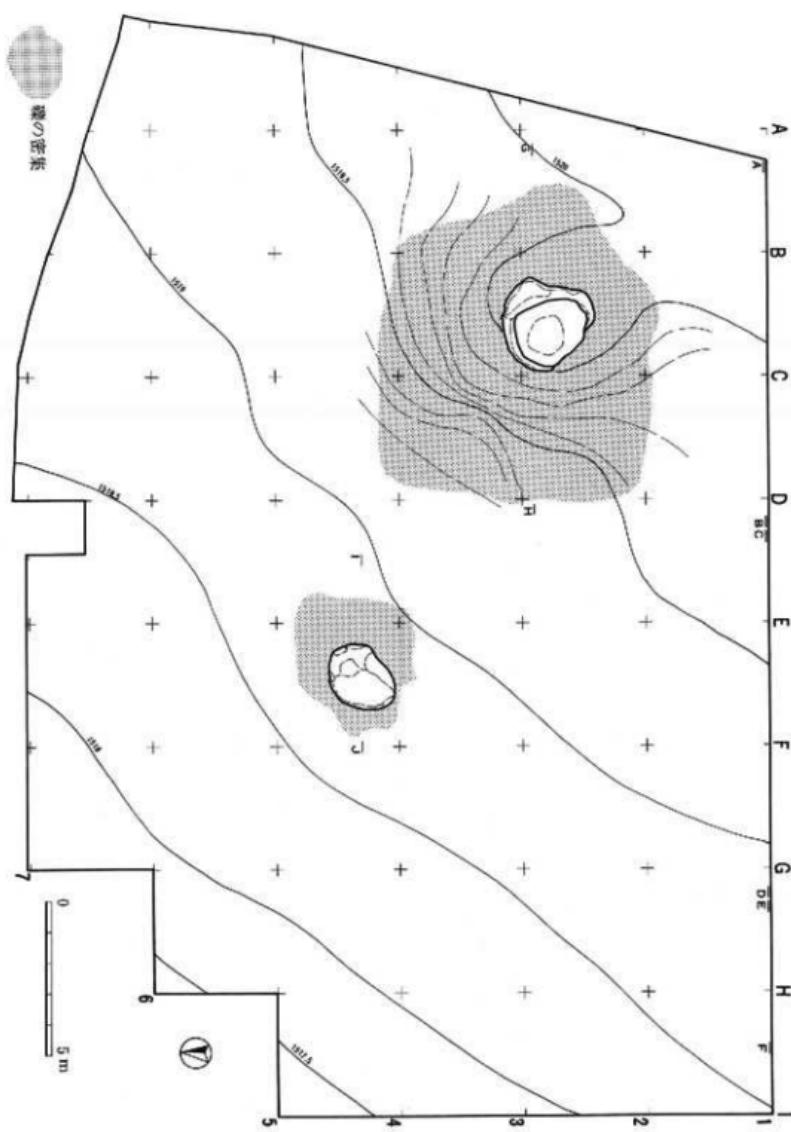


図5 鳴石遺跡地形図（コンター図）

に云々というのも、かならずしもオーバーではないであろう。」
と記している。

また、大場勢雄氏も昭和8(1933)年に鳴石を調査して、著書『神道考古学論攷』の「峠神の祭祀とその遺物」の項に、

「幸いにもこの付近を探査した結果、該石の北方数間の箇所より滑石製白玉三箇と有孔円板及び鏡形の破片等を採集できた。」
と記している。

2 鍵引石遺跡

(1) 地形・地質的特徴

鍵引石遺跡は、立科町大字芦田八ヶ野字鍵引に位置する。鍵引石遺跡附近の地形は、竜ヶ峰附近から流下した竜ヶ峰溶岩が、鍵引石附近(県道)の東側まではやや急峻な西傾斜の斜面を形成している。

そして、ここから郡境までは、テラス状に平坦面が存在し、さらに西側は再び急斜面になる。
この平坦面に赤沼平の湿原(女神湖)がある(図4・D-D')。

鍵引石遺跡の一帯には、竜ヶ峰溶岩流(竜ヶ峰溶岩III~IV)が広く分布し、女神湖周辺には、南平凝灰角礫岩が、この上に薄く乗っている。竜ヶ峰溶岩IIIは、青灰色細粒輝石安山岩から成り、竜ヶ峰溶岩IVは、灰白色細粒角閃石安山岩から成る。また、南平凝灰角礫岩は、褐色角閃石安山岩、および角閃石デーサイトから成っている。

鍵引石は、青灰色の緻密な輝石安山岩の岩塊で、板状節理が著しく、この岩塊が崖縁性の土砂の中に埋っている。鍵引石に似た石は、夢ノ平有料道路の料金所直下に分布しており(竜ヶ峰溶岩V)、ここから崩落したか、撒入されたものと考えられる。

(2) 歴史的環境

鍵引石遺跡は、鳴石遺跡のS-20°-Wの位置にあり、直線距離にしておよそ2.3kmである。標高はおよそ1,551mで、箕輪平から赤沼平に向ってなだらかに続く平坦な道がこの付近で終わり、急坂にかかる手前の女神湖畔北東方にある。

蓼科山からの方位はN-30°-W、直線距離にしておよそ4.25kmの位置にあり、遺跡から雄大な蓼科山の姿が眺望できる。

南東に位置する女神湖は、人造の農業用溜池で、以前は赤沼と呼ばれる湿地であった。鍵引石遺跡付近は、昭和初年ころまで南西斜面の裾に広い草地の平坦面があり、その際に鍵引石と呼ば

れる巨石があった。その後この草地は、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の工事によって盛り上がりが行われ、往時の姿を一変した。

遺跡の範囲は明確でないが、地形などから判断して、およそ東西20m×南北30mほどの規模と推定される。

鍵引石は、現在東端部分が道路の下に埋まり、3分の2ほどが輝石安山岩の青灰色の姿を塩沢堰の右岸の土手に船の舳のように競り出している。

鍵引石の大きさは、長径が5m、短径が3m、厚さ1.5mの巨石で、小諸藩土橋垣市右衛門は、『立科山覚附』に、

「この道脇に小僧石といふ有り、右池（筆者注 赤沼の池）主小僧成石之上に出、往来之ものニ
かき引致候申、折節ハ池江引込候由、或時諏訪之侍衆通之節例之小僧かき引杯引鉢廻、終に小僧引まけて一夜之内に和田辺辺池とも引取由」

と赤沼池の主の「小僧の伝承」を記している。

この記録は、橋垣市右衛門が蓼科山検分の経路として、江戸中期の蓼科山麓の道筋を詳細に記している。この記録によれば、当時の道は鍵引石の脇を通っていたことがわかる。

また、金子詮寅は『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 落田八箇略誌』に多くの伝承を載せているが、鍵引石についても、

「麓に赤沼の池と言ふ有り。即ち諏訪へ越える大道端なり。道と池の間に大石あり。小僧石と言ふ。昔この池に河太郎住み居て、間々往来の人を害す。其居る所は彼の大石の上にて、人の来る待ち得て、かぎ引きやろう……と言つて手を出す。十三小僧なれば人毎に之を欺き、戯れにすることと思え、手を出すや否やその手を放さずして池の中に引き込む。力弱き人は終に彼がために引込まれて死す。強き人は引き放して遁げ去る。かくの如くにする事久しう。」

或る時諏訪郡住人諏訪頼遠という大力無双の勇士ありて、切原の牧へ通りける時、例の如く石の上に居て手を出す。頼遠予て聞き及びたる事なれば、いざ参らんと言って馬上より手をのべて彼が腕をしかとりもち、一鞭申しければ、一物の駿足なれば一散に駆け出す。時の間に一里ばかり引揚げ来りて是を見るに、頭にたまりて有る水一滴もなく、溢れつきて死せるが如くになり。仍て馬を留めて曰く『汝自此處を去



写真6 鍵引石

るべきや否や、もしさらずんば今ここにて殺害すべきがいかん』と責めければ、河太郎曰く、『命助け玉わらば今夜の内に去るべし』と言う。依之放ちて帰す。而して、里に下りて明日戻りて見るに、池水一滴もなく皆干したり。いそくに行けると人々不審するに、その夜に至り和田宿の西裏の山沢に、大きな池をなして水満々とたたえたり。故に里人その池を名付けて、夜間の池と言う。今在之。河太郎時々出て遊ぶと雖も人を害することなし。今立科の麓の池は、八茅原となり池跡ばかり残れり。』

と河童伝説と赤沼池の由来を記している。

鍵引石遺跡の出土遺物は、明確に『鍵引石遺跡出土』と記録されたものはない。

八幡一郎氏は、著書『北佐久郡の考古学的調査』に、

「有孔円盤 雨境峰に近い赤沼から採集したと伝えられる徑二・五釐の破片である。共に二つの孔が貫通している。」

小玉 雨境峰付近から最も多量に採集されてみるのは、滑石製の薄い小玉の類であった。(中略) 赤沼採集のもの十一粒を第七八回に掲げた。赤沼出土例の内には徑六耗に対して長さ七耗に達し、短い管玉と見られるもの四箇、薄い小玉は滑石製四箇、粘板岩製三箇合計七箇ある。」と記している。

ここで「赤沼」と記されているのは、女神湖西岸の赤沼平遺跡ではなく、「雨境峰に近い赤沼」という記述から考えて、鍵引石付近のことと考えられる。従って、大正末年から昭和初期ころに、鍵引石付近で採集された祭祀遺物は、有孔円板の破片と管玉4個・小玉7個などである。

また、昭和2(1927)年に徳川頼貞氏が寄贈した東京国立博物館所蔵の遺物の中に、「北佐久郡夢科山麓烟中」と記された刺形3個・白玉9個・有孔円板3個の滑石製模造品がある。

この「夢科山麓烟中」の出土地点は明確ではないが、大正末年から昭和初期のころ、高冷地の夢科山麓で畑作を行っていたということを聞いていない。聞き込み調査の結果では、かつて鍵引石付近に落葉松の育苗場があったといわれている。徳川頼貞氏は、東京国立博物館へ多くの遺物を寄贈しているが、その折に、この育苗園のことを畑と伝え聞いて、「北佐久郡夢科山麓烟中」と報告したものとも考えられる。

鍵引石遺跡は、八幡一郎氏の研究や、鳴石と類似する安山岩の巨石があること、その位置が鳴石と雨境峰を挟んで南北に相対していること、さらに、鍵引石は、鳴石原遺跡とも北方にある標高1,620.1mの小門頂丘を間に南北に対して両裾部に位置し、ともに夢科山を眺望できる峰の祭祀遺跡としての特色をもつことなどを総合して、古東山道に關係する祭祀遺跡と考えられる。

藤沢万佐男氏は、鍵引石遺跡のある女神湖東岸でも、古式の須恵器の碗の破片と土師器の壺・壺の底部とみられる破片など、多く遺物を採集している。これらの遺物も、鍵引石遺跡に關係するものと考えられ、この付近の文化の解明、時代の推定にきわめて重要である。また、同時に採集されたといわれる先土器時代とみられる黒曜石製の石器、縄文期の黒曜石製の石器なども、夢科高原の黎明期の文化を研究する上に貴重な遺物である。

3 勾玉原遺跡

(1) 遺跡の位置と規模

勾玉原遺跡は、立科町大字芦田八ヶ野字勾玉原地籍の西南部から与惣塚地籍の西部に位置し、勾玉原の地名が示すとおり、きわめて豊富な祭祀遺物を出土した遺跡として知られている。しかし、遺跡の位置については、標高1,579.1mの三角点に近い佐久・小県郡境の附近とする説、中与惣塚の北10~110m附近の主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線に沿った幅20m前後の狭い範囲とする説がある。

大場磐雄氏は、昭和8年10月に土地の人(恐らく、諏訪の人であろう)の案内で勾玉原遺跡を調査し、著書「まつり」に、

「雨境峠は甘酒峠とも書く。(中略)ちょうど諏訪郡蓼科山麓から北佐久と小県郡の境界線に沿って芦田地区にいたる山道で、途中大門峠と合致する。大門峠は中世の文献にもみえるが、雨境の方はいつしか忘却されて往来の人も多くない。最頂点は標高一五七九メートルで、附近をふつう勾玉原とよんでいる。その理由は、多数の滑石製模造品類(勾玉・管玉・白玉・有孔円板・刺形品)が発見され、この地がもと草原であった当時は、草刈人が一日に数十個も拾うことは珍しくなく、携行してワッパ(弁当入れ)に一杯もあったと伝えている。今は落葉松の林となつて、遺物の量も少なくなった。(中略)そこから約一キロ西南に降った賽の河原にいく。(中略)ここは峠の入口(または出口)にあたっているので往来の人々は石片を拾って積み重ね、親に先立った幼児を弔らうのであると伝えている。それから北方右の道に沿って進むと、道の左側に古墳状のものが三基あり、ほぼ同じ間隔に立つ。塚は大小の礫できずき、山毛榉の古木が立っている。与三塚とも山伏塚ともよび、一種の伝説をもっているが、もちろん古墳とは考えられない。そこを過ぎて北行すること約七〇〇メートルくらいで鳴石に着く。」

と記している。大場氏がこのとき案内された経路は、

大門峠→北佐久・小県郡境の山道→勾玉原遺跡
(最高点標高1,579m)→西南方の賽ノ河原→北方の三つの古墳状の塚(与惣塚)→鳴石

であり、この経路を地図上でたどると、佐久・小県郡境に近い標高1,579.1mの三角点附近を勾玉原遺跡としていることがわかる。

桐原健氏は、昭和41(1966)年に新産都市等の分



写真7 1,579.1mの三角点

布調査を実施し、「長野県北佐久郡立科町附境崎祭祀遺跡群の踏査報告書」に、¹⁹

「中与懸塚の北に接して三角点があり(標高一五七九米)、その付近を勾玉原と呼んでいる。滑石製品の採集量一口メンバー一杯といわれた地点であるが、かつては芝草の原であった景観が落葉松と紫竹で覆われてしまつて村の古老たちも往時採集した地点を指摘することができなくなつてゐる。しかし、五日もの間、記憶をよび戻しつつ踏査した結果、崎頂上から佐久側へ一〇〇米下った道路左手であることが判明した。」

と記し、位置図を添えて勾玉原遺跡の位置を示している(図6)。この記述と挿圖によれば、桐原氏のいう勾玉原遺跡の位置は、標高1,579mの三角点附近という点では前説と符合しているが、実際の位置は中与懸塚の北方およそ10~110m附近の主要地方道駿駒・白樺湖・小諸線に沿つた狭い範囲とする点で全く異説となつてゐる。桐原氏は、この報告書とはば同文の論文を雑誌『信濃』²⁰に掲載し、現在この説は「長野県史 考古資料編」をはじめ、多くの著書・論文に発表され、広く流布している。

雨境崎祭祀遺跡群の調査は、事前の文献調査と、再三にわたる実地踏査によってこれらの問題点を明確にし、そのうえで調査計画を策定して発掘調査を実施することにした。平成5年から実施した調査の主要目的は、遺跡の位置・範囲・現状を把握することであり、勾玉原遺跡の位置を確認することも、その一つであった。

勾玉原遺跡の位置については、いずれの説も標高1,579.1mの三角点附近としている。この三角点を地形図上でみると、中与懸塚の北西約250mの丘陵上にあり(図7)、桐原氏が勾玉原遺跡と図示した中与懸塚の北方(図6)ではない。桐原氏の示した地点の標高は、実地測量の結果でも1,570~1,575mで、センター・ラインの走行方向も一致しない。

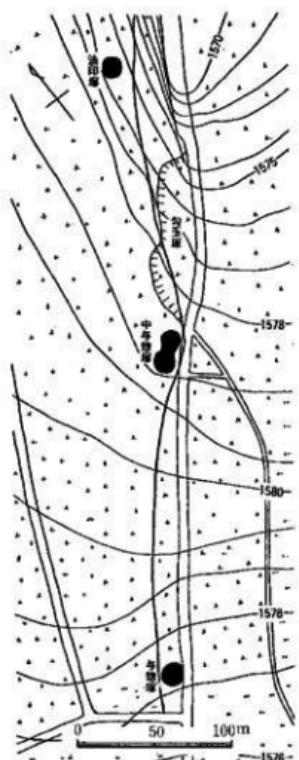
さらに、現地の踏査によつても中与懸塚の北に接した地点には、三角点はもちろん、標高を示す標識は見当たらなかつた。

藤森栄一氏は、著書『古道』に、²¹
「与三塚といふのは、その佐久側の平たい頂上の直下のたるみの野の中にあつた。(中略) 勾玉はこの辺り一帯に出るのだ」という。²²

と記している。

図6 勾玉原遺跡(『県史』による)

そして、八幡一郎氏も、著書『北佐久郡の考古学的調査』に、²³



「小玉 雨焼跡付近から最も多量に採集されてゐるのは、滑石製の薄い小玉の類であった。与惣塚発見の四十粒を第三八図下段に（中略）掲げた。」

と記している。

このように両氏の記述は、いずれも「与惣塚」の地名を用い、勾玉原とは記していない。これは当時も与惣塚附近を「勾玉原」とは呼んでいなかったためと考えられる。

この辺りは、現在も「与惣塚」地籍であり、主要地方道瀬訪・白樺湖・小諸線の東側が「鳴石原」地籍である。「勾玉原」地籍は、中与惣塚から北方へ200mほど下った地点を南端とし、そこから北方へ1,250mほど下った付近を北端とする道路の西側一帯の溝地から尾根にかけてである。

勾玉原遺跡の調査では、これらの疑問を解明するため、遺物が採集された当時の関係者を探し求めて聞き込み調査を実施した。幸い、昭和初期ころ、山の仕事で蓼科山麓に登り、他の人たちと共に、自身でも遺物を採集した人物、山浦巖氏が芦田古町に居ることが判明した。早速、山浦氏に案内を乞い、現地を踏査してその位置を確かめた。山浦氏の示した地点は、大場義雄氏が瀬訪から登って調査した丘陵上の位置と奇しくも一致することがわかった。

この位置は、両説が共通の指標とする標高1,579.1mの三角点附近であり、現地の聞き込み調査、確認のための踏査、そして発掘調査よってもこの地籍から遺物を出土しているので、この附近が古くから勾玉原遺跡と呼ばれていた地籍であることは間違いない。

(2) 地形・地質的特徴

勾玉原遺跡附近は、起伏の少ない丘陵状の地形で、三角点の200mほど南方が最高地点となっている。附近的微地形は、この辺りを中心に、南北方向にも、東西方向にも、緩く下るドーム状の尾根をなしている。

勾玉原遺跡附近は、1,400mを境にして上部が竜ヶ峰溶岩に覆われたなだらかな地表面をつくり



図7 勾玉原遺跡と周辺遺跡の分布図



写真8 勾玉原遺跡の景観

(図7)。

また、この勾玉原と与惣塚の最高標高点(1,581.7m)を古東山道が通っていることが、今回の調査では判明した。この勾玉原遺跡附近は、白樺高原における古東山道推定路の最高地点でもあり、雨境峠(雨坂・天坂)とは、元来この地点を呼んだのであるまい。

この附近では、地表下1m弱で基盤が認められる。基盤は、暗灰色赤色の輝石安山岩の角礫を含む凝灰角礫岩で、これは竜ヶ峰溶岩中に挟まれたものである。この上に薄い竜ヶ峰溶岩の岩片を含む褐色ローム層、および同じ岩片を含む黒ボク土が乗り、ここに含まれる岩片は、流理構造が発達している。大きさは、数m大のものもあるが、多くは数十cm~数cm大である。

(3) 歴史的環境

勾玉原遺跡は、蓼科山のN-20°-W、直線距離にしておよそ5.5kmに位置し、鳴石遺跡からの方位はS-20°-W、直線距離にしておよそ550mの距離にある。勾玉原遺跡の立地は、勾玉原地縁から与惣塚地縁にわたる馬背状の丘陵地帯の北部に位置し、現在一帯は別荘地として開発されている。遺跡の範囲は、遺物が採集された地点を基準に考えると、東西が小県・佐久両郡境附近から尾根の東側にかけての70~80m、南北は標高1,579.1mの三角点附近から丘陵の最高地点1,581.7m附近の手前にある森谷雅美氏の別荘地附近まで、およそ200m以上に及ぶものと考えられる。

調査時に実施した聞き込み調査では、別荘に住む人々はこの一帯が遺跡であることをよく知っ

(図4・断面図C-C')、それ以下は古期八ヶ岳火山岩類が浸食されてできた起伏の大きい地形になっている。

鳴石附近から勾玉原にかけての地帯は、蓼科山との間に視界を遮るものもなく、美しい円錐形の姿が望める。この附近にいくつかの祭祀遺跡がまとまって分布するのには理にかなっている

ており、昭和40年代の別荘地造成のころに、工事関係者も競って遺物を探していったといわれる。

この遺跡の中心部分は、現在別荘地となり、周辺は雑草



写真9 勾玉原遺跡の採集遺物（山浦清子氏蔵）

や喬木などが茂る原野となっている。しかし、この一帯は、蓼科山の雄大な姿を望む絶好の位置にあり、かつてはこの尾根から入山峠などの上信国境の山脈も眺めることができたものと思われる。

勾玉原遺跡の採集遺物は、大正期から昭和初年にかけて、草刈りや芝焼きの折に、剣形や有孔円板、勾玉や白玉・管玉などの玉類が多く拾えたと伝えられている。この地方の宇山・八重原・塙沢などの各用水堰では、嶽普請用の土芝採取地を各所に設けて、草刈りや芝焼きによる草地の手入れをし、大量の土芝を採取していた。

嶽普請用の土芝は、例えば宇山区の大正9年6月8日の『陳情書』に、

「工事ニ用ユル土芝ハ、約二万枚ヲ要スルナリ。」

である。一枚の土芝は、およそ長さ一尺(30cm)幅六寸(18cm)とあるから、2万枚余の土芝を採取するには、約300余坪(約990m²余)の面積が必要になる。

従って、この地籍では、広い範囲にわたって芝焼や草刈りが行われ、何年かに一度土芝が採取されて、その際に多量の祭祀遺物が採集されたものと思われる。

勾玉原遺跡の採集遺物は、現在殆ど散逸しているが、綾谷の山浦清子氏宅に剣形9個・有孔円板1個・管玉2個・白玉25個などが、糸で板に留められて、ガラス越しに見えるようにした木箱の中に保管されている。

剣形の遺物は、7個が完型品、2個が破片である。有孔円板、および白玉はいずれも完形品で、現在では勾玉原遺跡の出土品をうかがう貴重な資料である。そして、蓼科牧場の白樺高原ホテルにも、有孔円板1個・剣形2個などの遺物が保管されている。

また、森谷雅美氏の別荘の庭では、昭和47年ころ別荘地を造成した際に、円環状の石組の附近

から大量の土師器片を採集し、夢科に在住する藤澤万佐男氏も、別荘地の道路建設の際に、遺跡北端部の三角点附近から土師器を採集している。

4 赤沼平遺跡



写真10 赤沼平遺跡の景観

赤沼平遺跡は、かつての赤沼湿原の西北端、夢泉閣(小県郡長門町)前の女神湖西岸にあり、小県・佐久両郡境に接する標高1,540m付近の緩い東斜面に位置し、鳴石遺跡と勾玉原遺跡、蕨手刀出土地の猿小屋、そして、箕輪平を一直線で結んだ線上にあり、古東山道推定路の嶺道に

関係するものと推考される。

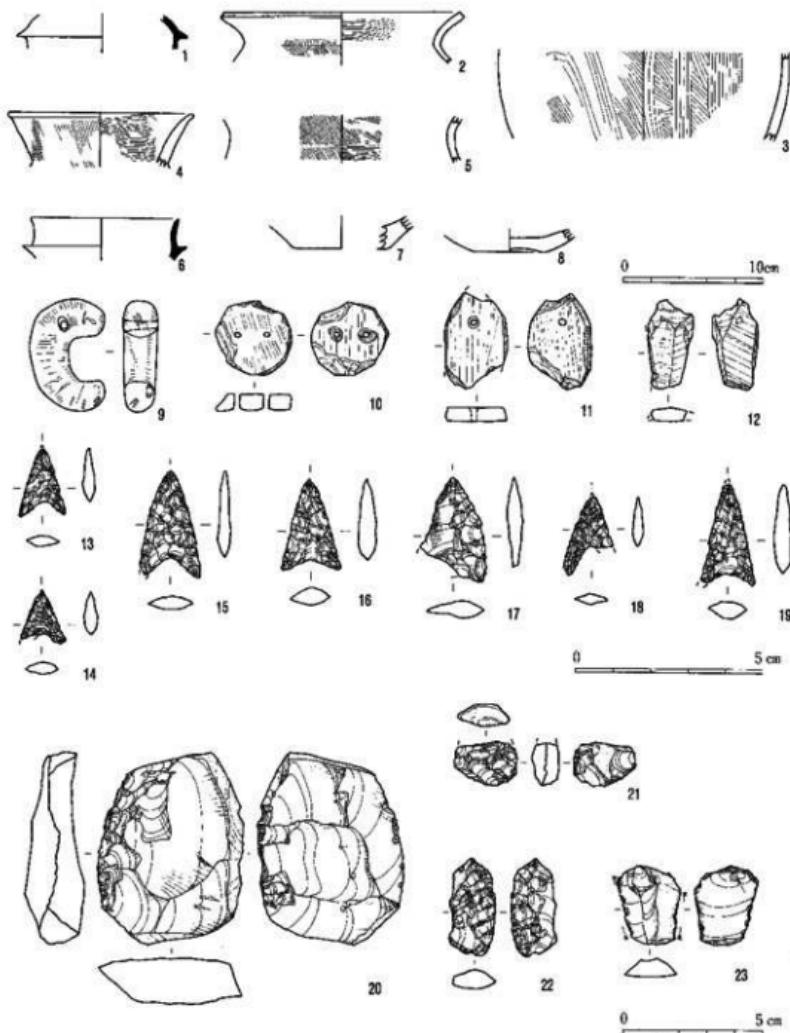
遺跡の範囲は、周辺の開発と女神湖の造成による水没のため、十分解明できないが、地形的にみて北方の丘陵に登る坂道の手前附近から南北およそ50m、東西およそ30mの平坦面部分と考えられる。

勾玉原遺跡との位置関係は、方位がS-36°-W、直線距離にして約1,550mである。夢科山との位置関係は、方位がN-36°-W、直線距離にしておよそ4.5kmで、夢科山が美しい山容を湖面に映し、美術愛好家が常に訪れて絵筆を走らせている場所である。

赤沼は、その名の示すとおりかつて湿地であったが、昭和41(1966)年11月15日に農業灌漑用溜池が竣工して女神湖となった。

この遺跡は、夢科に在住する藤澤万佐男氏が、女神湖の湯水時に勾玉1個と滑石製の有孔円板1個、剣形破片2個、須恵器の壺の破片1個、土師器の甕の破片3個などを採集し、遺跡の所在が確認された。

勾玉は、丸味のある形から実用品と考えられ、長径3cmのコの字形をしたやや古い形式である。有孔円板は、滑石製模造品の双孔円板である。剣形は滑石製の破片で、1個には鏽がつけられ、他の1個には鏽はない。



1～5・9～12・18・19は赤沼平（女神湖西岸）遺跡

6～8・13～17・20～23鍛引石遺跡付近

図8 赤沼平遺跡と鍛引石遺跡周辺の採集遺物実測図（藤沢万佐男氏蔵）

須恵器の壺の破片は、蓋の一部とみられるが、初期の須恵器の特色を示している。土師器の甕片は、内外にハケ調整を施し、外壁にススが付着した破片も含まれている。

5 箕輪平遺跡

(1) 地形・地質的特徴

箕輪平は、蓼科山から北西方向へ傾斜するなだらかな斜面状の地形をなしている(図4 F-F')。

蓼科山から放出されたと考えられる南平凝灰角礫岩が基盤岩となっている。これは灰色～褐色角閃石安山岩、または角閃石デーサイトを角礫として含んでいる。この層はあまり厚くなく、本沢や樽ヶ沢などの下流のやや進んだ河川の河床には、古期八ヶ岳火山岩類に属すると思われる暗灰色複輝石安山岩が露出している。

そして、この上に薄く同質の角礫・亜角礫を取り込んだ土石流堆積物、および黒ボク土が乗っている。また、河川の側には、上流から運ばれたと思われる蓼科溶岩の岩塊や円礫が散在している。

(2) 歴史的環境

箕輪平遺跡は、赤沼平遺跡のS-30°W、直線距離にしておよそ2,200mの位置にある。この地点は、赤沼平遺跡と蕨手刀出土地の猿小屋地籍を結んだ直線の延長線上にあり、その名のとおり広大な緩斜面の平原に位置し、標高はおよそ1,370mである。遺跡の南西50m附近には、穴小屋附近に発した本沢が、三本松との間に深い沢を刻み、大門川に向って北西流している。



写真11 箕輪平遺跡南西附近の本沢（左奥から右側へ渡る）

この本沢は、南平に発して北西流する樽ヶ沢と遺跡の南西附近で合流しているが、樽ヶ沢はその650mほど上流で樅ノ木から流れる支流と合流し、これらの沢の

上流は、いずれも深い谷状の沢を形成し、この沢を越えることは困難である。本沢を容易に越えられる所は、本沢と樽ヶ沢の合流点の僅か下流であり、三本松へ登る斜面の道筋もこの辺りが最も緩やかである。

池ノ平遺跡は、この道を登った白樺湖畔の平原にある。

筑波大学附属高等学校の桐原寮の人たちは、最近までこの附近を通って白樺湖との間を行き来していたと話された。

箕輪平遺跡は、平成6年の古東山道推定路の調査で、偶然8世紀ころに比定される土師器を検出し注目された。なお、この遺跡は、昭和28(1953)年に見玉司農武氏が割橋^{カツ}遺跡で平安期の土師器片と元祐通寶を採集している。割橋地籍は、箕輪平地籍に隣接し、地形的にも一連の遺跡と考えられる。

現在は林道が、主要地方道源訪・白樺湖・小諸線から箕輪平遺跡の脇に通じ、大きくS字形にカーブして大門峠から大門の集落に通ずる林道の上に出ている。しかし、この林道は、いまも大門林道の上で跡切れている。箕輪平に林道が開かれる以前は、県道から本沢の右岸沿いに山道が通り、遺跡から西側の道筋はかなりの急坂で、途中に地蔵があり、滑り降りるように下ると大門に向う林道に通じていた。

佐久と小県郡の都境は、猿小屋附近まではほぼ直線的にのびているが、大菜研沢附近から次第に西寄りになり、箕輪平遺跡附近では250mほど西方をとおっている。

箕輪平遺跡と蓼科山との位置関係は、蓼科山からの方位がおよそN-60°W、直線距離にして4.5kmで、現在は落葉松の林に遮られているが、蓼科山の美しい姿を望むことができる。遺跡の範囲は、十分調査が行われていないので明確でない。遺跡の時期は、現在採集されている遺物の年代から推考すると8世紀以降で、それ以前については明らかでない。しかし、元祐通寶が採集されているので、中世にもこの附近に古道があったものと考えられる。



写真12 箕輪平遺跡の景観

6 池ノ平遺跡

(1) 地形・地質的特徴

白樺湖の北側には、この湖を囲むように小高い尾根・小山があり、郡境、および古東山道の推定路は、これらの高まりを北東—南西方向に横切っている。郡境が越える小山は、火山の独立峰（滑岩円頂丘）で、一方古東山道が越えたと推定される三本松附近は、南平方向から伸びてきた尾根の先端部にあたる（図4 H-H'）。

古東山道が、三本松附近を越えていたと考えられる理由は二つある。一つはここが白樺湖周辺の池ノ平遺跡・御座岩岩陰遺跡と勾玉原遺跡を結ぶ直線上にあることである。二つ目は、この尾根越えのルートが最も勾配が小さいことである。古代人は、地形をよく観察しつつ、「道」はきわめて直線的に設定されていることは前にも述べた。

池ノ平遺跡は、白樺湖の北岸にあり、対岸には県史跡の御座岩岩陰遺跡がある。この周辺の地質は、灰白色の角閃石デーサイトを角礫として含む南平凝灰角礫岩を基盤岩とし、この上に比較的厚い黒墨土の表上が乗っている。また、蓼科溶岩の巨大な転石が散在し、特に河川沿いに多い。

(2) 歴史的環境

蓼科山との位置関係は、方位がおよそN-80°W、直線距離にして約5kmである。この遺跡の遺物は、滑石製の剣形模造品2個・有孔円板1個などの遺物と石斧形石製品、および土師器と須恵器の破片などで、藤沢万佐男氏が所蔵している。

池ノ平遺跡の中心部は、現在駐車場になっており、その周辺も白樺湖の造成や観光開発によつて全く変貌し、遺跡の範囲も判然としない。

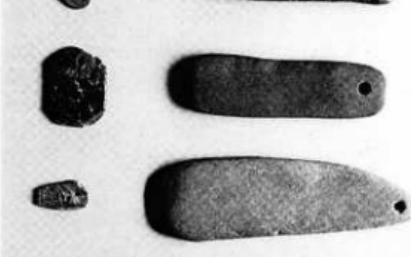


写真13 池ノ平遺跡採集遺物

この遺跡から採集された遺物は、剣形・有孔円板・石斧形の遺物などである。剣形の遺物は、長径が1.8cmで孔が一つのものと、尖端を欠いているが、長径およそ3cm、孔が2個つけられたやや大型のものがあり、ともに鏽はない。有孔円板は、径4cmほどで、孔が2個穿たれている。石斧形の遺物は、長径が11cmと14.5cmで、ともに孔が1

個根元につけられ、大型のものは先端が尖っている。須恵器と土師器は、环や碗・甕などの破片で、土師器片には内面内黒の遺物が含まれている。池ノ平遺跡の出土遺物は、これらの祭祀遺物や古代の遺物の他に、先土器時代の尖頭器・石刀、縄文早期から後期にわたる各期の土器片、土偶・耳栓・石鉢・石斧・石匙・凹石などの石器、弥生後期の土器片などである。

7 鳴石原遺跡

鳴石原遺跡は、鳴石遺跡と鍵引石遺跡の中間点にあり、明治11(1878)年から16年ころに執筆された『長野県町村誌東信篇』¹⁷にも、

「玉石多くあり、其質青黒二色、穴ありて勾玉管玉の少なるもの、如し。」
と滑石製模造品の出土が記されている。

しかし、この記述は、古代の祭祀遺物と中世造構の与懸塚とが混然としており、古代の祭祀遺跡として知られるようになったのは、昭和初期ごろと考えられる。

藤森栄一氏は、与懸塚附近の遺物について著書『古道』に、

「勾玉はこの辺り一帯に出るのだという。一行は草の根を分けてさがしたが、夏草があまりに繁りすぎていた。しかし、十五・六個ほど見つかった。それは滑石で作ったまるい鏡・劍、それに小さな白玉だった。」

と述べ、有孔円板・劍形・白玉などの滑石製模造品15~6個を採集したと記している。

また、八幡一郎氏は、著書『北佐久郡の考古学的調査』¹⁸に、

「小玉、雨境岬付近から最も多量に採集されてゐるのは、滑石製の薄い小玉の類であった。与懸塚発見の四十粒を第三八図(中略)に掲げた。」

と記している。

従って、与懸塚付近にも祭祀遺物を出土する遺跡が存在したことは明らかである。しかし、遺物の採集地点は、与懸塚の附近といわれているのみで、具体的な地点は明らかでない。鳴石原遺跡の範囲は、勾玉原遺

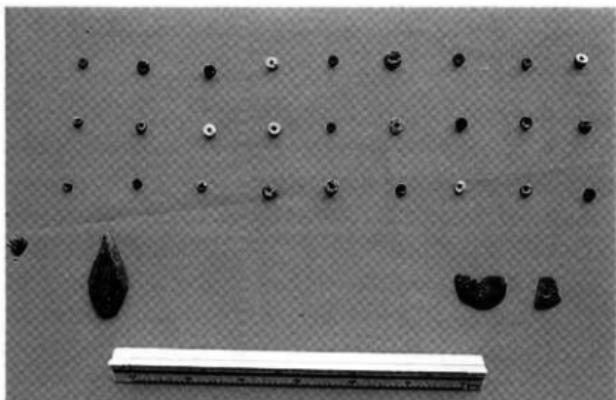


写真14 鳴石原遺跡採集遺物（上田市立国分寺資料館蔵）



写真15 鳴石原遺跡にある雨境峠頂上の標柱

中与惣塚の附近は、現在の雨境峠の最高地点、標高1,578.2m附近を中心にして、南北が中与惣塚北方の標高1,575m附近から

与惣塚東南方の標高1,580m附近に及ぶおよそ400m、東西が中与惣塚の西方150m附近から中与惣塚北東方の標高1,570m附近

までのおよそ450mの範囲が、広い平坦面を形成し、地形的に遺跡の範囲を推定することは困難である。

中与惣塚の附近から劍形・有孔円板・白玉などの祭祀遺物が採集されていることは、藤森栄一氏などの著書によっても明らかであり、平成6年の調査でも中与惣塚の南方およそ260mにある与惣塚の附近から、8世紀（奈良時代）と推定される土師器の破片が発見されている。

古代の道・古東山道は、鳴石遺跡と鍵引石遺跡を直線で結んだ地点を通っていたことは論理的に十分推考される。この地点を地図上で見ると、鳴石遺跡・中与惣塚附近・中間地点にある標高1,620.1mの円頂丘状の小丘陵、鍵引石遺跡がほぼ一直線上に並んでいる。そして、鍵引石遺跡は、小丘陵の南側に位置し、鳴石原遺跡は、小丘陵の北側裾部の草原に位置している。

それらを参考にして推考すると、鳴石原遺跡の範囲は、北側が中与惣塚北方の標高1,575m附近、南側は与惣塚の東側附近まで、南北およそ200~250m、東西は鳴石遺跡・鍵引石遺跡を結んだ線、すなわち古東山道推定路からあまり離れない70~100mほどの範囲の草原地帯と考えられる。しかし、この地区は、牧地の造成によって大きく表土を動かしているので、すでに確認は不可能である。

この遺跡の名称は、勾玉原遺跡の位置が確認されたので、与惣塚との混同も避けて、主たる地籍の字名によって鳴石原遺跡と呼ぶことにした。

与惣塚付近の採集遺物は、必ずしも明確でないが、上田市立国分寺資料館にある劍形の破片1個、有孔円板1個・小玉27個と長門町古代ロマン体歴館蔵の勾玉2個、管玉3個と白玉などがあり、いずれも児玉司農武氏が採集したものといわれている。

この他にも祭祀遺物を採集し、所蔵していたといわれる人たちが大勢いる。しかし、再三調査したが、現在は散逸してほとんど所在が不明になっている。

注

- 1 一志茂樹「我が国中部山地上代交通路の一性格（承前）」『信濃』第5巻第7号

右東山道を「枝突峰を越えて諏訪盆地に下り、その山浦地方を過ぎて雨晴峠にかかり、役ノ行者越を春日に山、佐久地方をすぎ、碓氷峠の手前にて信濃國府からの道と合してゐる。」と推考している。

そして、「令集解」巻22にある「須芳山の嶺道」を「役ノ行者越」としている。「役ノ行者越」は、在の県道の上附近を通っていたと考えられる道である。

- 2 一志茂樹「諏訪の山道」「古東山道」P340 平成5年 信毎書籍出版センター

- 3 大場幹雄「総説中部地方」「神道考古学講座」第2巻神道前期 昭和47年 雄山閣

- 4 永峰光一・桐原健「中部山岳」「神道考古学講座」第2巻神道前期 P109 昭和47年 雄山閣

- 5 森将軍塚古墳発掘調査団「史跡 森将軍塚古墳」更埴市教育委員会 1992年

- 6 埼玉県教育委員会「植物山古墳出土鉄刺金象嵌銘文概報」1979年

- 7 国史大系編修会「新訂増補 国史大系 延喜式後編」P713

- 8 国史大系編修会「新訂増補 国史大系 令集解 第三」P639 吉川弘文館 昭和47年

- 9 国史大系編修会「新訂増補 国史大系 日本書紀大綱目」P438 吉川弘文館 昭和48年

- 10 稲垣市右衛門「立科山見分記事」「長野県史 近世史料編」第2巻(2)東信地方 P54

長野県史刊行会 昭和54年

- 11 金子證實「南嶽遺物記」「信陽佐久立科高井飯盛山嶺籠 蔵田八箇略誌」 P46

宝暦8年 保科信史訖 昭和50年 立科町教育委員会

- 12 楠山林繼「峠と古道」「季刊 考古学」第46号 P32 雄山閣出版 1994年

- 13 藤森栄一「古道」P192 学生社 昭和41年

- 14 大場幹雄「峠神の祭祀とその遺物」「神道考古学論叢」茅芽書房 昭和18年

- 15 稲垣市右衛門「立科山見分記事」前掲書 P54

- 16 金子證實「南嶽遺物記」前掲書 P46

- 17 八幡一郎「北佐久郡の考古学的調査」 北佐久教育会 昭和9年

- 18 大場幹雄「雨境峠」「まつり」P77~78 学生社 昭和42年

- 19 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査報告書」P10

立科町教育委員会 昭和41年

- 20 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」「信濃」第19巻第6号 P57

- 21 桐原健「雨境峠遺跡群」「長野県史考古資料編」P763 長野県史刊行会 昭和57年

- 22 宮坂英次・児玉河農武・宮坂虎次「長野県大門峠創造跡発掘調査報告」

『考古学雑誌』51-1 昭和40年

IV 遺構と出土遺物

1 鳴石遺跡（図3・別図1・図版）

立科町教育委員会は、町誌編纂事業に併せて文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて、平成5（1993）年と翌6年にわたって、雨境峠祭祀遺跡群の調査を実施した。鳴石遺跡の調査は、その一環として行い、遺跡の範囲と性格・現状を把握するために実施し、集石遺構の発見など大きな成果を収めることができた。

鳴石遺跡附近の微地形は、竜ヶ峰溶岩を基盤として、その上に薄い泥流層（土石流）が覆って形成された緩い4-5°の北西方斜面に位置し、調査区の西側は傾斜が急になっている。



写真16 調査前の鳴石遺跡

れる人が多い。

調査の方法は、鳴石（巨石1・以下鳴石と記す）の南東8mの地点を基点A1とし、磁北方向に1~7、それと直交する東西方向にA~Hの4m×4mのグリッドを設定して発掘調査を実施した。そして、調査の手順は、調査の主目的である遺跡の範囲を確認するため、最も注意を要する鳴石の周囲約5m四方を残して、その周辺部から調査を開始した。

調査は7月27日に、A1~A5グリッドから着手し、A1~D1、D1~D5、A5~D5の順に実施し、さらに北・西方へと調査範囲を拡大する方法をとった。調査の進行にともなって、周辺地区にも不規則、または円形に大小の礫が分布することがわかったので、順次調査区を拡張して追究し、最終的には約743m²の範囲を調査することになった（図5）。

遺跡の現状は、昭和40年ころ植林された落葉松林で、木立が10mを越えるまでに成長している。しかし、それ以前の遺跡附近の景観は、「長野県史」などに掲載された写真によれば、一面が草原であり、南正面に蓼科山が望まれ、東方には佐久高原から上信国境の山々までが容易に眺望できる絶好の位置にある。また、調査区の東側は、細い林道をはさんで蓼科第二牧場の牧地が広がり、観光シーズンを中心に、四季を通してこの地を訪

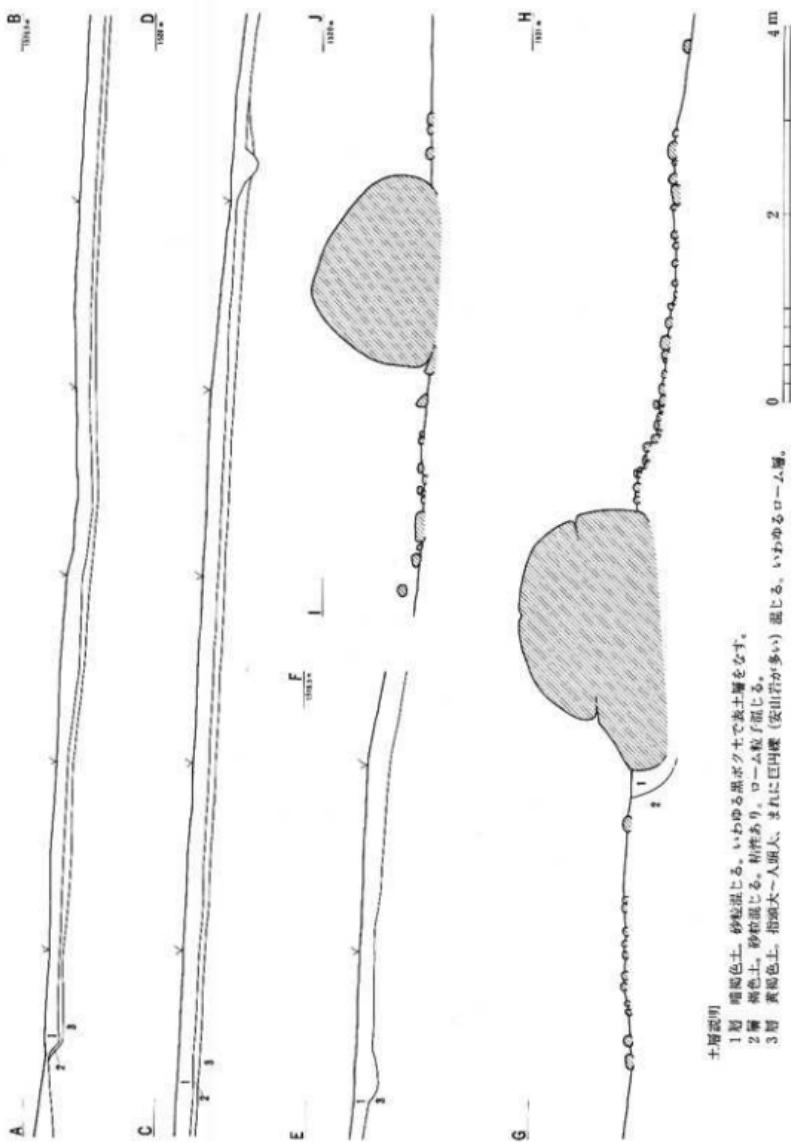


図9 鳴石遺跡の構造および地層断面図 (1 : 60)

土層記号
 1層 黄褐色土。砂粒混じる。いわゆる黒がけで灰土層をなす。
 2層 棕色土。砂粒混じる。稍性あり。ローム粒が混じる。
 3層 黄褐色土。指頭大～人頭大、まれに巨頭深（安山岩が多い）混じる。いわゆるローム層。



写真17 鳴石遺跡・集石遺構の調査

調査は遺跡のはば全面にクマザサが茂り、また、落葉松の根と古株などが多く、さらに雨天続きで困難を極めた。

地層のプロファイルは、およそ10cm前後のクマザサの根を主体とする芝土が表土層をつくり、その下層に12~3cmの黒色土層(第2層)が続き、直ちに泥流層(第3層)に連する場合が多くみられた(第9図)。

また、鳴石と北西の巨石(以下巨石と記す)の周辺附近は、黒色土層(第2層)の下層に褐色土層があり、泥流層へと続いていた。しかし、今回の調査は、雨続きの不順な天候と調査日程の関係から鳴石と巨石の周辺附近では、褐色土層上面で調査をとどめ、褐色土層が認められない周辺地区では、泥流層上面を検出面とした。

鳴石、および巨石周辺の調査は、縁辺部分の調査の見通しがついた8月4日から着手した。調査の方法は、予め設定されていた4m×4mのグリッドを4分して2m×2mのグリッドに分割し、鳴石を中心にしてA3・C3グリッドではE-W方向に、B2・B4グリッドではN-S方向に、幅80cmのトレンチを設定して調査を実施した(写真17)。

この結果、鳴石の周囲、さらに北西10mにある巨石の周囲に、人頭大以下の礫が密集する遺構が検出された。このため、さらに慎重を期して各トレンチの中間の位置に対角線にトレンチを追加して調査を進めた。調査着手前の鳴石と巨石の周囲は、大部分が丈の長い雑草に蔽われ、B1~3の位置に細い見学用の通路があって、5~10cmの厚さに碎石が敷かれていた(写真16)。

鳴石の周囲は、下草を刈り取り、厚さ5~6cmの芝土を剥ぐと、直ちに礫面が露出した。礫層が失われた南側では、芝土を剥いで黒色土層(第1層)を掘り下げ、第2層の褐色土層、あるいは第3層の泥流層を遺構検出面とした。

(I) 鳴 石

鳴石遺跡には、集石Ⅰ遺構の中心部に、青灰色角閃石複輝石安山岩の偏平な巨石が、2つ鏡餅状に積み重なった状態で存在している。下石の南北径は295cm、東西径が306cmで、東側部分が厚

い舌状に競爭り出し、平面は隅丸三角形を呈する（写真18）。

上石は南北径が235cm、東西径が218cmで、平面は橢円形を呈し、頂上部分に径12cmほどの穴が穿たれている。2つの石は、丸みのある自然石で、加工痕は見受けられない。

しかし、上石の南側の表面に5箇所、敲打による10~15cm位の窪みがある。この痕跡は、現在も鳴石を訪れる人たちが、鳴石の反響音を聞くために敲打しているので、当初からあったか否かはわからぬ。

敲打をするのは、上石と下石の間に間隙があり、鳴石の名が示すとおり、拳大の石で上石を叩くと、余韻のあるきれいな音がするためである。

鳴石の上石と下石は、極めてよく似た自然石で、これをうまく饅頭状に重ねているが、割れ目の各部位寸法は、外見的にも違いがあり（写真19）、計測値によってもかなりの誤差がある（表3）。また、鳴石の上下の石は、溶岩組織などにも差異が

あり、明らかに別の石を

重ねたものと考えられる。反響音の原因是、この流理構造の異なる2つの石を重ねたために、必然的に上下の石を重ねた内部に間隙を生じ、上石を敲打することによって音波が反響して余韻のある音を発するものと考えられる。

平成5年度の調査では、鳴石の東際に礫の分布の疎らな所があり、第1層の黒色土が落込んでいた。60cmほど掘り下げたが、第3層（泥流層）に達せず、検土杖によって確認したところ、さらに30cmほど下に泥流層があることがわかった。



写真18 東側から見た鳴石



写真19 西側からみた鳴石

cm		25	50	75	100	125	150	175	200
長 径	上石	160	232	235	226	217	193	163	90
	下石	168	230	238	220	186	168	158	123
短 径	上石	150	178	203	215	212	192	170	142
	下石	100	130	200	225	225	213	196	165

表3 鳴石上石・下石最大径部分の接觸面の寸法（基点 長径南・短径東）

(2) 鳴石および集石断面の調査 (図10)

鳴石は、巨石自体は自然石を積み重ねたものであるが、その位置や配置の構造には、この時点での人の手が加わっている可能性が確認された。すなわち鳴石の周囲には、堀込みがあり、集石遺構も方形プランを意識して構築されたということを概報でも明らかにしたが、鳴石の据え置きと集石I遺構の構築の前後関係については、明確に判断を下すことができなかった。

そのため平成6年の調査では、東西方向に鳴石と集石遺構を横断するトレーナー(K-Lトレーナー)を設定して課題の解決を図った。



写真20 鳴石の東側トレーナー

トレーナーの壁面をみると、鳴石の東側と西側では、大きな違いがある。東側のトレーナーでは、地山への掘込みが鳴石の東4m附近からはじまり、階段状に落込んで、鳴石の下では深さ1mほどに達している。

堀込みの覆土は、7層に分類されたが、基本的には黒色土・褐色土と地山の火山灰土が塊状、あるいは粒状に混じり合った土層であり、土層断面の所見からは埋め戻しが何度かに分けて行われたことがうかがえる。

埋め戻しがほぼ終了した段階で、径1m近い石を鳴石から50cm~1m位離れた位置に配置し、その石を覆い隠すように鳴石の周囲に拳大の礫を厚さ30~50cmほどに積み重ねて集石Iが造られていることが確認された。

次に西側では、堀込みの深さは、30cm強程度で、10cmほどの土が埋め戻された後、集石Ⅰが構築されている。集石を構成する礫は、下の方ほど大きく、人頭大のものも見受けられるが、上部ほど小さくなることは東西とも同じである。また、鳴石の下石は、集石Ⅰの上面から60cmほど埋っている。

以上の所見と昨年度の調査結果を併せて鳴石と集石Ⅰ遺構の構築方法を推考してみたい。まず、堀込みは、鳴石の東側を中心にして、かなり広範囲に行われたと考えられる。その範囲は、およそ東西方向に8mにも及んでいるが、断面形は東側で深く、西側では浅くなり、かなり不整形な状態である。これは鳴石の形態と搬入・据え付けの方法に関係するものであろう（写真20・21）。

堀込みが半ば埋め戻された状態で鳴石の下石が据え置かれ、さらに鳴石から50cm～1mの距離を置いてかなり大きな石が配置されている。これに類する大きな石は、トレンチ以外の東側に4個が確認できる（写真22）。

これらの地点は、集石が部分的に攪拌された地点で、集石の下のかなり深くまで大きな石が埋設された状況が確認できる。最後にその大きな石を覆い隠すように集石Ⅰが鳴石の周囲に構築されたものと考えられる。

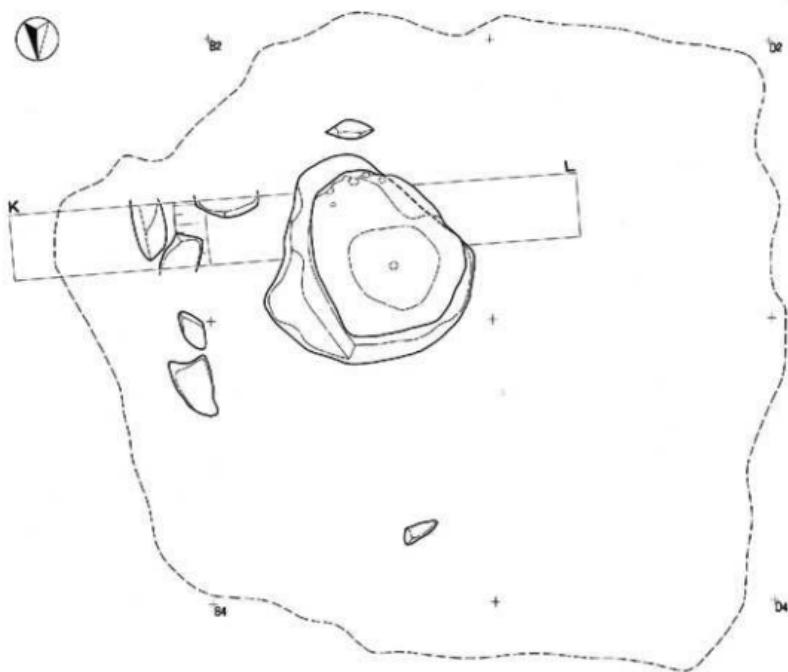
集石Ⅰ遺構も、単にケルンを造るような恣意的なものではなく、鳴石を中心に径7mの円形プランに築かれ、表面も水平になるように整えられて、この円の外側は緩やかなスロープをしている。

そして、集石Ⅰ遺構の外縁は、部分的に攪拌されているが、復元すると南北が10m、東西が11mの方形プランをなしている。鳴石と集石Ⅰ遺構は、これらのことから鳴石が据え置かれた後に集石遺構が構築されたことは明確である。しかし、鳴石の配置と集石遺構との構築時期の時間的関係は、遺物の出土が皆無に近い状況であるため、速断することは困難である。

しかし、過去の報告や調査例から推考すると、集石Ⅰ遺構の表面、若しくは集石の裏面で滑石製模造品などの祭祀遺物が検出されていることなどから、時間差はあったとしても、かなり小さいものと指摘するに留めておきたい。



写真21 鳴石の西側トレンチ



1. 深土礫層。黒ボク土が主体。
2. 黒色土。
3. 褐色土。黒ボク土と9層の混合。
4. 褐色土。9層が主だが、炭、黒色土粒混じる。
5. 褐色土。4層より9層の混入多。
6. 貫褐色土。2層と9層の混合。
7. 黒色土。9層土粒混じる。
8. 明褐色土。わずかに炭粒混。
9. 黄褐色土。疊山。

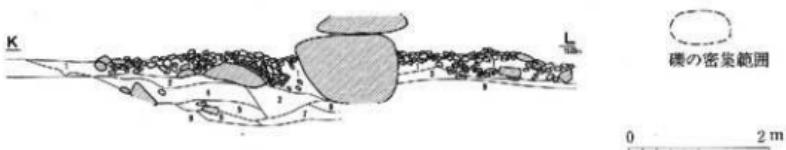


図10 鳴石東側トレンチ断面実測図

また、鳴石の東側を中心にして、堀込みが周囲の広い範囲になぜ行われたかについては、判断を下す具体的な資料は得ていません。しかし、鳴石の下石の下面が平らでないことも大きな要因であろう。

すなわち、鳴石の下石は、東西の厚



写真22 鳴石・東側トレンチ断面

さがかなり異なるので、上に上石を据えるために、下石の上面を水平にする必要があったことは容易に推察できる。従って、下石の据え置きには、工法上大きな堀込みが必要であったとも考えられる。この工法は、およそ6～7世紀ころに、立科地区でも平野部で造られていた古墳の石室の構築法などを考えれば、無理な推論ではないであろう。

また、鳴石の下石が、この位置の地山に包含されており、鳴石の下石を掘り出した後にできた痕跡ということも考えられる。しかし、この場合は、東側だけが深く堀込まれ、古墳構築に用いられる版築法のような工法で、幾層にも硬く固めて埋め戻されている事実の説明が必要になる。そして、鳴石の上石と下石が、別の自然石を用いていることも、この問題の推考に大きなヒントを与えてくれるものと考える。

注

1 「蓼科山麓雨境峠祭祀遺跡群 概報」P20 立科町教育委員会 平成6年

(3) 集石・遺構

鳴石の周囲には、南北が9m、東西が10.2mのはば方形プランで青灰色角閃石複輝石安山岩を主体とする礫が集積されている。植樹などによって部分的に攪拌された所は10か所以上におよび、ほぼ完全に原形を残していると考えられるのは、鳴石の西側部分だけである。

集石遺構の表層は、鷹卵大から拳大の円礫からなり、その下部は人頭大の礫が多くみられる。平面的には、D2杭からD4杭にかけては、人頭大の円礫が第2層上面に礫の端面をそろえて出土しており、その状態から集石遺構の縁辺は、直線上に整えられていたと判断される。しかし、

南・北・東側は、集石表面の礫の崩落・移動が著しく、プランの推定は困難である。集石は、鳴石に向って厚く積み重ねられ、D列とC列附近の比高は50~60cmを測る。

鳴石の北西側直下のC3グリッド南東隅附近では、集石の表面がほぼ平坦面をつくり、この平坦面と集石遺構外縁の傾斜面との境界が、鳴石を中心とする7mほどの円弧をなしているようである。以上から鳴石の周囲の集石は、下面外縁の南北径が10m、東西径が11mの方形プランで、上面が径7mの円形になるように構築された遺構と推定される。なお、集石を構成する礫は、地山である第3層に含まれる青灰色角閃石複輝石安山岩が主体である。

また、鳴石の北西方約6.5mには、長径103cm×短径93.5cmの隅丸方形に近い卓状の安山岩の平石がある。この平石は、周囲の礫群の石と比べて際立って大きく、石の上面が平らで、下部は自然石のままの丸味をもっている（写真23）。

そして、鳴石の北側には、太い榼（ニシキギ科の落葉亜喬木）の古木があり、鳴石の北西端を押上げるように根を張っている。兩塊時の祭祀遺跡は、ほとんどの遺跡が榼の木を伴っているのが特色である。榼の木は、昔から諏訪地方で「禊えの木」と称して神木に含められている。鳴石の榼の木は、樹幹の太さなどから推定しても、かなりの樹齢の古木と考えられる。

鳴石遺跡では、北西方に置かれた平石の中心点を榼の木・鳴石の中心点と結べば、その前方の落葉松の木の間間に、蓼科山の頂上を見ることができる。従って、この平石は、卓状の形態と大きさ、鳴石・榼の古木・蓼科山の方位などから考えて、蓼科山の祭祀に用いられた供獻用の台石と考えることができる。

古代の人々は、榼の木を勧請木とし、鳴石を整石（座）として、蓼科山の神・峠の神々を鳴石に



写真23 鳴石と集石 I 遺構

招き降ろし、供獻の品々を整えて幣を手向け、旅の無事を祈つて奉斎したのであろう。

また、鳴石の周囲の集石遺構は、蓼科山の礫を積んで外縁を方形に造り、鳴石の周囲をさらに一段高く円形に築いている。

この集石遺構は、

鳴石との位置関係と形態からして、蓼科の神を祀る神聖な場所を区画した磐境と考えられる。

(4) 巨石と集石II遺構

鳴石遺跡には、平成5年の発掘調査で、鳴石の周囲と北西約10mにある巨石の周囲に、人頭大か、それよりやや小さい礫を積んで築いた遺構のあることが確認された。

鳴石の北西にある巨石は、周囲の集石との関係を見ると、集石IIの上に載せられたものと考えられる。この巨石は、南北径が215cm、東西径が217cmの球状の円い巨石で、この巨石にも敵打痕がある。



写真24 鳴石遺跡の巨石と集石II遺構

巨石の周囲の集石遺構は、南北が4m、東西5mの範囲に、鶏卵大から人頭大の礫が積み重なっている。構成する礫は、鳴石の周囲の集石I遺構より大きめの礫が多い。

D4グリッドの西側では、集石の外縁が直線状に見える所もあるが、植林などによって攪拌されているため、分布範囲が不整形で、基本的なプランは推定できない。しかし、集石が巨石の下に入込む状況や集石I遺構と鳴石の関係などから推考すると、集石IIが造られた後に巨石が置かれたものと考えられる。

(5) 周辺地区の礫群(図版I)

別図Iに示したように、調査区全面に礫が分布する。地山第3層中には青灰色角閃石複輝石安山岩の偏平な円礫と亜円礫がかなり含まれているため、出土した礫の総てが遺構にかかるものとは推定できない。そして、集石遺構周辺の礫は、遺構から移動したものと考えられる。

また、平成5年の調査では、G1・H1-H3グリッドにかけて、青灰色角閃石複輝石安山岩の偏平な円礫・亜円礫が、径4.5mほどの円環状に並ぶように観察された。しかし、遺物や焼土などが検出されなかったため、今後の調査に待つことにした。

平成6年度の調査では、この円環状の配石の内部にトレーンチを設定して精査した。大きな礫の下には、薄い褐色土層があり、第3層の泥流層へと続いている。この配石は、遺構と確認する資



写真25 鳴石遺跡の円環状配石の調査

料は得られなかったが、同様な形態の配石が、勾玉原遺跡の調査区西南隅のG・H 1~2グリッドでも発見された。また、さらに規模の大きい配石が、勾玉原遺跡東南端付近の森谷雅美氏別荘(47号)の庭で2箇所発見された。

円環状配石の付近からは、森谷氏と家族の話によると、昭和47(1972)年の別荘造成工事の際に、かなりの量の土師器片が発見されたといわれる。その資料は、しばらく保存されていたというが、現在所在が明らかでなく、調査期間中に確認をお願いしたが、いずれかに片付けられて発見できなかった。

これら円環状の配石は、いずれも鳴石遺跡と勾玉原遺跡の祭祀遺跡の中にあり、特に森谷氏の別荘にある配石の附近では、相当量の土師器が出土するなど、古代の祭祀に関係する可能性が大きい。これが古代祭祀に関係する遺構だとすれば、神の鎮座する神聖な場所を区画する磐境であったと考えられる。

(6) 溝状遺構

調査区北東で検出された溝状遺構は、第2層褐色土層上面を検出面とし、第1層の黒色土層の落込みがあり、調査中の削り込みがあるためやや浅くなっているが、深さは7~10cm、幅が30~60cmで、340cm~350cmの間隔において東西の位置で確認された。

両側の溝状遺構の間は褐色を呈し、土間の床のように硬く締り、ブロック状に剥離する状況が認められた。この褐色土層は、表面の黒色土と第3層の黄褐色の火山灰土が捏ね合わされた状態で形成されたものと考えられる。

この溝状遺構の心心間の幅は、380~400cmを割り、溝の断面はU字形で、覆土の下底に砂粒が多く混入し、降雨時の流水、あるいは滌水も考えられる。

溝状遺構は、鳴石の東側にものびているものと思われるが、集石I遺構の礫が上面に崩落していたため、調査日程の関係もあって今後の調査を待つことにした。

推定路面の調査は、さらに大起製貫入式土壤硬度計を用いて硬度を調査した。その結果は表4のとおりである。このデータをみると深さ20cm附近から変化が見られる。しかし、遺跡内は、勾

玉原遺跡の場合も同様であるが、古道路面と推定される地点以外にも、広く褐色土層面が分布し、周囲との硬度の差は小さい。これは祭祀行事のために、かなり広い範囲に多くの人たちが移動したためと考えられる。なお、各調査地点の路面と推定される部分の硬度値は、およそ10~20が一般的であった。

また、この両溝間の心線の走行方位は、S-10°Eで、その線を南に延長すれば中与懸塚の40~50m東方を通ることになる。この線をさらに延長すれば、賽ノ河原の東方250mにある標高1,620.1mの小円頂丘の左肩（東方）に向っている。鍵引石遺跡は、この小円頂丘を800mほど下った位置にある。

鳴石遺跡の線を延長した古道は、平成4年6月の緊急調査で、夢科第二牧場脇の売店裏まで直線的に続いていることが確認されている。しかし、平成6年の古道調査では、古道推定路は、小円頂丘の左肩ではなく、頂上を通っていることが確認された。

従って、この古道推定路は、途中の小円頂丘が見える地点附近で、僅かに西に寄つて進んだものと推考できる。この場合は、中与懸塚附近を通ることになり、前述の鳴石原遺跡の位置と一致することになる。



写真26 硬度計による調査

深さ cm	W E			
	0	1	2	3 m
2.5	5.0	5.0	5.0	3.0
5.0	5.5	5.0	6.0	3.5
7.5	5.5	5.0	9.0	3.5
10.0	5.5	5.0	9.0	3.5
12.5	8.0	5.0	9.5	6.0
15.0	8.5	5.0	9.5	11.5
17.5	7.5	7.0	9.5	11.5
20.0	8.0	12.0	10.5	11.5
22.5	9.0	11.5	16.0	13.0
25.0	9.0	11.5	16.0	13.5
27.5	9.0	11.5	17.0	15.0
30.0	9.0	ston	ston	ston
32.5	ston			

表4 鳴石遺跡推定路面の硬度調査値

(7) 出土遺物 (図11・図版1)

鳴石の周囲の黒色土中、および集石I遺構の隙の間に、平成5年の調査で7点(図11上1~7)、平成6年の調査で3点(図11下1~3)の遺物が出土した。

平成5年の調査で出土した1・3・4は銭貨である。1は寛永通寶の一文の鉄鋳銭で、3・4は裏面に青海波のある明和期の四文の青銅銭である。2は煙管の雁首で、竹管も一部残っている。5は黒曜石片で、剥離面を有する定形石器ではない。

6は須恵器の坏蓋片か坏の胴部と判断される小片で、ろくろ成形している。この器形は、神坂

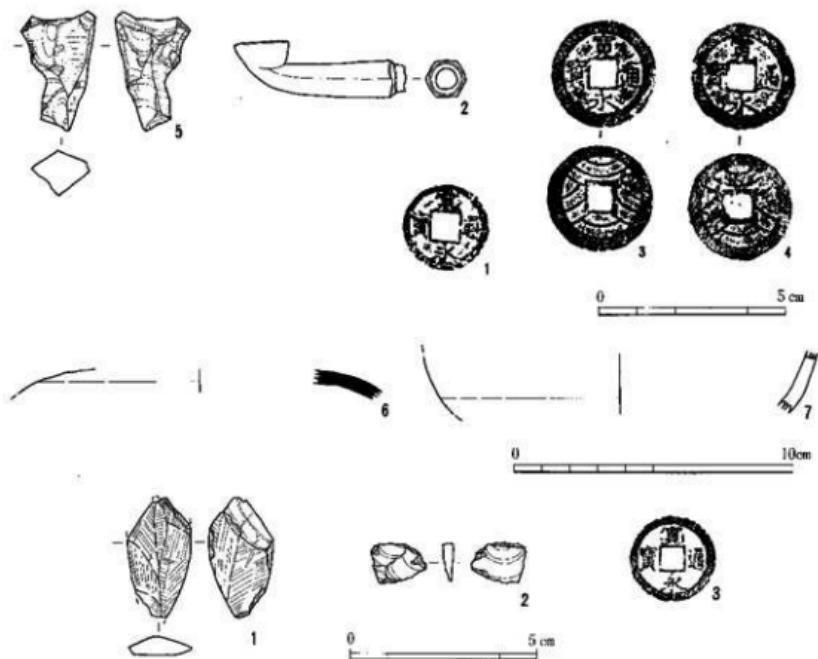


図11 鳴石遺跡出土遺物尖削図

鉢出土遺物のⅣ期の杯蓋片に類似する。7は土師器の环の脇部片で、外側はロクロ成形であり、黒色処理はされていない。

他に鳴石の北側で染付の磁器片（浅間山をモチーフとする）と土石の附近で五厘銅錢が表面採集されている。

平成6年の調査では、鳴石の北東附近で剝形の石製模造品が採集された。この遺物は、尖端と基部の一部を欠いているが、現存の長径が32mm、最大幅が17mmで鏽がつけられ、擦痕が両面に残っている。石材は滑石とするよりも粘板岩としたほうがよいであろう。

また、集石I遺構の断面調査のトレンチ内から3点の遺物が出土している。そのうち図示したのは、タンパク石製のチップと元文期の寛永通寶の一文銭である。その他に須恵器の环と思われる小破片が出土している。

藤森栄一氏は、昭和4(1929)年の夏に、源訪史編纂会の人たちと兩境跡を踏査し、鳴石のすぐ

脇の防火線の堀割で、「簡単に石製模造品が拾えた」と記している。また、大場磐雄氏は昭和8年10月に鳴石遺跡を調査し、「²峠の祭祀とその遺物」に「幸いにもこの附近を探査した結果、該石の北方数間の箇所より滑石製白玉三個と有孔円板及び劍形等を採集できた。」と記している。

注

- 1 大場磐雄『神坂峠』阿智村教育委員会 昭和44年
- 2 藤森栄一『古道』学生社 昭和41年
- 3 大場磐雄『神道考古学論叢』葦牙書房 昭和8年

(8) 鳴石の築造年代と構造に関する考察

鳴石と巨石、その周囲の集石遺構の築造年代は、出土資料がきわめて少ないので、明確な推論は困難である。鳴石の周辺から出土した須恵器片は、クマザサなどを主体とする芝土を剥いだ下の黒色土層（第1層）の第2層褐色土層上面附近、および集石I遺構の礫の間から検出された。

この須恵器の器形は、神坂峠出土遺物のIV期に類似し、色調は暗灰色である。また、今回の調査で採集した劍形の右製模造品は、神坂峠Aタイプに類似し、無孔の形式である。大場磐雄氏が採集した滑石製白玉3個と有孔円板及び劍形の祭祀遺物は、実見していないので判断できない。鳴石築造の年代は、これらの資料を総合して推考すると、古墳時代後期ころに遡る可能性があるものと考える。

神坂峠と入山峠の出土遺物は、古墳時代初期に遡るとされているが、鳴石遺跡にはこれらに比定できる古い時期のものは発見されていない。しかし、兩境峠は、信濃坂と呼ばれた神坂峠から碓臼坂と呼ばれた入山峠に至る中間の祭祀遺跡であり、時期的に全く無関係であるとは考えられない。

次に鳴石、および巨石と集石遺構の関係について考察してみたい。巨石と集石II遺構は、明らかに集石遺構が築造された後に、巨石が集石の上に載せられ、人工的遺構であることは疑問の余地がない。

また、鳴石は、上下2個の巨石を鏡餅状に重ねているが、上石と下石の溶岩構造、大きさが異なり、明らかに別の石を重ねて築いた遺構である（表4）。



写真27 鳴石遺跡の実測風景



写真28 和巳沢地縁の奥にある巨石

因みに、鳴石の東南方の和巳沢の奥には、鳴石と同様に、節理構造に沿って割れた巨石が各所にあり、鳴石もこの地区の巨石を利用した可能性が大きい（写真28）。すなわち、鳴石は、下石だけがこの位置にあったとは考え難く、適当な2つの巨石を選んで、この地に運び、祭祀の場を構築したと考えるのが自然のようである。

また、集石I遺構は、東側トレンチ断面の所見から一端掘り返した後、

周辺部では、4段に分けて古墳の版築法と同様な手法で突き固めながら埋め戻している。そして、鳴石の際およそ1mの範囲では、2段に埋め戻し、その外縁の上に径1mほどの大きな石を配置し、その上に人頭大から拳大の円礎を次第に積んでいる（図10）。これらの調査結果からみて、集石I遺構も人工的遺構と考えるのが合理的である。

鳴石と集石I遺構の構築時期の関係は、出土資料からは明確でないが、集石の礎の間から須恵器などが出土し、また鳴石と集石遺構の構造的な関係から見て、同時期、あるいは時間的な差異があつてもその差は余り大きくないものと推考される。

また、鳴石遺構と北西の巨石遺構との時期的関係は、当時としてはかなり大きな構築物である鳴石と周囲の集石遺構が築かれた後に、小さな祭祀遺構の巨石遺構を築いたとは考え難い。論理的には、はじめに簡単な巨石遺構がつくられ、その後に本格的な祭祀の場として鳴石遺構が築かれたと考えるのが妥当であろう。

鳴石から南の古東山道の推定路は、鳴石で分岐し、嶺道はS-20°-Wの方向にある勾玉原遺跡に向い、鳴石原から鍵引石に向う草原の古道は、S-10°-E方向に向っている。このことは、鳴石の遺構が、郡境の嶺道と平坦な草原の古道の分岐点に構築された重要な祭祀の場であり、時の祭祀を今に伝えるモニュメントと推論する一つの手がかりとなる。

注

- 1 大堀磐雄『神坂峠』阿智村教育委員会 昭和44年
- 2 桜山林繼『神坂峠』『神道考古学講座』第5巻 雄山閣 昭和47年
- 3 大堀磐雄『神道考古学論叢』革牙書房 昭和8年
- 4 福島邦男『古東山道』『望月町誌』第三巻 望月町誌刊行会 1994年

福島氏は「鳴石の周辺の発掘調査で、重要な所見が露呈した。鳴石なる大石は、移動して掘えられた

ものではなく、自然のまま位置しており、祈りの拠点となっていた。そして鳴石を中心にして円形に取り囲むように拳大よりも小さな自然礫が厚く堆積しており、鳴石の根元を三〇センチメートル程度埋めている。この拳大の礫は、まさに鳴石の上に掛けた幣が落下して円形状に堆積した結果であると思われる。このような大石は、鳴石の西一〇メートルの所にも所在しており、やはり同じような状況を示している。』と記している。

雨境神祭跡遺跡群発掘調査団では、平成5年の調査結果を『概報』で、平成6年の調査結果を待って判断するとしつつ、次のように報告している。

「巨石1（鳴石）自体が自然にあったという根拠は逆に見出せず、巨石1・集石1を人工的な構築物と考えたい。」

また、鳴石の周囲の集石は、平成6年の調査結果でも磐境的性格の人工的遺構と考えた。なお、幣と集石の円礫とは全く異なる性格のもので、集石遺構の円礫を幣、すなわち遺物とは考えていない。

2 勾玉原遺跡

(1) 発掘調査の状況

勾玉原遺跡は、佐久・小県郡の郡境附近の丘陵上にあり、その位置は遺物の採集地点を手がかりとして、標高1,579.1mの三角点から峰の最高地点1,581.7mの手前、すなわち森谷雅美氏の別荘附近までの範囲と推考する。

三角点南側の別荘地の道路附近は、尾根の最も高い部分で、蓼科山の眺めが美しい地点である。そして、道路工事の際には土師器が出土したといわれ、遺物は藤澤万佐男氏が所蔵している。従って、この尾根の附近は、祭祀遺跡の調査地点として最も適当な地点であったが、道路と別荘の建物があって、調査は不可能であった。このため平成6年夏の調査は、三角点の南側の山道を50mほど西へ入った別荘と郡境の間の空閑地點、約400m²を選んで実施した。

調査区は、全面が雑草に覆われていたので、調査に先立って7月26日（火）に草刈りを行い、27日に調査区の南端を基点A1として、2m×2mのグリッドを南西方にA～G、北東方に1～10を設定し、7月28日（木）に地形測量を行い、B1・9、C3・5、G1・3・6グリッドから発掘調査に着手した（図13）。

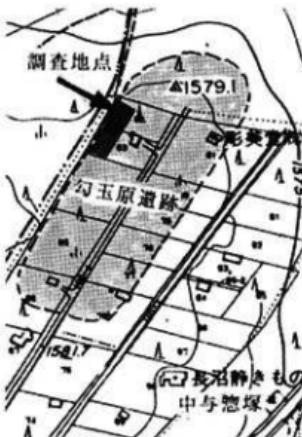
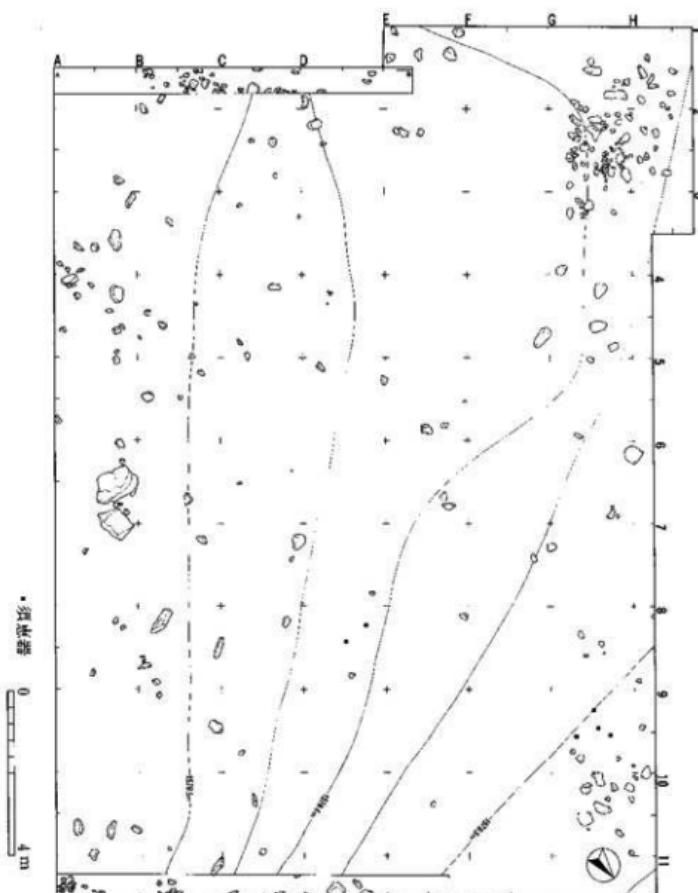


図12 勾玉原遺跡位置図



1. 黒土、黒色土
2. 棕色土
3. 棕色土、5 層土を含む
4. 黄褐色土、黒色土混じる
5. 黄褐色土、安山岩を含む
火山灰土
6. (水準線標高1,580m)

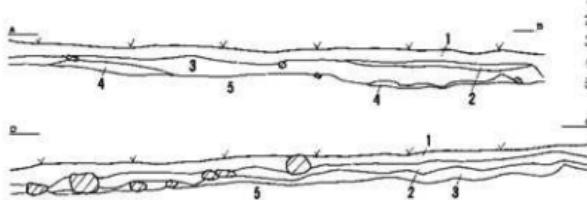


図13 勾玉原遺跡平面図

その後G 1～3 グリッドに円環状の配石を検出し、その内部に蓼科山の方向に向かって並ぶ列石を発見したので、調査区を西方に拡張してH 1～3 グリッドを増設した。

調査区の地層は、5～10 cmほどの芝土と黒色土層（第1層）の下層が、直ちに蓼科山の火山灰土と礫からなる泥流層（第5層）に達する場合と、尾根に近い東側では、中間に褐色土層（第2

層）、古東山道推定路の附近では、褐色土層中に火山灰土と礫が混じる第3層、黄褐色土層に黒色土が混じる第4層を認めた（図13下段）。

この褐色土層は、表面の黒色土と下層の黄褐色の泥流層が踏み固められ、捏ねられるなどの人為的な要因によってできた地層と考えられる。古東山道推定地点の複雑な地層は、道路の改修工事などによって攪拌された結果であると考えられる。

発掘調査は、遺物の検出を目的として総て手掘りで慎重に行い、必要に応じ鏟を用いて精査した。表土層は5

～6 cmの芝土と10 cm前後の黒色土層からなり、その下層の褐色土層上面を造構検出面とし、褐色土層のない地点では、火山灰と礫からなる泥流層上面を造構検出面とした。

調査の結果、6～7世紀に比



写真29 調査前の勾玉原遺跡



写真30 勾玉原遺跡の調査区



写真31 円環状の配石

定される須恵器の坏片などの遺物が検出されたのは、總て芝土直下の黒色土層中で、地表から10cm足らずの褐色土層上面附近であった。

従って、伝えられるように勾玉などの祭祀遺物は、芝焼きなどによっても容易に採集できた筈である。さらに、埋普請などによって土芝が採取されると、芝上と共に遺物が失われる可能性は十分懸念される状況であった。

また、この調査地点は、採集された遺物の分布からみると、勾玉原遺跡の北西

端附近にあたり、遺跡の中心は、調査地点より100mほど南側に寄った尾根の附近と考えられる。

しかし、この広い丘陵の中の狭い調査区から、6～7世紀の須恵器片が6片も出土し、その一部を接合できたのは、ここが遺跡の一角であることを証明している。

また、調査区の南西隅には、安山岩でつくられた円環状の配石があり、その内部に蓼科山の方向に向けて、礫が3条及至は4条の列状に並べられていた。この配石は、内部構造等を精査するため、トレンチを設定して調査したが、50cmほどの扁平な礫と小さな礫が使われて、褐色土層上面に置かれているだけで、遺物などは検出されなかった。しかし、この円環状の配石は、調査区の中で不整形な集石を含めても、これだけ多くの礫が集中して検出された地点は他なく、鳴石遺跡で発見された円環状の配石、及び森谷雅美氏の別荘地の庭で発見された2箇所の円環状の配石とともに、古代の祭祀に関係する可能性がある。特に、森谷雅美氏の別荘地の庭で発見された2箇所の円環状の配石では、附近から相当量の土師器が採集されている。

(2) 出土遺物 (図14)

勾玉原遺跡では、須恵器片6点と黒曜石片1片が第2層の褐色土層上面の黒色土層(第1層)中から出土し、そのうち須恵器の小破片2点を図示した(図14下段1・2)。

1はいわゆる蓋環で、口縁部は薄く、口径およそ10.5cm、ほぼ垂直に立ち上がる特徴をもつことから6世紀末、及至は7世紀初頭に位置づけられようか。

2は环の底部である。底部の調整は、かなり難であるが、ヘラ削りされている。

勾玉原遺跡の遺物は、山の仕事や埋普請などの折にかなり多くの人たちによって採集されたと伝えられている。しかし、そのほとんどは故人で、確認することができない。

大正期から昭和初年ころに祭祀遺物を採集した人々は、伝聞や桐原氏の報告書などによると、

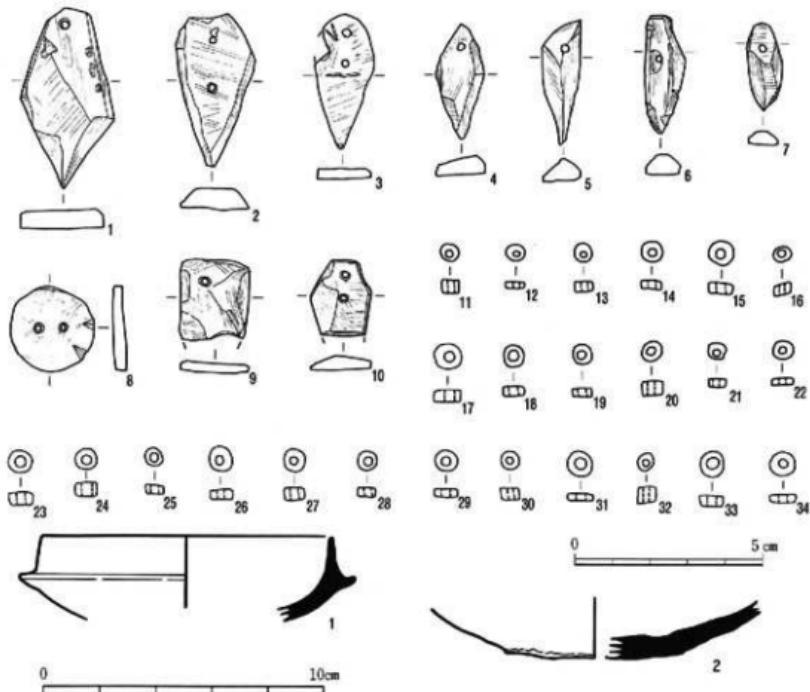


図14 勾玉原遺跡の採集遺物実測図

地元では細谷の山浦勘左衛門氏をはじめ、芦田の山浦巖・寺島父養・小川良增氏などであり、この他に波岡秀次郎・藤田貢氏などの名が伝えられている。

大門の児玉司農武氏の採集遺物は、一般に「雨境鉢出土」と記載されているが、採集の経過などを伝聞によりうかがうと、採集地点は勾玉原遺跡ではなく、中与惣塚の近くの鳴石原遺跡と思われる。

勾玉原遺跡の採集遺物は、その後、さまざまな経路を辿って次第に他人の手に渡り、現在その殆どが散逸して所在が分からなくなっている。

細谷の山浦勘左衛門氏が採集した遺物は、幸い山浦清子氏宅に保存されている。その内容は、剣形9個・有孔円板1個・管玉2個・白玉25個など



写真32 勾玉原遺跡出土遺物

である（図14上段1～34）。

この遺物は、糸で板に留められてガラス入りの箱の中に保管されている。実測は、ガラスを外し、コンパスなどを使ってできるだけ正確を期したが、留め糸はそのままにして実測せざるを得なかったので、若干の誤差は免れない。

剣形の遺物は、7個が完形品、2個は尖端部分のおよそ半分を欠いている。この遺物は、いずれも柄部と剣身部の区分がなく、完形品4個（3～7）と破片1個（10）は、片面に鏽をつけた神坂峠の分類（以下この分類により記述する）によるB類に属し、勾玉原遺跡出土の遺物にはこの形式のものが多い。完形品1～3と破片9は、鏽のないC類に属し、1・2・6・10は双孔で、他は単孔である。

大きさは1が最も大きく、C類1に属し、長さが49mm、基部の幅が12mm、最大幅が23mm、厚さが5mmである。この遺物は、入山峠出土の遺物と比較しても最大値に類する。7は最も小さく、B類3に属し、長さが18mm、基部の幅が約4mm、最大幅が9mm、厚さが4mmである。

有孔円板（8）は、神坂峠出土遺物の大・中円板の中間値を示し、径が22mm、厚さが3.2mmで、双孔の間隔が7mmと狭く、外周はよく調製されたA類である。入山峠の出土遺物にも、この遺物と双孔間隔・大きさの類似したものがある。

白玉は25個保管されているが、ここでは24個を図示した（11～34）。白玉はいずれも完形品で、B類を主体としている。大きさは径7mmから5mm前後のものが最も多く、この大きさのものが14個で56%、およそ4mmのものが8個で32%、3mmのものが1個である。

注

1 桐原健『長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査報告書』P10

立科町教育委員会 昭和41年

2 大場鶴雄『神坂峠』 阿智村教育委員会 昭和44年

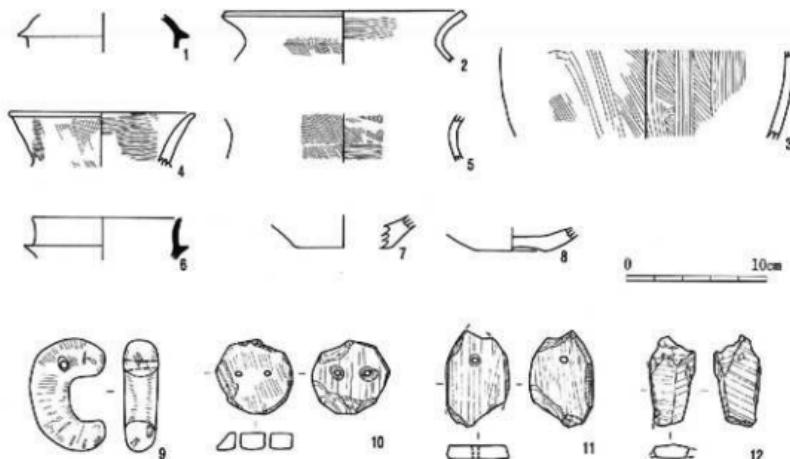
3 横山林繼『入山峠』 軽井沢教育委員会 昭和58年

3 赤沼平遺跡と鍵引石遺跡周辺の採集遺物（図15）

赤沼平遺跡出土の祭祀遺物は、蓼科に在住する藤澤万佐男氏が、女神湖の潟水時に採集した勾玉1個、滑石製の有孔円板1個、剣形破片2個、須恵器の环の破片1個、土師器の甕の破片3個などである（図15）。

勾玉は、A類に分類される完形品で、長さが3cm、丸身のある器面がよく研磨され、神坂峠出土の第23図7のA類の遺物よりコの字形の湾曲が強い。

有孔円板は、滑石製の双孔円板で、孔の間隔が3.5mmで、勾玉原遺跡の遺物より間隔が広い。円板の径は22mm、厚さが2.5mmで、A類の中型の形式に分類される。外周の調製は、勾玉原遺跡出土



1~5・9~12 赤沼平（女神湖西岸）遺跡・6~8 鍵引遺跡附近出土

図15 赤沼平遺跡採集遺物実測図（藤沢万佐男氏藏）

の遺物と比べて粗製である。

劍形は、滑石製で尖端の約半分を欠くC1類單孔の破片1個(11)と、尖端のおよそ3分の1を欠くB3類無孔の1個である(12)。11は現存の長さが25mm、幅が16mm、厚さ2.2mmの無柄で丸味のある形式である。12は現存の長さが23mm、幅が10mm、厚さが1.8mmの細身の形式である。

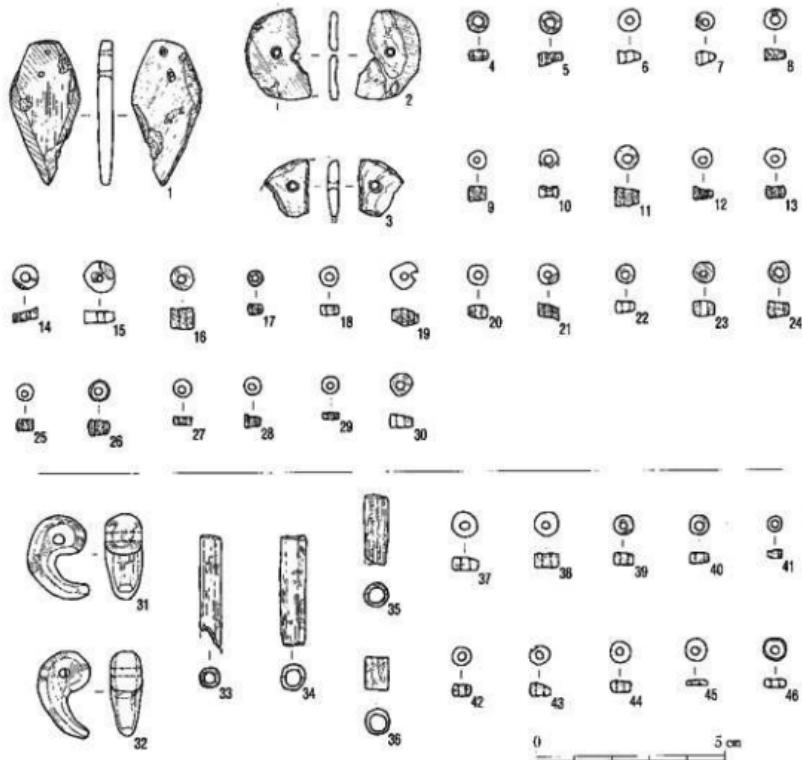
須恵器の壺の破片は、蓋の一部とみられるが、TK



写真33 赤沼平遺跡から望む蓼科山

208形式に類似する初期の特色を示している。上師器の壺片は、内外にハケ調整を施し、外壁にススが付着した破片も含まれている。

図15-6は、鍵引石遺跡周辺から採集された須恵器の碗破片で、赤沼平遺跡出土の遺物と同時期の古式の特色を示している。7・8は、土師器の壺と壺とみられる底部の破片で、いずれも藤澤



1~30上田市立国分寺資料館
31~46長門町古代ロマン体験館所蔵遺物

図16 鳴石原遺跡採集遺物実測図

万佐男氏が採集し、所蔵している。

4 鳴石原遺跡の採集遺物（図16）

鳴石原遺跡出土の遺物は、殆どの場合^{1,2}惣坂の附近、あるいは^{3,4}雨境峠周辺の遺物と記録されている。

国分寺資料館所蔵の1は、C類1双孔の剝形で、長さが39mm、幅が19mmで、表面に刃形をつけ勾玉原遺跡の2の遺物と大きさ、形式がよく似ている。しかし、双孔間の間隔が、約半分の3mm

ほどに作られている。

有孔円板は、いずれも破片である。2はA類の双孔で、孔の間隔の狭い形式である。3は小破片で形式は明らかでない。

臼玉はA類が7個、B類が20個で、大きさは径が7mm～5mm前後のものが14個でおよそ70.4%、4mm前後のものが7個で21%、3.5mm程度の小さい形式が1個である。

長門町古代ロマン体験館所蔵の勾玉は、B類に属し、扁平に作られている。31は長さが21mm、32は長さが23mmである。

管玉は破片を含めて4個あるが、34は長さが3cm、口径が6mmでよく調製され、33は片面の一部を欠いているが、形式的には34と同類である。35はよく調製されているが、長さが19mm、36は長さが9mmの短い管玉である。

臼玉はA類が2個で20%、B類が8個で80%、5～7mmの大型のものが多く、全体の90%を占めている。5mm程度の中型のものはなく、3.5mmほどの小型のものが1個(41)含まれている。

注

1 藤森栄一『古道』P192 学生社 昭和41年

2 八幡一郎『北佐久郡の考古学的調査』 北佐久教育会 昭和9年

3 上田市立国分寺資料館所蔵遺物

4 長門町古代ロマン体験館所蔵

上田市立国分寺資料館所蔵の遺物と長門町古代ロマン体験館所蔵の遺物は、児玉司農武氏が採集した遺物といわれている。

5 池ノ平遺跡の採集遺物(図17)

池ノ平遺跡の遺物は、剣形2・有孔円板1などの祭祀遺物、笏形の石器3、須恵器・土師器の破片、そして中世の古銭などである。

池ノ平遺跡の出土遺物には、これらの祭祀遺物や古代の土器類の他に、先土器時代の尖頭器・石刀、縄文早期から後期にわたる各期の土器片、土偶・耳栓、石鉄・石斧・石匙・四石などの石器、弥生後期の土器片などがある。しかし、本稿では、祭祀遺物と笏形の石器についてのみ簡潔に説明する。

剣形の遺物は、いずれも鏃のないC類に属し、19はC類1に分類されるもので、尖端を欠いているが、現存の長さがおよそ30mm、幅が15mm、厚さが3mm、双孔で孔の間隔は狭い。20はC類2

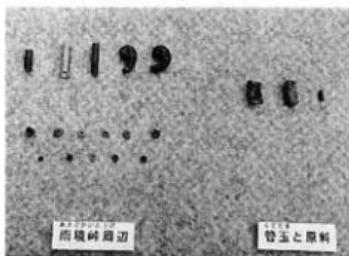


写真34 長門町古代ロマン体験館所蔵遺物

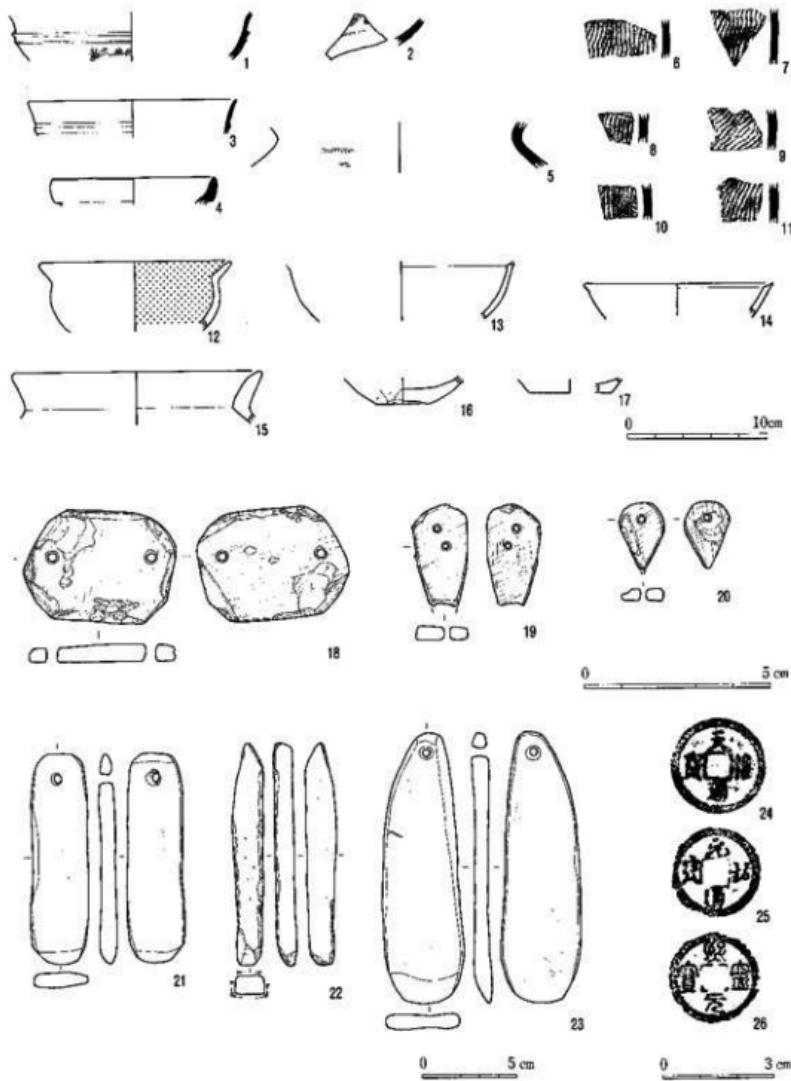


図17 池ノ平遺跡採集遺物実測図（藤沢万佐男氏蔵）

の形式で、長さが18mm、幅が14mm、厚さが1.5mmの単孔である。

有孔円板は、B類に分類される不整形で長方形の形式である。18の有孔円板は、長径が45mm、短径が35mm、厚さが2.5mmの双孔で大型の遺物である。双孔の間隔は29mmを測り、神坂峠の第23図24の形式に類似する。しかし、雨境跡祭祀遺跡群の遺物には、同類のものは見当たらない。

笏形の石器は、21の長さが11cm、23の長さが14.5cmで、ともに孔が1個根元に穿たれ、先端が石斧状に尖っている。22は細身で、ノミ状の形式である。この石器は、石質・形態からみて石斧とは異なるので、笏形石器としたが、蓼科山麓の遺物では、池ノ平遺跡だけにみられる形式である。

須恵器と土師器は、壺や碗・甕などの口縁部・底部の破片で、土師器片には内面内黒の遺物が含まれている。

ここ記した遺物は、いずれも蓼科に在住する藤澤万佐男氏が採集し、所蔵しているものである。池ノ平遺跡の遺物は、この他に宮坂英氏が採集し、尖石考古博物館に保管されているものがある。

6 蔊手刀出土地

蓼科山麓の蔚手刀は、佐久・小県郡境の猿久保・女神湖の東岸・筑波大学附属高等学校桐陰寮の上（現二松学舎寮前）の3箇所から発見されている。

猿小屋地籍出土と伝えられる蔚手刀は、発見の事情が必ずしも明確ではない。この蔚手刀は、昭和30年5月ころ、猿小屋隧道の掘削時に発見されたと伝えられている。この隧道の入口は、女神平の別荘地脇を郡境に沿って下った長門町（旧大門）地籍にあり、古東山道推定路の脇に位置し、赤沼平遺跡のS-34°W、直線距離にしておよそ1,325mの位置にある。

この附近は、猿小屋隧道の掘削のために、かなり広い範囲が削平され、伝えられる発見の場所



写真35 白樺湖畔から望む蓼科山（対岸左側が池ノ平遺跡）



図18 蔵手刀出土地分布図

としての可能性が強い。この附近の地形は、赤沼平に向う北東の道がかなりの急坂であり、南西の箕輪平に向っては、栗研ノ沢に下る傾斜地で見通しが悪い。藏手刀遺失時の事情は明らかでないが、蓼科山麓の古東山道の嶺道推定路の中では、最も難儀な場所と考えられる。猿小屋で発見された藏手刀は、現在東京国立博物館の表慶館2階に陳列されている。

この藏手刀について、東京国立博物館の「武具展」の解説書には、

〈長野県小県郡和田村出土全長48.0古墳時代(7C)東京国立博物館〉

7世紀末から9世紀ごろにかけて東日本を中心盛

行したものである。茎と身とが共作りであり、柄頭が草叢状にまいた形を呈するところから、この名称がある。正倉院御物の「黒作横刀」もこの形式である。茎は柄木を用いず、萬その他を直接まきつけたものもある。和田出土のものは「黒作横刀」とともに、鋒が両刃造であり特徴的である。試みに刀身の一面を研磨したが、地刃のできもよい。

とある。この藏手刀が、東京国立博物館に納められたのは、昭和33(1958)年と記録されている。「武具展」の解説書には、長野県小県郡和田村出土となっているが、博物館の台帳には、出土地は小県郡長門町(元大門村)大門となっている。

また、「北佐久郡志」は、この藏手刀について註に、

「昭和三十年五月小県郡大門村猿小屋星地籍の兩境峰に近い所から総長四八・七^寸^{一分}、身長三六・五^寸^{一分}、茎長さ一一・七^寸^{一分}、身幅四・二^寸^{一分}、鍔厚〇・五^寸^{一分}の鋒向刃の藏手の大刀を発見した。」

と記している。

また、蓼科山麓では、この他にも2振の藏手刀が発見されている。その1振は、昭和18(1943)



写真36 猿小屋出土の蕨手刀（東京国立博物館蔵）

年に現在の女神湖東岸の丘を削って赤沼溜池の築堤工事を行った際に、細身で長さ1尺4～5寸（約42～5cm）の蕨手刀が発見された。

そして、もう1振は、現在の筑波大学附属高等学校桐陰寮の上（現在の二松学舎寮前）で、昭和39（1964）年に大門石の採石作業を行っていた際に発見された。しかし、この2振は、現在散逸して全く行方がわからない。

この2振の蕨手刀が発見された地点、女神湖東岸と筑波大学附属高等学校桐陰寮の上は、いずれも鳴石・鳴石原・鍵引石などの祭祀遺跡を直線で結び、その線を南に延長した地点であり、祭祀遺跡と古道の関係を推考する重要な鍵となる発見である。

注

1 「北佐久郡志」第2巻歴史篇P79 北佐久郡志編纂会 昭和31年

7 出土遺物についての考察

雨境岬祭祀遺跡群の鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石などの5遺跡から採集した遺物は、かなりの量に及んでいるものと思われる。特に、勾玉原遺跡では、やや誇張があるにしても、忽ちメンバー一杯ほども拾えたと伝えられている。しかし、これらの採集遺物は、現在その殆どが散逸し、種類・数量は勿論、所在も明らかでない。

また、鳴石遺跡などで過去の調査によって採集された遺物は、その種類・数量が一部、あるいは全く示されていないものがある。このことは中与惣塚脇の鳴石原遺跡の採集遺物も同様である。

表5は、今回の調査で検出した遺物、および現在およそ確認できる採集遺物の数を集計したものである。

遺跡名	剣形	有孔円板	勾玉	白玉	管玉	須恵器	土師器	その他
鳴石	2	1	—	3	—	3	1	古銭4
勾玉原	9	1	—	25	—	6	多數	—
赤沼平	2	1	1	—	—	1	3	—
鳴石原	1	2	2	74	4	—	—	—
鍵引石	3	4	—	20	—	—	數個	—
池ノ平	2	1	—	—	—	3	6	古銭等

雨境岬の各 表5 萩科山麓の祭祀遺跡・採集遺物一覧表

図番号	形式	長さ	最大幅	孔数	孔間隔	備考
鳴石 1	A 2	32 mm	17 mm	無し	mm	根元・尖端欠
勾玉原 1	C 1	49	23	単孔		
2	C 1	40	20	双孔	6	
3	C 2	36	16	双孔	6	
4	B 5	30	13	単孔		
5	B 3	31	10	単孔		
6	B 5	32	10.5	単孔		
7	B 3	18	9	単孔		
9	C	—	19	単孔		尖端半分欠
10	B	—	15	双孔	3	尖端半分欠
鳴石原 1	C 1	39	19	双孔	4	
赤沼平 11	C 2	—	16	単孔		根元・尖端欠
12	B 3	—	10	無し		根元・尖端欠
池ノ平 19	C 1	30	15	双孔	2.5	
20	C 2	18	14	単孔		

表6 刺形遺物の形式別一覧表

遺跡、および池ノ平遺跡の確認できる出土遺物は、残念ながらこの採集遺物一覧表の数量であり、その全貌を知ることはできない。

蓼科山麓の祭祀遺跡は、蓼科山麓の渓谷への山道、蓼科山への登山道、あるいは坂普請用の土芝採取地の近くに所在する。そして、勾玉原遺跡の採集遺物は、多くは草刈りや芝焼きの際に拾ったと伝えられている。これは蓼科三塙と呼ばれる用

水堰の普請用土芝の採取と深い関係があるものと考えられる。この点が御坂峠や入山峠の遺跡の立地条件と大きく異なっている。

因みに、蓼科三塙の開削年代は、塩沢堰が寛永19(1942)年ころに和見堰、正保元(1644)年に本堰の開削に着手し、正保3(1646)年に完成している。そして、慶安年間(1648~51)には宇山古堰が開かれ、寛文2(1662)年には宇山堰と八重原堰が開発された。この蓼科三塙のうち宇山堰と八重原堰は、開発当初から小諸藩の篤い保護を受け、毎年春の巖普請には、領内42ヶ村から人足が出役し、蓼科の山麓に36棟もの普請小屋がつくられたと記録されている。

小諸藩の保護は、明治維新によって打ち切られるが、巖普請は最近構造改善事業によって堰道が改修されるまで、およそ300年余にわたって毎年続けられてきた。そして、堰普請用の土芝は、各地に土芝採取地を設けて、毎年交番に土芝を採取し、巖普請と呼ばれる堰普請が行われた。

図番号	形式	径 mm	孔数	孔間隔	備考
勾玉原 1	A	22	双孔	7 mm	
鳴石原 2	A	25	双孔	3	破片
3	A	—	—	—	破片
赤沼平 10	A	20	双孔	7	
池ノ平 18	B	45	双孔	22.5	

表7 有孔円板の形式別一覧表

この巖普請には、毎年各堰ごとに数十人の村人が出役し、それ以外にも堰筋の見回りなどに多くの人足が出役していた。従って、山道筋の遺跡や土芝採取地の周辺の遺跡は、絶えず多くの人たちの目に触れ、珍しい勾

玉・剣形・有孔円板などの祭祀遺物が、長い年月の間に年々採集されたものと考えられる。

夢科山麓の祭祀遺跡の採集遺物が、極めて少ない原因は、恐らくこれらの事情によるものと考えられる。そして、大正期から昭和初期にわたって、さらに多くのマニアとでもいうべき人たちが、競って遺物の採集に訪れたと伝えられている。

剣形の遺物は、記録上明らかな19個のうち、15個を実測した(図11-14~17・表6)。これらの遺物の特色は、柄部と剣身とをつくり、両面に鏑をつけて忠実に剣形を模造した形式は少なく、片面に鏑をついているB類が6、両面とも鏑のないC類が8、鳴石遺跡出土の1個はA類に分類したが、裏面の鏑は不鮮明で中央になく、B類に近い形式である。

しかし、剣身が極端に短く、剣形の形態を模造した形式的特色を

図番号	形式	径 mm	備考	図番号	形式	径 mm	備考
勾玉原 11	B	4.7		鳴石原 11	B	6	
12	B	5		12	B	5.5	
13	A	5		13	A	6	
14	A	6		14	B	6.5	
15	A	7		15	B	8	
16	A	4.7		16	B	6	
17	B	7		17	B	3.5	
18	A	5		18	A	5	
19	B	5.5		19	B	7	
20	B	6		20	A	5	
21	B	4		21	B	6	
22	B	6		22	A	4	
23	B	7		23	A	6	
24	B	6		24	A	6	
25	B	4.7		25	B	4	
26	B	5		26	A	5	
27	A	5.5		27	B	4.5	
28	A	5		28	B	4	
29	A	6.5		29	B	4	
30	A	5.5		30	B	5.5	
31	A	7		37	B	7	
32	B	5		38	B	6	
33	B	6		39	A	5	
34	B	7		40	B	5	
鳴石原 4	B	6		41	B	3.5	
5	B	6		42	A	5	
6	B	5		43	B	5	
7	B	4		44	B	5	
8	B	5		45	A	5	
9	B	4.5		46	A	5	
10	B	5					

表8 白玉の形式別一覧表

失う遺物は、池ノ平遺跡出土の1点（図17-20・表6-20）だけである。

神坂峠の出土遺物のA・B・C類の数量比は、3:5:5であるが、蓼科山麓の出土遺物の場合は、0.6:4:5.3であり、C類の比率が高い。これらの各形式が同時に使用されたのか、時間的な推移があるのかについては断言できない。しかし、池ノ平遺跡20の剣形遺物は、既に剣形模造品としての特色を失いつつあり、有孔円板との比較考証するとき、一つの示唆を与えている。

有孔円板は、現在確認できる採集数が10個で、うち半数の5個を実測した。勾下原遺跡の採集遺物は、極めて丹念に調製し、円形に整形して周囲を研磨しているが（図14-8）、赤沼平遺跡で採集された遺物は、整形・研磨とともに粗製である（図15-10）。雨境峠祭祀遺跡群の各遺跡から採集された遺物は、いずれも外周が円形に整形されたA類である。これに対して池ノ平遺跡で採集された遺物は、整形・調製とともに粗製で長方形に近いB類である（図17-18）。

池ノ平遺跡で採集された遺物は、剣形の形式の退化、有孔円板を円鏡の模造と考えれば、ここにも形式の退化と調製の簡素化がうかがわれる。

勾玉は赤沼平遺跡で採集されたA類の遺物1個（図15-9）と鳴石原遺跡で採集されたB類の2個（図16-31-32）がある。いずれもよく整形され、特に赤沼平遺跡の遺物は、研磨がすぐれ、実用品の装飾遺物と同質である。

採集された白玉は、122個を確認しているが、勾玉原遺跡の24個、鳴石原遺跡の37個、計61個を実測した。このうち胴部に膨らみのあるA類が21個、残りの40個は管玉と輪切りした形態のB類であり、その比率は、およそ1:2の割合である。また、A類形式のうち胴部に稜線をつくる形式は認められない。

白玉は、これを径が5mm以上の大形、4mm程度の中形、3mm程度の小形に分類すると、大形が48個・中形が11個、小形が2個で、78.7:18:3.3の割合であり、大形の割合が極めて高い。

以上蓼科山麓で採集された遺物を概観したが、雨境峠周辺の遺跡出土の遺物と白樺湖畔の池ノ平遺跡出土の遺物とは、扇形の石器などの種類、祭祀遺物の形式に明確な違いがうかがわれる。池ノ平遺跡の出土遺物には、内面黒磨の土師器の碗など、8世紀以降にわたる遺物が含まれている。

これに対して雨境峠遺跡群の須恵器、および土師器は、6世紀から7世紀初頭ころに比定されるものが主体である。赤沼平遺跡出土の遺物には、さらに年代が遡るとみられる遺物が含まれている。従って、雨境峠の祭祀遺跡群の年代は、現在ある資料によれば、およそ6世紀が上限と考えられる。

そして、鳴石遺跡と鍵引石遺跡は、巨石を磐石として築き、檀の木を勧請木として蓼科の神・峠の神を招き降ろして奉斎した祭祀遺跡と考えられる。また、鳴石は、この位置にあった自然石を利用した祭祀遺跡と考えてきた。しかし、石質の精査・大きさなどの検証によって、別の巨石を鏡餅状に重ねて築いた人工的遺構であることがわかった。下の巨石は、よく似た青灰色閃石輝石安山岩であるが、溶岩構造・大きさなどに差があり、この異なる2つの不整合な巨石を重

ねていることが、鳴石と呼ばれる妙なる反響音を出す原因であるとも考えられる。そして、鳴石の周間に築かれた集石遺構は、神を祀る神聖な場所を区画する磐境と考えてよいであろう。

鳴石遺跡の発掘調査の成果は、鳴石が人工的な遺構であること、その周間に人為的な集石遺構が築かれていたことなどの発見である。そして、従来曖昧であった勾玉原遺跡の位置についても、三角点の位置と土器類などの出土遺物を総合的に判断して、郡境附近の丘陵上であることが確認された。古東山道の研究も、これらの遺跡の検証によって、さらに前進することが期待できる。

そして、今回の調査は、さらに、赤沼平遺跡の存在、箕輪平遺跡の発見など、今後の研究と遺跡保存の大きな端緒を得たものと考えられる。今後各所に散在している祭祀遺物を確認し、現地を精査して、一層精緻な調査研究を期待するものである。

注

- 1 山部区編『大嶽小屋絵図』
- 2 大場鶴雄『神坂峠』 阿智村教育委員会 昭和44年

V 中世の石塚（ケルン）

1 歴史的環境

蓼科山麓の雨境峠は、江戸時代には甘酒峠とも記されている。この雨境峠には、法印塚・中与惣塚・与惣塚と賽ノ河原などの中世の祭祀遺跡がある。

法印塚などの石塚の呼称については、必ずしも定説はないが、実態は石積みの塚である。本稿では、古墳の積石塚との混同を避けるため、実態に添って石塚（ケルン）の名称を用いることにした。

この石塚（ケルン）のうち、法印塚と中与惣塚は、雨境峠の頂上（最高標高点1,878.2m）の北側に、与惣塚と賽ノ河原は頂上の南側に集かれている。



図19 雨境峠・中世石塚（ケルン）等分布図

中与惣塚は、昭和41(1966)年に新産都市等開発地域埋蔵文化財分布調査の一環として調査が行われ、御正体や埴輪・古鏡など、多くの遺物を採集している。

御正体は、神社に御神体として祀られていた鏡に仏像や種字（梵字）を描いたり、彫りつけたりして札押したのが祖型である。中与惣塚から出土した御正体は、径が3cm～6.5cmの青銅製の円板で、厚さが1mm程度のやや厚手のものから、ペラペラするほど薄いものなどがある。しかし、仏像などを描いた痕跡はない。

蓮鎌は、諏訪大社に関係のある祭祀と考えられる。出土遺物は、馬の頭部・頸部を型取ったもので、祈雨祭に関係するものともいわれている。そして、中央の平石の周辺から角釘が出土し、この平石の上に祠を建てて、尊崇する水神・

蓼科神を祀り、畏敬する蛇の神・岐神を祀って祈願した祭祀の場であったと考えられる。

石塚(ケルン)は、大小の礫を積んで築かれ、頂上附近には樅の木が植えられている。樅の木は、蓼科山麓における古代の祭祀遺跡にもみられるが、諏訪地方では古くから「讃えの木」と呼ばれる神聖な



写真37 法印塚の全景

木であった。雨晴蛇の石塚(ケルン)は、蓼科の神を祀る祭祀の場であり、佐久と諏訪を隔てる長い時道の最大の難所でもあった。

(I) 法印塚

法印塚は、鳴石遺跡のS-22°W、直線距離にしておよそ680mの位置にあり、与惣塚地帯の郡境丘陵の最高地点から北東へ200mほど下った緩い北東斜面の拠部にある。石塚(ケルン)の南西部には、標高1,575mの等高線が通り、東際には南北に走る古道跡が残り、県道諏訪・小諸線がその35mほど東側を通っている。

法印塚の周辺は、広い平坦面で、50mほど北方から北東方に向って傾斜が急になり、勾玉原地籍の窪地に続いている。

法印塚の頂上には、桜の老木と若い樅の木が生え、この辺りから東側には、落葉松が植林され、地面は丈の長いクマザサが寄生している。石塚(ケルン)の保存状態は、調査前の外観からは比較的良好と観察された。しかし、調査の結果は、石塚(ケルン)が頂上の2箇所を深く抉られ、南北両面の石積みもかなり壊されていることが判明した。このことについては、「遺構」の項で詳述したい。

法印塚に関する古記録は、宝曆4(1754)年の小諸藩土留垣市右衛門の蓼科山見分の記事『立科山覚附』に、

「右鏡石より少し登り右の方に傾城塚有り、此塚向合ひに与惣大塚といふ有り」とある。この史料には、法印塚の名称ではなく、「傾城塚」の名で記されている。しかし、「此塚向合ひに与惣大塚といふ有り」という記述と与惣塚の位置関係から推考して、法印塚のことと考え

られる。しかし、その他の古記録には、法印塚の記事は見当たらない。

法印塚の調査は、昭和41年に新産都市等開発地域文化財緊急分布調査の一環として桐原健氏らによって行われ、その『報告書』と雑誌『信濃』に、

「中与惣塚から勾玉原を通りこして佐久側へ一五〇米下ったところに法印塚（山伏塚）がある。

現在は県道より左手に相当入って熊笹に埋もれているが、旧道はこの前を通っていたらしい。

丈なす熊笹で縫合はできなかったが、高さ一・五メートル、径十二メートル、土盛りをしてその上に石塊が積まれている。頂上には若い山桜が根元よりささら状に分れて生えている。」

と記し、「法印塚（山伏塚）」と記している。

これに対して大場磐雄氏は、著書『まつり』に、

「俚俗山伏塚とも中与惣塚とも呼ぶ」

と記し、山伏塚を中与惣塚としている。山伏塚の名称は、立科の人たちの間では全く知られていない。恐らく大場氏を案内した諏訪の人たちの間に伝わる別称であろう。しかし、山伏塚と呼ばれていたのは、どちらの石塚（ケルン）であるか明らかでないが、恐らく後者であろう。

立科町教育委員会は、町誌編纂事業とも関連して、平成5年の夏に雨境峰祭礼遺跡群の調査を実施し、法印塚についても同年に現状の把握と規模の確認、性格の解明に重点をおいて発掘調査を実施した。

(2) 中与惣塚

中与惣塚は、法印塚のS-20°-W、直線距離にしておよそ150mに位置し、県道諏訪・小諸線の東側に「雨境峰頂上」の標柱のある地点の西沿いにある。この附近の標高は、およそ1,577m、峰の最高標高点1,578.2mの北方およそ100mに位置し、東側は蓼科牧場の広い緩斜面が続いている。



写真38 立科町指定文化財・中与惣塚の全景

中与惣塚の東側一帯は、雨境峰の最も広い平坦面で、南北は中与惣塚の少し北寄りの標高1,575m附近から与惣塚東南方の標高1,580m附近におよぶおよそ400mの範囲、東西は与惣塚の西方150m附近から北東方の標高1,570m附近にわたる450mの範囲が、僅か

に北東へ緩傾斜する平坦面である。

中与惣塚に関する歴史的な記録はないが、金子證寅著の『信陽佐久立科高井飯盛山嶺麓 萬田八箇略誌』の「与惣殿原並塚の事」に、

「此原にて木曾殿在陣中、今井与惣死し故に言う」

とあり、さらに、小県祢津の四の宮城主根津神平と諏訪高嶋城主の姫との悲恋の伝承をはじめ、北条氏直が萬田氏を攻めた折の陣塚、あるいは、

「甲斐武田信玄大門峠の合戦の時、此處に陣屋を構え、雜兵夜々騒ぎし故に、夜騒動の原とも言う。」

など、真偽計りかねる伝承を載せ、「野方冠者宮の古事」の項にも、

「木曾義仲討死し給へしより家族散々に成りし時に今井四郎兼平の嫡子今井与惣兼連と言うあり。(中略)父も君も討死し給いしと聞きしより身の置き所なく如何せんと思うおりから、若宮も鎌倉を落させ給う由聞いて何卒行末を尋ね奉らんと思い立ち遂に東路へ心懸ける下人一人連れて漸くここ立科山の麓に至る時俄に心地悪くなりて既に落命に及びける。(以下略)」
と云う今井与惣兼連の伝承などを載せている。

中与惣塚は、前述のとおり昭和41年に新産都市等開発地域文化財緊急分布調査が行われ、詳細な調査報告書が刊行されている。そして、立科町では、この調査結果をもとにして、昭和42年5月1日に中与惣塚を町の指定文化財・史跡に指定している。また、立科町教育委員会では、平成5年度から2カ年にわたり、町誌編纂事業とも関連し、文化庁の国宝重要文化財等整備費補助金を受けて、兩境峠祭祀遺跡群の発掘調査を行い、中与惣塚・与惣塚・勾玉原遺跡などの調査は平成6年の夏に実施した。

(3) 与惣塚

与惣塚は、兩境峠の頂上(標高1,578.2m)から南に160mほど下った主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の西際にあり、中与惣塚の北方から続く平坦面の南西部、標高1,575.6m附近に位置している。石塚(ケルン)の周囲は雑草が茂り、西側が落葉



写真39 南東から見た与惣塚の現況

松と白樺の混合林になっている。

この石塚（ケルン）は、主要地方道諫訪・白樺湖・小諸線の工事の際に、東側のおよそ3分の2と北側の約420cmの範囲、そして、南西部分も大きく抉り取られている。このため正確な計測は困難であったが、幸い裾部を精査したところ、北と西、及び南側の基礎部分の石積みが残っていたので、およその規模を知ることができた。

この石塚（ケルン）は、与惣塚と呼ばれているが、地図上では北方の中与惣塚が与惣塚と記され、この石塚（ケルン）は記入されていない。

(4) 賽ノ河原

賽ノ河原は、鍵引地蔵の北東端にあり、与惣塚の西南方およそ360mの位置にある。この一帯は雜草が茂り、地蔵尊が主要地方道諫訪・白樺湖・小諸線の西脇の森の中に立っている。宝暦4年的小諸藩主稻垣市右衛門の「立科山覚附」にも、

「東サイノ川原と云う有り、則地蔵右之方ニ有之」

と記され、当時から地蔵尊が立っていたことがわかる。また、江戸時代の道は「東サイノ川原と云う有り」とあるので、現在の道路よりかなり西側を通って赤沼に下っていたことになる。

地蔵尊も「地蔵右之方ニ有之」とあるので、江戸時代の道の右（西）側、現在の位置より100mほど西方に入った場所ということになる。しかし、賽ノ河原の記事には、法印塚や与惣塚のような石塚（ケルン）の記述はない。

賽ノ河原附近は、標高がおよそ1,582mで、主要地方道諫訪・白樺湖・小諸線の東方250mに、標高1,620.1mの小円頂丘があり、現在つづじが丘と呼ばれる別荘地になっている。道路はこの別荘地の西側を大きく迂回して約1kmで女神湖の東岸に達する。

賽ノ河原は、現在の道と江戸時代の道のはば中間に、径数mの巨岩が累々と重なり、一帯はいわゆるゴウロ（岩場）である。前掲『踏査報告書』は、

「現在は石塚なるが故に道路整備用礫としてブルトーザーにより削られ、押されて、四分の一程度しか残っていない。関係者の話から復元すると、径二〇m、高さ二メートルほどのケルンとなり、規模は後述する三基より大きくなる。」⁶

と記している。しかし、大場磐雄氏の著書『まつり』には、

「私たち一行は、(中略) 賽の河原にいく。累々たる大小の石塊が、ゆるい傾斜面一杯に布置されて、文字どおり河原の状態を呈し、かたわらに地蔵尊が立ち、その周囲には礫が積まれかつ横の古木が立っている。ここは峰の人口(山口)にあたっているので往來の人々は石片を拾って積み重ね、親に先立った幼児を弔らうのであると伝えている。(中略) 道の左側に古墳状のものが三基あり、」

と記している。しかし、大場氏の記述には、「立科山覚附」と同様に石塚（ケルン）に関する記述

はない。大場氏がこの地を調査したのは昭和8年であり、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の工事より30年も前である。

賽ノ河原には、現在も法印塚や与惣塚のような石塚(ケルン)の痕跡はなく、地蔵尊の周囲に積まれた礫と巨岩が主体である。また、児玉司農武氏は、この附近から寛永通宝3枚を採集している。

注

- 1 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査報告書」
立科町教育委員会 昭和41年 「町の文化財」 昭和48年
- 2 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」「信濃」第19巻第6号
- 3 大場磐雄「まつり」 学生社 昭和42年 P78
- 4 注1と同じ
- 5 注1と同じ
- 6 注3と同じ

2 遺構と出土遺物

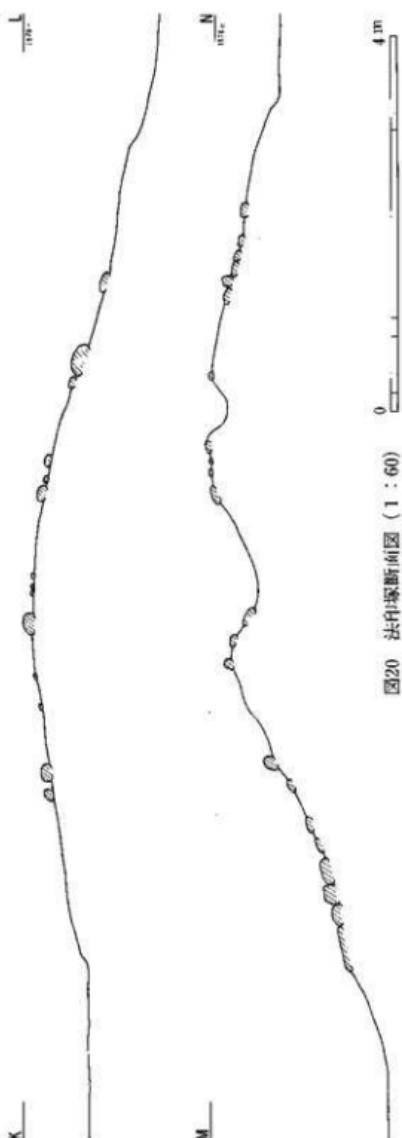
(I) 法印塚(別図2・図版II)

法印塚の調査は、不順な天候と鳴石遺跡の調査面積の拡大によって、予定より大幅に遅れて8月9日にグリッドを設定し、8月12日から開始した。調査はまず密生していた下草を刈り石塚(ケルン)南東裾部から4mの地点を基点A1とし、磁北方向に1~9、それと直交する東西方向にA~Jの2m×2mのグリッドを設定し、実測時にはこのグリッドを4分し、1m×1mのグリッドに分割して計測した。

調査は、石塚(ケルン)の頂上部から次第に裾部に向って調査し、遺物の検出と裾部の位置の確認に努めた。また、東裾部では、石塚(ケルン)の脇を南北に走る古道を確認するため、調査区を東側に



写真40 南東方向から見た法印塚



拡張して精査した。法印塚の調査面積は、結局石塚周辺部の調査区を含めて、およそ290m²に達した。

発掘調査は、遅れている調査日程も考慮し、調査の目的である遺跡の範囲の確認、石塚(ケルン)の現状の把握、石塚(ケルン)の性格の解明に重点を置いて実施し、表面の芝土(覆土)を除去して礫面を検出することから始めた。

石塚(ケルン)は、芝土を剥ぐと、長径30cmほどの比較的大きな角礫が、南と北の裾部に散乱し、あたかも双方墻のような形が現われた。しかし、これは調査の結果、いずれも石塚(ケルン)表面の礫が、人為的原因によって崩落したものと認められた。

法印塚の規模は、南・北両面が大きく崩されているため、正確な計測は困難であったが、東裾部は比較的よく原形が残り、西側の裾部の葺石も原位置を示し、基礎の石積みもほぼ完全に残っていた。

石塚(ケルン)の規模は、これらの地点を基準にして計測すると、東西径が10.2m、南北径が10.4mで、ほぼ円形に集かれているものと認められる。高さは、地山の泥流層が東側に8°ほど傾斜しているので、東裾部からは195cm、西裾の基盤から80cmを測る。なお、東裾部に接して古道跡が南北に通っているため、この部分の調査は褐色土層(第2層)上面を検出面とし、地山の泥流層までは掘り下げていない。

法印塚の構造は、礫面を削って塚の断面を調査していないが、中与惣塚と与惣

塚の調査結果を参考にして、平成6年に再調査を実施した結果、大小の礫を直接表土層の黒色土の上に積んで築き、盛土をしていないことが確認された。

石塚(ケルン)の礫は、蓼科山の安山岩を用い、大部分が拳大ほどの円礫を用い、部分的に90cm×30cm、あるいは40cm×40cmの大きな角礫も使われている。特に、大きな角礫は、石積みの裾部に用いる場合が多く、東側面では、大きな角礫を階段状に積んで石塚(ケルン)を築き、石積みの構造がよく残っていた。

法印塚の保存状態は、前述のとおり石塚(ケルン)の南面、および北面の石積みが崩され、大きな角礫が広い範囲に散在していた。また、頂上附近のF4グリッドには、長径170cm、短径70cm、G4グリッドには長径80cm、短径45cmの大きな穴があり(図20)、いずれも人為的な破壊の痕跡と考えられる。

法印塚周辺の地層のプロファイルは、東側の古道と推定される地点では、10~25cmの芝土を含む黒色土層(第1層)の下層に15cm前後の褐色土層(第2層)があり、その下層に黄褐色の泥流層(第3層)が続いている。古道推定地面以外の地点では、20cm前後の表土層の芝土を含む黒色土層(第1層)があり、その下層は直ちに黄褐色の泥流層(第3層)に続いていた。

この調査は、限られた日程の中で、石塚(ケルン)の礫表面の芝土を除去して、石塚(ケルン)の規模、石積みの状況をできるだけ正確に把握するよう努めた。しかし、石塚(ケルン)を掘り割って内部の構造を確認する調査は行っていない。その意味では、石塚(ケルン)表面の清掃調査の域を出でていない。

石塚(ケルン)内部の構造と構築法の調査は、学問的に興味はあるが、必然的に石塚(ケルン)の破壊をともなうので、今回の調査の目的に添って、内部構造の調査は割愛することにした。

今回の調査は、以上述べたように、石塚(ケルン)表面の調査ではあったが、礫上面からの遺物は全く検出されていない。石塚(ケルン)頂上は、かなり擾拌された形跡があり、今後も遺物の検出は余り期待できない。

法印塚の築造年代は、推定の根拠となる出土遺物がないので明らかでないが、構造的にみて中与惣塚と類似し、中与惣塚とも余り大きな差はないものと考えられる。

(2) 中与惣塚(別図2・図版III)

中与惣塚は、丈の長い草に覆われ、僅かに町指定文化財の説明板と周囲の柵が、その所在を示していた(図版III右上)。発掘調査は、石塚(ケルン)上の草刈りを行い、7月25日に石塚(ケルン)の南端から4mの地点を基点A1とし、東側の柵の走行方位を基準にして、1m×1mのグリッドを南~南西にA~Lグリッド、南~北西1~18グリッド設定し、石塚(ケルン)の頂上から裾部に向ってF8グリッド(修正グリッド番号F15)附近から調査に着手した。しかし、調査の進行とともに南側に調査区を拡張して7グリッドを増設し、北側と西側にも石塚(ケルン)の裾部が

B
 $\frac{m}{m}$

D
 $\frac{m}{m}$

F
 $\frac{m}{m}$

H
 $\frac{m}{m}$

J
 $\frac{m}{m}$

L
 $\frac{m}{m}$

N
 $\frac{m}{m}$

P
 $\frac{m}{m}$

R
 $\frac{m}{m}$

T
 $\frac{m}{m}$

U
 $\frac{m}{m}$

V
 $\frac{m}{m}$

W
 $\frac{m}{m}$

1. 泥土(黑色上)
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土(黄色上)
4. 黄褐色土(黄色上)

A
—

C
—

E
—

G
—

I
—

K
—

M
—

O
—

Q
—